

ゾルゲ = 尾崎事件：歴史社会的アプローチ

平川幸雄

I 問題の設定

1. 尾崎秀実の検挙：「これで一切が終わった」

1941年10月15日水曜日の朝、尾崎秀実（1901-44）は目黒区上目黒の自宅で読書中、高橋与助警部率いる特高刑事の一隊に踏み込まれて検挙され、そのまま目黒署に連行された。

尾崎はこの検挙の時の状況について、いくつかの記録を残している。その要点を引いておこう。

まず尾崎が獄中から妻英子と娘楊子にあてた手紙には、次のように書かれている。——「私は朝食後私の部屋で陽光を浴びながら、早大出の経済記者で戦死した人（＝阿江一友）の遺著『不死鳥』という手記を読んでいた。そのときお迎えの人たちがどやどや入ってきました。再びこの家に帰ることはない、振り返って英子の顔を見る勇氣はありませんでした。「楊子はもう学校へ行ったか」と聞いたのは、楊子にその場の有様を見せたくないと思ったからでした。今度の出来事は、実は私にとって遠くから定まったことでした」⁽¹⁾。

尾崎が裁判所にあてた「上申書」には、この日が「私の生涯の総決算の日」であったと、その前後の不安と覚悟が述べられている。——「昭和16年10月15日朝、検事の一隊に襲撃されました。これより前二、三日の間私には多少不安な予感がありましたが、このとき大体において、私の生涯の総決算の日が来たことを覚悟しました。そのときの気持ちはこれで一切が終わった。すべて断つのだという感じでありました。その日の午後

取調をうけたとき、問題が果たしてゾルゲ関係であり、すでに一切の本質が明らかにせられていることを知ったとき、「万事終わる」と心のうちに叫んだのであります」⁽²⁾。

2. ゾルゲ = 尾崎事件の司法省発表：「ゾルゲ等に係わるいわゆる国際諜報団事件」

しかるに、この事件、すなわち当時の官憲の呼称によれば「ゾルゲ等に係わるいわゆる国際諜報団事件」は、事件直後に新聞に発表されたのではない。この事件は、「諜報団の主要メンバー」が逮捕されてから7カ月後の1942年5月16日午後5時、司法省により発表された。司法省が慎重に言葉を選んで事件の概要を公表した（この原稿の執筆は東京刑事地方裁判所・吉河光貞検事の手になるものとされる）。翌5月17日、朝刊各紙は、一面にゾルゲ = 尾崎事件を掲載した。

この事件の司法省発表、すなわち、その公式の記事内容をここに要約しておこう。

第一に、国際諜報団の中心分子はリヒアルト・ゾルゲ（Richard Sorge、47歳）、フランコ・ド・ヴーケリッチ（Franco de Vucelić、48歳）、宮城与徳（40歳）、尾崎秀実（42歳）、マックス・クラウゼン（Max Klausen、44歳）の5人である。この5人に対し、検察は、国防保安法、治安維持法、軍機保護法違反の罪名によって東京刑事裁判所に予審請求の手続きをとった。

第二に、ゾルゲは「コミンテルン本部」（共産主義インターナショナル、第三インター）から「赤色諜報組織」を確立せよとの指令を受けてい

た。ゾルゲはまず、同様の指令を受けていたヴァケリッチを仲間に入れ、順次、宮城、尾崎、クラウゼンをこれに加入させ、その組織を強化した。

第三に、こうして確立・強化した「内外の共産主義者からなる秘密諜報団体」を結成し、長年月にわたって合法を偽装し、巧妙な手段により日本の国情に関する秘密事項を入手し、「コミンテルン」に通信連絡、提報していたものである。

そして第四に、政府上層部にいる者がこの「国際諜報団事件」に関係している、と書かれている。すなわち、外務省嘱託西園寺公一、参議院議員犬養健が、「尾崎に利用され、情を知らずして秘密事項を尾崎に漏洩した」というのである。この両名には、外国に機密事項が漏洩されるという「情」を知らずして、秘密漏洩をした嫌疑が十分にあり、東京刑事地裁に予審請求の手続きをとったと発表した。

政府上層部の側近が「コミンテルン」に通じていると報じたこの司法省発表は、日米開戦直後の日本人の度肝を抜いた。政府上層部に近い者が国防を脅かすような行為をしたことに対して、多くの国民は憤激を隠さなかった⁽³⁾。

3. 司法省発表の問題点：「コミンテルン本部の指令下にある赤色諜報組織」

新聞に掲載された1942年5月16日付の司法省発表は慎重に言葉を選んで書かれ、何度も書き直された上で公表に及んだものである⁽⁴⁾、⁽⁵⁾。この声明を発表した理由は、いくつか考えられる。尾崎秀実は一時、近衛文麿内閣の嘱託であった(1938-39)。その友人、犬養健、西園寺公一も近衛の側近で懐刀であった。彼らの逮捕は日本政界の中枢部にまで及ぶ危険性をはらんでいた。軍部の力の台頭を前に、近衛の政治生命は危機に直面した。しかし、犬養、西園寺にまで検挙の手は伸びていたが、彼らの検挙に踏み切らせた情報源は巧妙にも隠されていた。

一方、ゾルゲ・グループは「コミンテルン本部の指令下にある赤色諜報組織」と一括りに表現さ

れている。ゾルゲは、訊問の過程で、自分の本当の所属と地位は「ソヴィエト赤軍第四本部の情報将校」であると供述しているにもかかわらず、日本の司法当局は、あえてゾルゲとその協力者を「コミンテルン」のメンバーであるとの「フレーム」をつくりあげ、執拗にこれにこだわった。それはなぜか。この問いに対しては行論の中で答える必要があろう。

新聞各紙に一斉に掲載された司法省発表の文章を仔細に検討してみると、いくつかの問題点が浮かび上がってくる。

第一に、諜報活動の情報源が日本政府およびドイツ大使館の中枢部にあるにもかかわらず、この事実が隠蔽されていることである。この事実はなぜ隠されたのか。

第二に、新聞発表は、赤軍第四本部＝ソ連軍事情報機関あるいはソ連政府について、いっさい言及されていない。日本政府がいたずらにソ連を刺激し、ソ連を敵に回すような言動を意図的に避けたように読める。コミンテルンと赤軍第四本部＝ソ連情報機関とはどういう関係にあったのか。これも重要な問題であると思われる。

第三に、国際諜報団の主要分子が、すべてコミンテルンのメンバーであると書かれている。果たしてこの事件は、コミンテルン＝国際共産主義組織の日本転覆計画と見てよい事件なのであろうか。主要分子は、果たしてコミンテルンに所属していたのであろうか。また、この事件公表の背後には、日本の国家経営をめぐる司法省と軍部との対立・抗争があったのではないか。さらに言えば、司法省ないしは日本政府が治安維持法をフルに活用してこれを拡大解釈し、この事件関係者をすべて「国家転覆者」と見なして、検挙・拘禁したのではないか。

第四に、西園寺と犬養は、「事情」を知らないで秘密事項を漏洩したという嫌疑はあるが、彼らは「内情」を知らないでやったことだと意外に軽く見られている。その背後には、実は政治をめぐる微妙な動きがうごめいているのではないか。

第五に、諜報メンバーが政治の中枢部に侵入し食い込んで、国家の最高機密を外国に流しているという事件発表それ自体が、日本政治の屋台骨を根底から揺さぶるような恐るべきことがらであった。国家の中枢部に情報グループがいかにして侵入したのか。情報スパイの侵入を国民が知った場合、その動揺は計り知れないものがある。政治不安を招く危険性がある。この問題も、やはり解明しておかなければならないであろう。

4. 警察・検察側の暗中模索：「どこの国のスパイか」

以上、司法省発表の中から思いつくままに、問題点を列挙した。これらの問題点については、以下の行論のうちに、直接間接に明らかにしていくつもりである。

ゾルゲの担当検事は、弱冠34歳の吉河光貞であった。リヒアルト・ゾルゲという、この著名なドイツ人拘置には、日独間の微妙な外交問題に発展しかねない危険が内包されていた。吉河は当時を回想して次のように語っている。——「政治的・外交的にプレッシャーがあった。私としては一刻も早く真相を突き止めねばならなかった。内閣が交替して（近衛氏から）東条氏が政権を握ったおかげで、この事件にフタをしておくことができた」のであった⁽⁶⁾。

実際、この事件については報道管制が敷かれていた。吉河検事とともに、この事件に係わった特高警察の大橋秀雄警部補によれば、ゾルゲに「報道は一切差し止められている」と伝え、ゾルゲは「一般に知られたくない。報道しないなら諜報活動について話してもかまわない」と突然言い出した。ゾルゲが自供をはじめたのは、逮捕から5日目あたりの1941年10月24日か25日からである。ゾルゲは紙と鉛筆を要求した。——「ドイツ語で自分は1925年以来共産主義インターナショナル（コミンテルン）の一員であったと書くと、「おれは負けた」といって不意に泣き出した」⁽⁷⁾。

吉河検事はこの場に立ち会っているが、ゾルゲ

の証言は周到に計算され演出されたもので、戦略的であった。吉河検事の頭を悩ませたものは、つぎのような事柄であった。——「問題はどこの国のスパイか。実際にはナチスのスパイではないか。それが第一の問題である。第二は、ゾルゲはベルリンとモスクワの二重スパイではないか。そして第三に、彼はナチスを装ったモスクワのスパイではないか。このために先入観を一切排して、慎重にも慎重を期して臨んだ」⁽⁸⁾。

吉河は暗中模索の中で、日夜、悪戦苦闘した。そうした苦闘のすえに、吉河は、第三の予測、すなわち「ナチスを装ったモスクワのスパイ」ではないか、というゾルゲの正体にやっと近づくのである。それは事件を焦点化し、事件の本質解明に迫る粘り強い努力の結果だと言っていい。問題の核心に近づいたとき、吉河は確かな手応えを感じ、疲れを伴った安堵感を体験したに違いない。

ゾルゲを担当した吉河光貞検事の訊問調書にもとづきつつ、それを受けた中村光三予審判事の鋭い訊問が法廷で続けられた。中村判事の執拗で鋭い訊問は、以下の叙述の中でしばしば引用することになるであろう。

5. 問題の設定：「歴史の恐ろしさ」

本稿は、ゾルゲ＝尾崎事件の全貌を語ろうとするものではない。本稿の語ろうとする問題を設定しておく、以下のようになるであろう。しかし、設定したすべての問題について答えることはできないかもしれない。このことをあらかじめ断っておきたい。

第一に、情報グループのメンバーはどんな動機からこの運動に参加したか。

第二に、情報グループはどのように組織されていたか。

第三に、この情報グループはどこから機密情報を得たか、その情報源をどこに見出したか。その情報はどういう手段を使って、どこへ発信され、誰が受信したか。

第四に、ゾルゲ＝尾崎グループの行った情報活

動の内容、「最大の情報活動の成果」は何であったか。

第五に、この事件発覚の糸口はどこにあったか。事件の全容はいかにして暴かれていったかという、ミステリーに満ちた謎解きにも挑みたい。

そして最後に、われわれにとって最も刺激の問題は、小グループで行われたと見られる一つの諜報=情報事件が、調査・訊問を繰り返す中で、世界的規模の広がりをもつ現代史の大事件であることが判明していく、その過程にある。これは歴史のもつ恐ろしさとも言うべきものであろう。

こうした問題設定によって、「ゾルゲ=尾崎事件」の正体を明らかにしていきたいと思う。以上が本稿を書き起こすに当たって念頭にあったテーマである。これらのテーマは以下の叙述のなかで次第に明らかにしていくつもりであるが、必ずしも順番にこだわってはいない。

本稿の史資料は、もっぱら、①『現代史資料』1~3、24(みすず書房、1962-71年)に依拠している。

尾崎秀実自身の著作は、主として次のものを参照した。②尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』(岩波現代文庫版、2003年;世界評論社版、1946年)。③岩波版には、尾崎の親友、松本慎一「尾崎秀実について」(世界評論社版初版所収、1946年)、ならびに④尾崎の妻、尾崎英子「夜明けの近きを信じつつ」(世界評論社版所収、1946年)が収録されている。

獄中の尾崎、ゾルゲの手記としては、⑤尾崎秀実『ゾルゲ事件 上申書』(岩波現代文庫版、2003年)、⑥リヒアルト・ゾルゲ『ゾルゲ事件 獄中日記』(岩波現代文庫版、2003年)。

研究文献として注目すべきものに、次のものがある。⑦ディーキン=ストーリィ、河合秀和訳『ゾルゲ追跡』上・下(岩波現代文庫版、2003年;筑摩書房版、1980年)=F.W. Deakin and G. R. Storry, *The Case of Richard Sorge*, Chatto and Windus, 1957, 1966. ⑧ワイマント、西木正明訳『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』上・下(新潮文

庫版、2003年)=R. Whyment, *Years of the Snake: The Search for the Real Richard Sorge, Stalin's Greatest Spy*, 1995.

尾崎秀実の古典的評伝として、友人の風間道太郎の著作は逸することができない。⑨風間道太郎『尾崎秀実伝』(法政大学出版会、1968年、改装版1995年)。

同時代の雰囲気を知る上で貴重な日録がある。⑩清沢列『暗黒日記 1942-1945』(岩波文庫版、1990年;全文はちくま学芸文庫版に収録)。

同時代の思想状況を、膨大な資料を駆使して描いたノンフィクション的文学作品も見逃せない。

⑪石川達三『風にそよぐ葦』前・後(1949-50)(新潮文庫版、1950年)。

異母弟の執念の著作として、次の一点を挙げておく。⑫尾崎秀樹『生きているユダ』(八雲書店、1959年)。

以上が主な文献資料である。

II ゾルゲ・グループの最期

6. 尾崎の最後のはがき:「僕も勇を鼓して寒気と戦うつもりでいます」

1944年11月7日朝、尾崎秀実は妻英子、娘楊子宛にはがきを書いた。——「お父さん(=尾崎秀太郎、秀真と号する)がとうとう船便を求めて台湾にお帰りになった。父上にしても故郷(=岐阜)には今度は幻滅を感じられた。近来警報すこぶる頻々。今年は薪炭も一層不足することでしょう。僕も勇を鼓してさらに寒気と戦うつもりでいます」⁽⁹⁾。

このはがきは尾崎の絶筆となったものである。尾崎は当日の朝7時頃、このはがきを書いた。そして独房へ帰って間もなく、突如呼び出された。11月7日8時51分、尾崎は絞首台で絶命した。

尾崎は死を覚悟して、弁護士竹内金太郎宛にすでに「遺書」を書いていた(1944年7月26日付)。——「私が妻子にただ一つ大きな声で叫びたいことは、「一切の過去を忘れよ」「過去を捨てよ」と

言うことです。——私には迫り来る時代の姿があまりにもはっきり見えているので、どうしても自分や家庭のことに特別な考慮を払う余裕がなかったのです。——私の最後の言葉をもう一度繰り返したい。「大きく目を見開いてこの時代を見よ」と。これこそは私に対する最大の供養であると、どうぞお伝えください⁽¹⁰⁾。

尾崎はこの弁護士宛の「遺書」を書く直前の7月17日、英子と楊子宛に手紙を書いている。そこには彼が努力して到達した禅的な人生観が述べられている。それは決して悟達といえるものではない。尾崎が修行にも似た獄中読書を通じてついに到達した「静かなあきらめ」といっていいであろう。——「私の人生観の一端を語っておきたい。この短い人生を力いっぱい現実即して生きよ。須臾なる生命をもって無窮の宇宙に生きる。有限の身を以て無限の中に生きんと欲する」。この手紙もまた、妻子に直接宛てた遺書と読めるものであろう⁽¹¹⁾。

11月7日の深更、妻英子は尾崎の死の知らせをうけた。翌8日二人の弁護士（堀川祐鳳・竹内金太郎両弁護士）とともに下落合の火葬場で遺骸を受け取った。ところがその二、三日後、死者となった尾崎からののがきが上目黒の自宅に届いたのである。「あたかも生きていた人から来たかのように。それっきり、もう一通の手紙もこなくなりました」。彼女の前には、色も何もない、空虚な時間と空間が味気なく広がった⁽¹²⁾。

付き添った竹内弁護士によると、英子夫人は、遺骸を引き取り、骨にして持ち帰るまで涙一筋見せなかった。夫がひとかたまりの白い灰となって現れたとき、変わり果てた姿に眼をしばたいた。竹内弁護士は「何という気丈な婦人だろう」と思った。恐るべき苦難に直面して、彼女は人前ではみじんも動揺しなかった⁽¹³⁾。

7. 有力メンバーの逮捕と最期

この事件の有力メンバーの一人とみられる沖繩出身の画家、宮城与徳（1903-43）は、1941年

10月10日の明け方、六本木の下宿で寝ているところを特高一課の刑事に踏み込まれ、蒲田から引きずり出されるようにして検挙され、築地署に連行された。肺結核を病んでいた宮城は、「宣告なし」のまま、1943年8月2日、東京拘置所（巣鴨刑務所）で死亡した。

リヒアルト・ゾルゲ（1895-1944）は、1941年10月18日の朝6時30分頃、赤坂の自宅で、待機していた特高警察の大橋秀雄と吉河光貞検事の一团によって検挙された。ゾルゲは鳥居坂署に連行されたが、手早く東京拘置所に移された。ゾルゲは、尾崎が処刑されたのと同じ場所で、やや間をおいて、1944年11月7日午前10時20分、絞首刑に処せられた。

1941年10月18日土曜日の朝、ゾルゲ逮捕の少し前、刑事と巡査が広尾のマックス・クラウゼン（1899-1978）の家に踏み込んだ。1943年クラウゼンは終身刑を宣告されたが、敗戦直後の1945年10月8日、彼は戦勝国アメリカ占領軍によって釈放された。しばらく日本各地を転々としたあと、シベリア鉄道でモスクワに送られた。その後、東ドイツに移り、東ベルリンの造船所などで働いていたが、1978年まで生き延びた。

フランコ・ド・ヴーケリッチ（1904-45）の運命は悲劇的であった。ヴーケリッチは、クラウゼンが逮捕されたのと同じ日の10月18日土曜日の朝、特高警察の別働隊によって牛込左内町の自宅を急襲された。「靴を履く間も与えられず、サンダル」のまま連行された。その場に居合わせた妻の山崎淑子は立ちすくんだ。1943年ヴーケリッチは終身刑を宣告された。1944年7月東京刑務所から網走刑務所に移送されるその直前、淑子と幼い息子は短い面会を許されている。赤痢にかかって下痢に苦しんでいた。1945年1月15日、淑子は網走刑務所からの電報でヴーケリッチの獄死を知らされた。ヴーケリッチはその二日前の1月13日に獄中で死去していた。死因は栄養失調からくる肺炎であった。死亡通知を受け取った淑子は網走まで赴いて、火葬に立ち会った。彼の死には「拷問の疑

いを起こさせるものがある」と以前から指摘されている（大橋秀雄の証言、ウィロビーの調査）⁽¹⁴⁾、⁽¹⁵⁾。

8. 報道管制と事件情報：「尾崎を捕まえて、どうするんだね」

この事件については報道管制が敷かれていたが、1942年5月16日の司法省発表などに見られるように、官憲は折に触れて意図的に、その記事を新聞に載せている。しかし、それとは別に、尾崎秀実の逮捕（1941年10月15日）、死刑宣告（1943年9月29日）、死刑確定（1944年4月5日）、死刑執行（1944年11月7日）は、友人、知人、一部の知識人、雑誌編集者、ジャーナリストにはリアルタイムで知られていたのである。

石川達三は、尾崎逮捕をその作品の中に書いた作家の一人である。以前から、石川と尾崎とは知らない仲ではなく、酒を酌み交わしたこともあった。石川の『生きている兵隊』（『中央公論』1939年3月号）が発禁処分にあい、起訴された際に、石川の依頼を受けて、尾崎は彼とその作品を弁護するために証人台に立っている。後年、石川達三は、横浜事件を主題にした作品『風にそよぐ葦』を毎日新聞に連載したが、その中で石川は尾崎を回想して、その逮捕を次のように述べている。1941年10月前後の言論・思想状況の緊迫した雰囲気を感じられる文章である。

——「10月20日の月曜日の正午、清原節雄（＝清沢冽）は丸之内の或るレストオランで葦沢悠平（＝嶋中雄作）を待っていた。／悠平は節雄のテーブルに坐った。「いまから情報局へ出頭だ」——「君は尾崎君がやられたのを知ってるか」「やられたとは？」「捕まってるんだ」「ほう、尾崎秀実を捕まえて、どうするんだね」「近衛が総理だった間は手を出さなかつたらろうが、総辞職が決まったら即座に捕まえたらしい」——近衛の顧問であった尾崎が捕まえられるようならば、当局は相当の決意をもって思想と言論の弾圧に乗りだしてきたものに違いないものと考えられた。彼は清原と同じように新評論（＝中央公論）の有力な執筆

者であった。／酒好きで愉快な論客であった。悠平は尾崎と一緒に赤坂にある馴染みの料亭で何度か酒をのんだことがあった。——「尾崎君は近衛のために外国といろいろな情報を交換していたんだが、外務省のある友人の話では、機密漏洩か何かの疑いだろ」と言っていたがね」「機密というのは、軍事機密か」「勿論そうだろう」／「開戦直前だから君、機密問題はやかましいよ」と清原が言った」⁽¹⁶⁾。

『風にそよぐ葦』の主人公の一人は外交評論家、清沢冽である。その清沢は、尾崎の死刑宣告ならびに死刑執行をその『暗黒日記』に、次のように書いている。

——「この日尾崎秀実の死刑決定す（＝地裁による死刑宣告）。僕は一、二回会見しただけだ。彼は果たしてスパイだったのだろうか。その資料が公開されないのが、遺憾である（1943年9月29日）。——かつて近衛内閣の時に一週間一回官邸で話をする集まりがあった。支那問題は尾崎が中心になった。そのグループのうち尾崎がいちばん穏健であった（1944年1月2日）。

——尾崎秀実は11月7日に死刑を執行されたそうだ。これに対し平沼國務相射殺事件は懲役七年の判決があった。何と軽い判決か」（1944年11月13日）⁽¹⁷⁾。

一高時代からの親友、「脱線の超凡の英才」松本慎一（『フランクリン自伝』の訳者として知られる）は、尾崎に対する第一審の死刑宣告（1943年9月29日）を英子夫人から直接電話で知らされた。その声は涙で聞こえぬほどであった。「すぐ来てちょうだい」、そういって電話機をおいた。1944年4月5日尾崎の死刑が大審院で確定してからは、松本は東京を離れないようにしていたが、11月7日尾崎が処刑されたときは、彼は故郷の宇和島に疎開させた子どもを見守るために、一時東京を離れていた。その留守中に尾崎は処刑された。東京にたどり着いた松本のもとに、竹内弁護士から一通の至急電報が届いていた。「ケフスンダ アスヒキトル タケノウチ」。竹内弁護士

は、約束に従って刑の執行を知らせてくれたのである⁽¹⁸⁾。

尾崎が検挙されてから4日後の10月19日日曜日、一高時代の同級生、高根義三郎が上目黒の尾崎の家にひょっこり現れた。高根は、尾崎から日本の対米交渉の見通しなどを聞くために、彼の家に足を向けてみたのである。当時、高根は東京民事地方裁判所判事であったが、尾崎が検挙されたことを全く知らなかった。英子から、尾崎が10月15日に特高によって検挙されたと聞いて、高根は啞然とした。これを聞いた高根は、誠実な友人として尾崎のために働いた一人であるが、この線から、尾崎についての情報は一高関係者、役所関係者に知られるようになった。しかし、一高同級生、同期生の中には尾崎を見放すものが少なくなかった⁽¹⁹⁾。

法廷では一般の傍聴は禁止されていたが、特別傍聴人席が設けられていたから、彼らからも情報は漏れた。

獄中には尾崎の友人が多数留置されていた。企画院事件の小沢正元、共産党再建問題で拘留されていた伊藤律、神山茂夫などである。彼らに面会に来た者の中からも尾崎の消息は外へ漏れた⁽²⁰⁾。

Ⅲ 『愛情はふる星のごとく』

9. 敗戦直後ベストセラーとなった『愛情はふる星のごとく』:「今燦然と輝く星の如きものは、実に誠実なる愛情であった」

「超凡の英才」松本慎一は、尾崎に人生の借りがあるとつねづね思っていた。「尾崎は美食を愛した。彼は酒を愛した。彼はまた実に人の面倒を見た」と書き出して、尾崎から受けた援助を次のように語る。

——「彼の援助で急場を凌いだ人物は、少なからぬ数に達する。私自身はその筆頭であろう。友人となって以来彼の援助を受け続けた。私はその間三回検挙された。いったい私は資産を持たず、かつて貯蓄というものは持ったことはないので、私

の入獄は、家族にとってその日、その月からの生活難を意味した。私の家族はそのたびに尾崎には最も多く世話になった。(いわゆる「京浜共産主義グループ事件」で)昭和13年から15年にわたる拘禁生活中はとくにそうであった。当時は尾崎は収入が増大していた。私ほどのべつに尾崎の援助を受け続けたものは少ないであろう⁽²¹⁾。

1943年9月29日東京刑事地裁の高田正裁判長は尾崎に死刑宣告をしたあと、「命をもって国民に詫びよ」と付け加えた。その前の法廷で高田裁判長は、尾崎に宮城与徳が獄中で死んだことを告げている。1944年4月5日、尾崎に大審院の上告棄却の言い渡しがあり、尾崎の死刑が確定するのであるが、死刑確定後しばらくして、第一審の高田裁判長がわざわざ尾崎に面会に来た。尾崎と高田は昼食を向かい合って食べ、歓談を楽しんでいる。尾崎は官弁を食べ、高田は持参の弁当を開いた。死刑を宣告した裁判長のこうした行動は、尾崎という人物に対して、尊敬にも似た理解を示していたというべきであろう。これは普通では考えられない、驚くべき異例に属することであった⁽²²⁾。

死刑確定後、松本は英子夫人に次のように言っている。「やることはいっぱいある。さしあたり、獄中の書簡集を出しましょう。それから選集を出しましょう」と勧めた。遺族を慰める言葉ではあったが、それは彼の人生の借りを返すためでもあった。そしてまた、尾崎の人生観、社会観を、家族や友人の背後に控える膨大な日本の潜在的読者に訴えるためでもあった。尾崎の書簡は、まず『世界評論』『人民評論』などの雑誌に数通ずつ掲載されたのであるが、敗戦直後の1946年9月、世界評論社から尾崎の獄中書簡集が『愛情はふる星のごとく』と題されて単行本として出版された。

世界評論社の編集発行人は小森田一記である。小森田は中央公論編集長をつとめていたときに、尾崎を『中央公論』に初めて起用した編集者であった。尾崎に「学良クーデターの意義」という論文を寄稿してもらったのである(『中央公論』1936年新年号)。尾崎はこの論文において、西安

事件のゆくえについて自らの考えを展開し、毛沢東は拘束した蒋介石を殺さずに、国共合作への道を歩むであろうと予測した。尾崎の予測はズバリの的中した。小森田はこれに感服した。尾崎はこれ以後、『中央公論』の常連執筆者となり、中国問題評論家として世に知られるようになるのであるが、尾崎と小森田とは執筆者と編集者の関係で結ばれ、親密な交際を続けるようになった。小森田はまた『婦人公論』の編集を手がけた経験があり、女性のニーズをつかむ職業的なカンも磨いていた。

その小森田が1944年1月、日本出版企画課長をつとめていたとき、横浜事件関係者の容疑をかけられて逮捕された。小森田は幸い、敗戦後の1945年9月、出所することになるが、横浜事件関係の拘留から釈放されたかつての中央公論編集者の仲間、青地農、畑中繁雄らが小森田のもとに集まった。横浜事件関係者の協力を得て、小森田は「民主主義を遂行すべく」新しい出版社をつくった。それが世界評論社であった⁽²³⁾。

この出版社の雑誌『世界評論』の創刊号(1946年2月1日発行)に、尾崎秀実の獄中書簡の中の一つ、「遺書」(竹内金太郎弁護士宛、1944年7月26日付)が掲載された⁽²⁴⁾。これが、尾崎の獄中書簡の一部が雑誌に活字になって発表された最初のものである。

尾崎の獄中書簡集の出版を、小森田の世界評論社へ持ち込んだのは松本慎一である。松本は、小森田と尾崎の旧い親交を知っていたからである。持ち込まれたこの書簡集の原稿を読んだ小森田は、尾崎の世界情勢への見通しや彼の死生観に共鳴した。そして彼はこれを、世界評論社が敗戦直後の新しい出版界に乗り出す企画の第一歩としてふさわしいものだと判断し、この書簡集の出版に踏み切ったのである。

ゾルゲ=尾崎事件は謎につつまれていた。その「真相」を知りたいという社会各層の広範な関心は確かにあった。尾崎は獄中で243通の書簡を書いている。小森田は雑誌編集者のカンで、敗戦直

後の社会において、「真相」解明以上に、とくに女性が「愛情に飢えている」ことを直感的に感じとっていた。また、戦死や戦病死、疎開や余儀ない別居などで、家族との悲しい別離の体験を国民の多くが共有していることも十分に知っていた。編集者小森田は「愛情と別離」に着目したのである。

小森田は尾崎の全書簡を前にして、二つの軸を立てた。すなわち、一つは、妻と娘への「愛情」である。二つは、死刑を宣告された者が苦闘のすえにたどり着いた「死生観」である。この二つの軸つまり「愛と死」を軸に、尾崎の全書簡243通から約3割に当たる73通の書簡と遺書を選び、獄中書簡集を編むことにした。この本のタイトルを『愛情はふる星のごとく』と命名したのも小森田の卓抜なアイデアであった。このタイトルは時代のニーズを絶妙につかんでいたのである。

実は、このタイトルの出所は尾崎の書簡の中にある。この言葉は、尾崎の死刑が確定したときの、張りつめた訣別の書簡(1944年4月5日付)の中に見出すことができるのであるが、それにしても、まことにうまく付けたタイトルであった⁽²⁵⁾。尾崎の訣別の書簡には、こう書かれている。

——「思えば私は幸福な人間でした。この一生いたるところに深い人間の愛情を感じて生きてきたのです。わが生涯を省みて、今燦然と輝く星の如きものは、実に誠実なる愛情であったと思います。友情はそのうちに一等星のごとく輝いています」⁽²⁶⁾。

小森田のつけたこのタイトルは敗戦直後の読者の共感に訴えるものであった。それは読者の感傷に訴えただけでなく、時代の関心に応えてジャーナリスティックであった。このタイトルだけで、この書簡集は敗戦直後の多くの読者に迎えられる条件を備えていた。とくに愛情に飢えていた女性は、このタイトルに引きつけられた。この本を手にした読者の尾崎像は、「国家への反逆者から愛国者へ」、「売国奴から殉教者へ」、「共産主義者からヒューマニストへ」と変わっていく。読者の関

心は「愛と死」に集中した。これによって、尾崎は軍国主義日本の最大の犠牲者と見なされるようになった⁽²⁷⁾。

小森田の編んだこの73通の書簡集は「愛と死」をねらったものであっただけに、尾崎の書簡のうち、彼の思想や行動、社会観や時代観を語る部分が抜け落ちているという編集上の欠落があったことを指摘しておかなければならない。この部分は、妻や娘の向こうや背後に控えている未来の潜在的読者に宛てて、尾崎自身が意識して書いたフシがある。死を意識して、尾崎は未来の読者に宛てて自らを訴えようとしたに違いない。世界評論社版が出たあと、全書簡を収録した版や、思想的な部分を増補した版が出されるようになるのは、こうした理由によるのである（勁草書房版、青木書店版、岩波現代文庫版など）。

それはともかく、こうした時代の感傷や関心に支えられて、世界評論社版『愛情はふる星のごとく』は1946年のベストセラーの2位にまでなった。1947年と48年にはそれぞれベストセラーのトップになっている。トップセラーとはいっても、敗戦直後は用紙統制の時期で、用紙の入手が困難であったことも原因して、総部数は15万部は超えなかったと見られている⁽²⁸⁾、⁽²⁹⁾。

敗戦直後のこのベストセラーによって尾崎秀実という人物は広く知られるようになったが、事件の本質はむしろ「愛と死」という感傷に流されてしまったかにみえる。尾崎像は、天皇制家族主義国家への反逆者、売国奴、国際スパイ、コミunistから一転して、「私的な家族愛の体現者、愛国者、殉教者、日本軍国主義の犠牲者、平和を希求するヒューマニスト」へと転回したといっていであろう。だからといって、ゾルゲ＝尾崎事件そのものが解明されたわけではない。以下に、私が述べることは、ゾルゲ＝尾崎事件とはいったい何だったのか、どう解釈すべきなのかについて、その解明の一端に迫ろうとするささやかな試みにすぎない。

IV 上海：宿命的な出会い

10. 国際都市上海で尾崎、スメドレー、ゾルゲが 出会う：「ジョンから任命された最初の任務」

尾崎秀実は1926年春、東京朝日新聞社に入社した。その2年後の1928年11月、彼は大阪朝日新聞社の特派員として国際都市上海へ派遣された。1929年にはアグネス・スメドレー (Agnes Smedley, 1894-1950) が偽造の旅券を使って上海に現れた。彼女はよく知られたアメリカ人ジャーナリストで、その肩書きは『フランクフルト新聞』の上海通信員であった。彼女は上海のヨーロッパ人社会（国際租界、フランス租界）の進歩的なサークルでたちまち有名になった。一方、1930年1月、リヒアルト・ゾルゲが日本船で上海に到着した。上海におけるゾルゲは二つの顔をもっていた。一つはアメリカの新聞記者ジョンソン（ジョンソンまたはジョン）である。もう一つは作家ドクター・ゾルゲの顔で、これをうまく使い分けていた。

作家ドクター・ゾルゲは中国に来る前に、ドイツで二つの契約を取りつけていた。一つはドイツの『穀物新聞』 (*Getreide Zeitung*) との契約であり、もう一つは社会学雑誌を出していた出版社との契約であった。彼は中国の農業事情を研究する計画をもっているというふれこみで、その成果をこの新聞に寄稿していたが、また同時に、この記事などを使って本を出版するという出版契約にも署名していた。これは、ゾルゲがベルリンを出発する前に巧みに工作した「偽装」である。

ゾルゲが中国で情報収集の手づるをつくろうとしたとき、上海の国際租界で有名になっていたスメドレーに近づいたのは自然の成行きであったろう。実際1930年11月、二人は会っている。ゾルゲによると、二人はすでに1920年代末にヨーロッパで会っていた可能性がある。「私は彼女についてはヨーロッパにいたときに聞いて知っていた」（ゾルゲ検事訊問調査）。

また、尾崎とスメドレーの間を取り持ったの

は、上海のツァイトガイスト書店の経営者ヴィーデマイヤー夫人であった。この書店は見かけは洋書店であるが、実際は「コミンテルン」の機関の一つで、人的な接触が安全に行われるための連絡場所であった。

1930年11月、「鬼頭銀一」と名のる男が、朝日新聞社上海支局に尾崎を訪ねてきた。鬼頭は、アメリカ人の記者で「ジョン」（またはジョンソン、実はゾルゲ）という人物に会ってみたいかと勧めた。尾崎は、鬼頭が警察のスパイかもしれないと警戒した。スメドレーにこの話をすると、彼女は「ぎくり」と緊張して聞いていたが、「ジョン」は優れた人物であると答えた。数日後、スメドレー自身が、上海の南京路の中華料理店「冠生園」で尾崎とゾルゲとを引き合わせている。これがゾルゲと尾崎の最初の決定的な出会いとなった。尾崎という人物が、ゾルゲの有力な情報源の一人に加わることになったからである。

このとき、「ジョン」は尾崎に、中国の内部事情ならびに中国の政治グループに対する日本の政策を調査してほしいと頼んだ。尾崎自身の言葉によれば、「①日本の新聞記者として集めうる限りの支那の内部情勢、②日本の対支政策の現地における適用」について知らせてもらいたいと「命じられた」。これが「ジョンから命令された最初の任務」であったと述べている⁽³⁰⁾。

ところが、この「ジョン」または「ジョンソン」なるものがゾルゲであることを、尾崎は、以後6年間も知らないままであった。尾崎がこの「ジョンソン」がゾルゲであることを知ったのは偶然の機会からである。1936年夏、尾崎は日本代表団の一人として、太平洋問題調査会（通称ヨセミテ会議）に出席したのであるが、そのレセプションが、その年の9月、帝国ホテルで開かれた。この会に尾崎もゾルゲも出席していた。その場で尾崎は出席者の一人（蘭印の代表）から、「こちらがドイツの新聞記者ドクター・ゾルゲです」と正式に紹介された。信じられないことであるが、尾崎は、上海のジョンソンが偽名であっ

て、ゾルゲが本名であることをこの時はじめて知ったのである⁽³¹⁾、⁽³²⁾。

この一事は小さいことのように見えて、意外に多くのことを物語っているように思われる。秘密情報に従事する者は、本名も本心も明かさない。親密な人的交際はしない。

その後、ゾルゲと尾崎とは情報を介した重層的で深い関係を続けていくのであるが、情報を介した媒介的な関係は、決して人間の深いところまで届くような関係ではなかったように思われる。ゾルゲは最後まで、尾崎の住所も電話番号も知らなかった。この偽名・本名の問題に限らず、初発から両者の間には、「情報活動」について認識の温度差というものがある。その点について、以下に触れておくべきであろう。

V コミンテルンとソ連軍事情報機関

11. ソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部指令下のゾルゲ：「私は赤軍第四本部に属している、コミンテルンの命令ではない」

ここで注意しなければならないのは、極東における情報活動のためにゾルゲを中国に派遣したのは、ソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部の命令によるものであったという点である。それは決してコミンテルンの命令によるものではない。1929年以来、ゾルゲはコミンテルンを離れたか、コミンテルンの機関には属していなかったのである。この点は重要である。

ゾルゲは日本の警察・検察に訊問された当初、自分の所属している機関を「モスクワ当局」「モスクワ中央部」という漠然とした言い方をして、故意にその正体を明らかにせず、曖昧にしていたフシがある。わざと所属を明らかにしないような、曖昧な陳述をしているのである。その曖昧な、つかみどころのない供述を彼の「手記」から引用しておこう。

——「今日なお私はコミンテルン本部の系統に属するのか、いわゆる第四本部の一員なのか、それ

とも他の機関、たとえばソヴィエト連邦外務人民委員部、またはソヴィエト共産党中央委員に属するのかわかっていない始末である」⁽³³⁾。

ところが、1942年7月、中村光三予審判事の鋭い訊問に対して、ゾルゲは真の所属と命令系統、ならびにその任務を明らかにするのである。

まず第一点。ゾルゲへの指令は、赤軍第四本部からの指令であったと述べ、自分の所属しているところも赤軍第四本部であると供述した。

——「モスクワ中央部」とのお訊ねですが、正確に言えば「赤軍第四本部」の指令でありました。——私は赤軍第四本部と連絡したのであります。私はコミンテルンから正式にコミンテルンの仕事をしないでよいとの通知を受けたのであります。——私は赤軍第四本部に属していることを明瞭に自覚しておりました。何故このような策略を採ったかといいますが、最初の警察官や検事が未知の人で（＝事情に疎く）、第四本部に属することを打ち明ければ、私は憲兵に引き渡されると思ったからであります。第二に、コミンテルンとソ連とソ連共産党との関係を理解してくれないと思ったからであります。第三に、私が軍事機関に属することを信用してくれなかったからであります。——赤軍第四本部は私に対し命令権をもつ唯一の機関であって、私に対する指令や要求は常にそこから発せられたものであります。コミンテルンの指示ないし命令ではなかったのであります」⁽³⁴⁾。

第二点。ゾルゲは、その情報の連絡先が赤軍第四本部であり、その情報のすべてを第四本部へ向けて通報したと明確に回答した。

——「私は全部の材料を第四本部へ送ったことは間違いありません。私の想像するところではその一部がソ連邦の最高指導者に渡っていると思います。スターリン以下三人だと思えます。——私が連絡し、または連絡しようとするところは第四本部だけでありました」。

第三点。ゾルゲは1929年冬、コミンテルンの機関から離脱し、コミンテルンとの職務上の関係は絶えたと正確に供述した。

——「（ゾルゲの情報がソ連共産党最高指導者、コミンテルン、そのほかの機関にも送られていると、以前書いたことに対して）それを書いた当時、私は自分の所属を明瞭にすることを欲せず、そのためこのように曖昧にし、漠然とごく一般的なことを記載してカムフラージュしたのであります。コミンテルンは私の政治情報に対して、興味を持っておりません。私の職務上の連絡は、第四本部との関係に尽きます。1929年冬、私はコミンテルンの機関から離脱しましたので、職務上の関係は絶えました」。

要するに、ゾルゲはソ連軍事情報機関の情報将校であって、1929年以降はコミンテルンとの職務上の関係は全く絶えたと証言したのである⁽³⁵⁾。

ゾルゲはまた、「モスクワ当局」という曖昧な言葉を使ったことの原因を、「手記」では次のように説明している。

——「私に指令を発した機関は何かと訊かれて、私はわざと概括的な、そして漠然とした「モスクワ当局」という言葉を使った。私は考えるところがあって、コミンテルン内の機関をさすのか、モスクワにある重要機関をさすのかの点について説明しなかった。私の活動分野の変化だとか、共産主義権力の移行といったややこしいことを、通訳を通じて説明することは、できることではなかった。私はここで1929年以前はコミンテルン組織が私のいう「モスクワ当局」であり、1929年以後は私に対する命令系統は根本的な変化を見た。このような複雑化した事情の一切を説明しようとしたら、取調は長引き、混乱を来したことは必定である」。

そして、コミンテルンとの関係を絶ってからは、ゾルゲの任務にはっきりとした変化が認められた。「コミンテルンから分離された結果、私に課せられた任務の性格には、はっきりとした変化が認められた。私は、中国および日本の共産党とは一切の交渉を禁ぜられ、彼らと勝手に会うことは禁じられた」と述べているのである⁽³⁶⁾。

12. ソ連国家におけるスターリン権力の確立： 「権力はコミンテルンからソ連政府へ移行した」

ソ連軍事情報機関からゾルゲに課せられた任務というのは、第一に政治情報を評価し判断すること、第二に戦時経済の情報を集めること、第三に軍事情報を集めることに、そのねらいが置かれた。ゾルゲは、共産党組織問題など政治情報に関していえば、日本については諜報活動は行わなかったと「手記」に述べている⁽³⁷⁾。

そのためであろうか、朝日新聞社上海支局に尾崎を訪ねてきた「鬼頭銀一」という謎の人物について、ゾルゲは意識的に語ろうとしない。むしろ故意に避けているように思われる。党の重要人物だと思われる「鬼頭」についてゾルゲは、以下のように述べている。

——「鬼頭銀一が私に尾崎と会うように求めたという事実は、どうしても思い出せない。私が鬼頭と親密にしていたという事実は思い出すことができない。——スメドレーや尾崎から彼について何度か話を聞いたことはあるが、彼と私の間には全然個人的な接触はなかった」。

ところが、ゾルゲは「鬼頭」を知らないわけではなかった。知らないふりをしたか、知らないと言いつつ通したのである。ソ連軍事情報機関が日本や中国の党関係者との接触を固く禁じていたことから、ゾルゲは「鬼頭」についての明言を意識的に避けたのであろう。ゾルゲの「手記」の中に、そのように読める記述がある。「鬼頭のような有名な人間を相手にすることはモスクワの禁ずるところであった」と述べているのである⁽³⁸⁾。「鬼頭」というのは偽名であるが、それが誰であるかについて有力な推測はあるものの、その正体はいまだに不明である。

ゾルゲは、「1929年以前はコミンテルンの機関が私のいう「モスクワ当局」であり、1929年以後は私に対する命令系統は根本的変化した」と書いているが、1929年を境に起きた大きな変化というのは、1928年までにソ連政府においてスターリンの勝利が確実になったことをさしている。す

なわち、1924年のレーニンの死以来、モスクワは最高権力の後継者をめぐる権力闘争の修羅場となり、その党争はソ連政府の中央機構にとどまらず、コミンテルンや各国共産党にまで及んだ。1928年7月コミンテルン大会がモスクワで開かれたとき、スターリンは、トロツキーなどの主張する世界革命計画を放棄し、一国社会主義建設に専心する方針を採ったのである。1929年、スターリンがソ連国家機構に絶対的な権力を確立すると、彼はレーニンの後継者を次々に追放し粛清するようになった。スターリン権力が最も狙ったのは、世界各地の革命運動を掌握している組織、つまり、コミンテルンの組織部（ORG）、その下部組織の国際連絡部（OMS）であった。

ゾルゲはおそらく1925年から29年まではコミンテルンの国際連絡部に所属していたと思われるが、その国際連絡部の同僚、上司の多くはその部署から追放された。1928年11月、ソ連共産党の理論的指導者ブハーリンまでがコミンテルンから追放されている。ゾルゲはソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部の創設者ベルジン部長に見込まれて助けられ、間一髪のところスターリン支配下のロシアを離れ、中国に派遣されることになったのである。

ゾルゲは「権力の中心が移動した」、つまり、ソヴィエト権力は、世界革命推進組織のコミンテルンから一国社会主義を強行するソヴィエト共産党ならびにソ連国家へ移ったと書いているのであるが、これは権力の劇的転換であったとみてよいのである。これを契機に、ゾルゲはコミンテルンの機関から離れ、ソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部に移されることとなった。「私はコミンテルンの機関からソヴィエト共産党へ移された」ということは、その現れの片鱗にすぎない。そして「私はコミンテルンを去った」のである。

その現れの片鱗は、ゾルゲ自身の任務の変更となって現れた。権力の移行は、「私の活動」の上にもはっきり認められるようになった。ゾルゲは「手記」でいう。各国の革命的労働運動に関する

情報を集めるコミンテルンよりも、「私自身の才能」は、経済・政治・軍事上の情報を求めるソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部の緊急の必要を満足させるのに適していると、自分の任務変更の理由を述べて自らを合理化している。

こうした任務の変更に伴って、ソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部から、ゾルゲは、諜報活動に従事するように「命じられ、指令を受けた」。とくに1929年以降、諜報活動に従事するようになったゾルゲは、ソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部の命令だけに従い、また各国共産主義組織との接触を禁じられていたことから、「私はコミンテルンの一員でないことをいつも念頭に置いていなければならなかった」のである⁽³⁹⁾。

VI 諜報活動と革命運動

13. ゾルゲに命じられた極東の任務：「蒋介石南京政府の政治的・軍事的な力を調査せよ」

中国革命、そしてその後起こった日本の満州に対する侵略行動が、同時代において、世界的に大きな影響力を持つ重要事件になると感じとっていた政治観測者は、ごく少数にすぎなかった。ゾルゲはその少数者の一人であった。極東の事態は必然的にヨーロッパの列強、ソ連およびアメリカに甚大な反響を引き起こし、国際関係に根本的な変化をもたらすに違いない、とゾルゲは観察していた。ゾルゲは、そうした観察の上に立って、自分の活動場面を極東に移すのである。ゾルゲは1929年という年に、二つのことを行っている。一つは、コミンテルンから離れたことである。ゾルゲの任務はコミンテルンから離れ、ソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部のための情報活動に変わった。もう一つは、ヨーロッパから極東へとその活動舞台を変えた。ゾルゲはソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部から「命令」を受けて、1930年1月中国に派遣され、そこで広範な諜報活動に着手することになるのである。

ゾルゲは、自分の活動について、自信をもって

次のように書いている。

——「中国および日本における私の広範囲にわたる諜報活動は全く新しい企てであった。日本での私の活動についてはとくにそうであった。こうした広範な使命の達成に成功したのは私が最初であり、また唯一の人間だった。私が知っている限りでは、この種の試みで最初に成功したのは私だけである」⁽⁴⁰⁾。

ゾルゲの中国および日本における諜報活動は、ソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部の「命令」によってなされたものである。その目的は、ソ連外交政策の要請によるものであり、ソ連の外部からの政治的・軍事的侵略に対してソ連防衛のために諜報活動を行うことであった。要するに、ゾルゲの諜報活動は、第四本部の「命令」によって行われた任務、つまりはフォーマルな「仕事」であった。

ゾルゲに命じられた任務とは、1931年以降の中国においては、「蒋介石南京政府の政治的・軍事的な力を調査」し、その情報を第四本部に送ることであった。そして1933年以降の日本においては、満州事変以降の日本の対ソ政策を詳細に観察し、「日本がソ連攻撃を計画しているかどうかを綿密に調査し」、その情報を第四本部に送ることであった⁽⁴¹⁾、⁽⁴²⁾。この点は、拡大解釈されてはならない。

14. 諜報活動の目的は何か：「ソ連国家を擁護するためである、日ソ間の戦争を回避させるためである」

1942年3月、吉河光貞検事は、ゾルゲに向かって「諜報活動の目的は何か」と訊問している。これに対してゾルゲは、反ソ的な軍事攻撃を回避させることにより「ソ連を防衛しようとしたことにある」と明快に答えている。この訊問調書においてゾルゲは、自分は日本国家の敵ではなく、むしろ日ソ間の平和関係を協力し寄与したと述べているが、ゾルゲ＝尾崎事件に対するゾルゲの考え方を示す貴重な証言が、この調書には含まれていると思われる。以下、要点を摘記しておこう。

——「私たちはソ連共産党指導部に対し日本における諸般の事情を収集通報してきたが、その目的の積極面は、「ソ連社会主義国家を擁護しようとした」ことである。消極面は、反ソ的な政治的・軍事的な攻撃を回避させることにより「ソ連を防衛した」ことである」。——「私のグループは「日本の敵として日本に来たのではない」。私たちは一般のスパイとは全くその趣を異にしている。英米諸国のスパイは日本の政治上、経済上、軍事上の弱点を探り出し、それに向かって攻撃を加えようとするものであるが、私たちはこのような意図から情報収集したのではない」。

——「1935年モスクウで赤軍第四本部長から、君たちの活動によって、「ソ連と日本との間の戦争が回避されるよう、力を尽くしてもらいたい」という指令を与えられた」。

——「私たちの活動が「日ソ間の平和関係に協力寄与した」ことは事実である。この点こそ一般のスパイとその思想的な立脚点を異にするものである」。

——「私は検挙される前の晩、モスクウ中央部＝赤軍第四本部に発信する必要から電文原稿を執筆したが、その中でわれわれの日本における任務は終わった、「日ソ間の戦争は避けられた」と書いている」。

——「私たちの目的を達成するためには日本国家の法律を犯してまで、これらの秘密事項を探知収集せざるをえなかった。私としては共産主義の立場から「日ソ間の平和という問題を日本の法律よりも重要だ」と考えざるをえなかったのである」⁽⁴³⁾。

15. 諜報活動と革命運動の峻別：「革命を起こす計画は全く持ち合わせていない」

1941年12月予審判事申村光三は、ゾルゲに対して予審終結の決定を下した。1943年9月東京刑事地方裁判所の高田正裁判長は、ゾルゲに対して「被告人を死刑に処す」との判決を下した。高田裁判長は、被告人ゾルゲは、日本の国家形態の転覆をもくろむコミンテルンの目的遂行のために

来日したと断じた。ゾルゲに対する判決理由は、「ソ連赤軍の諜報機関たる第四本部の指揮命令の下に」あって、「コミンテルンが、世界革命の一環としてわが国においては国体を変革し私有財産制度を否認し、プロレタリアートの独裁を通じて共産主義社会の実現を目的とする結社」であることを十分知悉していながら、「諜報活動に参加しコミンテルンの目的達成に協力した」というのである⁽⁴⁴⁾。

ゾルゲはソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部の指令の下に諜報活動を行うという「仕事」のために来日していたのであって、コミンテルンの指令の下に日本国家の転覆をもくろむために来日したのではない。第四本部はソ連一国のソ連軍の情報機関であり、一方、世界組織のコミンテルンは1929年以降弱体化し壊滅状態にあった。事実を照らせば支離滅裂、複雑怪奇としか言いようのないこの判決文によって、ゾルゲは、国体を変革し私有財産を否認し、日本を共産主義国家に変革することを目的としたコミンテルンの軍事スパイであると規定されたのである⁽⁴⁵⁾。1943年9月、ゾルゲは最後の法廷に立って反論を述べた。

——「私は日本において、共産主義革命を起こす計画も、共産主義思想を伝播する意図も全く持ち合わせていなかった。自分だけが諜報網の全責任を負えばそれで十分である」⁽⁴⁶⁾。

こういって、ゾルゲは最後の抗議を試みたのであるが、当時の司法官に通じるものではなかった。やがて「被告人を死刑に処す」と判決を言い渡された。ゾルゲは不動の姿勢で立っていた。つぶやき一つ、身振り一つ見せなかった。ゾルゲは「ソ連防衛」のための諜報活動はやった。これは確かである。日本の司法当局者は、その諜報活動を日本国家転覆の革命運動にすり替えた。ゾルゲは日本国家を転覆するというような革命思想を持ち合わせていなければ、革命運動もしていない。司法当局は、彼の諜報活動を「国体変革の陰謀」であると強引に解釈し、この強引な解釈から治安維持法を適用して、ゾルゲに死刑の判決を下

した。ゾルゲは、この理屈の通らない判決理由を前にただ啞然とするばかりで、声も出なかった。

Ⅶ 軍事情報機関のリーダーとフォロワー

16. ゾルゲと尾崎の地位関係：「軍事情報機関の正式のリーダーと私的な部員との関係である」

1942年7月、ゾルゲは予審判事村光三の訊問に対して、自らの地位を明らかにしている。それによれば、次の点が重要である。ゾルゲは、

①1925年以来、ソ連共産党員である。

②赤軍第四本部から日本における諜報グループの指導者として任命され、派遣されたものである。諜報グループのメンバーの中でただ一人のソ連共産党員である。

③第四本部からのみ指令を受け、他のいかなるところからも指令・命令を受ける義務はない、と供述した。

同年8月、ゾルゲは予審判事村光三の訊問に対して、尾崎秀実の地位を明らかにしている。それによれば、尾崎の地位を次のように供述している。

①ゾルゲ自身が尾崎を中国および日本における諜報活動に使えたと見て、彼を個人的便宜のためにゾルゲ・グループの一人に引き入れたものである。

②1935年尾崎の希望により、ゾルゲの「協働者」(協力者)として第四本部に申告し、第四本部からゾルゲの協働者としての承認ももらっている。

③尾崎は日本共産党員ではない。中国共産党員でもないが、中国共産党の人とは近い関係にある。

次のゾルゲの発言は、尾崎にとってはショッキングなことであり、われわれにとってはきわめて重要な内容をもつものであると思われる。

④尾崎とコミンテルンとの関係は全くない。もし尾崎がコミンテルンのメンバーでなく、ましてやコミンテルンにおいて全く何の地位にもついていないと聞いたとしたら、尾崎は失望落胆するにちがいない。ゾルゲはそう思ったからこそ、「尾

崎は広義においてコミンテルンの成員である」と曖昧な記載をしたにすぎない。この記載はここで取り消さなければならない、と明言した。

⑤さらに付け加えて、ゾルゲは、尾崎本人に対して「モスクワのどういう機関」に彼の名を申告したかは全く伝えていない、と供述している⁽⁴⁷⁾。

これは組織関係に熟達した人の明快な供述であるとみてよいであろう。

要するに、尾崎は日本共産党員ではない。中国共産党員でもない。既成組織に属するコミュニストとはいえないのである。尾崎はコミンテルンとは全く関係がない。ましてやコミンテルンで何らかの高位についているわけではない。尾崎は、ソ連軍事情報機関の命令によって任務＝「仕事」を遂行しているゾルゲの「個人的便宜のための協働者・協力者」である。ソ連軍事情報機関＝第四本部は、尾崎を、ゾルゲが現地調達した諜報グループの私的メンバーだと認めているにすぎないのである。

ゾルゲは、赤軍第四本部の命令を遂行するために極東に派遣された諜報組織のフォーマルなリーダーであり、一方、尾崎はゾルゲの指揮下に働く私的なフォロワーという関係になる。尾崎は個人的な思いこみによって、世界革命推進組織、コミンテルンのために働いたつもりかもしれないが、実際はそうではない。ソ連赤軍第四本部のゾルゲの諜報グループに属する個人的な一諜報員にすぎなかったのである。

またコミンテルンは国際共産主義組織を標榜してはいたが、スターリン体制下にあって、コミンテルン自体が壊滅状態に追い込まれ弱体化していて、もはや世界組織といえるものではなくていた。尾崎は、ゾルゲというソ連軍事情報機関のリーダーのもとで、有能で「誇り高い」情報提供者の一人として利用されていたのである。ゾルゲはその「誇り高さ」に着目し、彼を利用した。これが組織関係から見た尾崎の位置＝地位である。この事実は、冷静に受けとめるべきであろう。

尾崎はこの点に関して、大きな錯誤を犯してい

た、思い違いをしていたといわなければならない。尾崎の不幸の多くは、自分の置かれている地位を「独り合点」したことにある。そのうえ自分の置かれている正確な位置を確認していない。これは、組織的観点をもつことを知らない、日本のエリート知識人の思いこみからくるものにちがいない。こうした認識の落差はひとり尾崎にとどまらない。以下に、尾崎に即してその証言をみていくことにしよう。

17. 尾崎の錯誤：「私は終始、コミンテルンのために協力してきたつもりである」

尾崎は東京刑事地裁で死刑宣告を受けたあと、堀川祐鳳弁護士宛に自分がどこに所属していたかについて、彼の「信じている」ところを述べている⁽⁴⁸⁾。自分は終始コミンテルンのために協力してきたつもりであるといい、自分の所属している部署もコミンテルンの何らかの部門と理解していたというのである。こうした理解あるいは信念は、彼の死まで変わることはなかった。彼は、そう信じてコミンテルンに忠誠を尽くして死に就いたというべきであろう。これは事実とは全く異なっているのである。尾崎は言う。

——「私は終始、コミンテルンのために協力してきたつもりであり、またゾルゲその人もコミンテルンから派遣せられたものと信じておったのであります。コミンテルンの本質はもとより超国家組織であり、私の政治目標もまた、つねに、世界的共産、大同社会の実現を志してきたものであります」。

ここで一言注釈を加えておくと、コミンテルン(Comintern: Communist International、共産主義インターナショナル、第三インター)は、ロシア革命に成功したレーニンらの指導により1919年モスクワで結成された「各国共産党の代表」による国際共産主義組織である。帝国主義戦争の脅威に反対の決議をし、またファシズムに対する各国労働者の統一戦線、人民戦線の戦術を決定した。しかし1929年スターリンがトロツキーなど有力

な勢力を駆逐して権力の座に着き、一国社会主義の方針を採ることによって、国際的革命推進派のコミンテルンの組織部、国際連絡部のメンバーは次々に追放され、粛清にかけられた。コミンテルンは1941年独ソ戦の勃発により壊滅に追い込まれ、1943年には解散している。尾崎にはコミンテルンが窮地に立たされ、壊滅に追い込まれているという認識なり情報が欠如していたのではないだろうか。

尾崎の言うところを聞こう。

——「私の本部（ここではコミンテルン本部）への情報報告は、国防保安法の、「外国へ漏洩する目的」を以てしたものでは決してなかった。コミンテルンはソ連邦とは理論上はもとより実際も別物です」。

ここで尾崎は、コミンテルンは国際組織であって、国家ではないという認識を示している。したがって、彼の情報活動は「特定の外国」に対して行ったのではなく、大同社会の実現を目指す「国際組織」に対して行ったと考えていたのである。実際は尾崎情報はすべてゾルゲに集約され、ゾルゲからソ連軍事情報機関に流されていた。尾崎の認識は、この点においても独り合点の錯誤といわなければならない。

尾崎はゾルゲの所属をどう見ていたのであろうか。また尾崎は日本人の関係者、協力者をどう見ていたのであろうか。これについても尾崎はいくつかの記録を残している⁽⁴⁹⁾。

——「ゾルゲは上海時代はたしかにコミンテルンに直属していたと思います。のち日本に来た際にはソ連赤軍政治本部に直属していたことを今度（＝裁判の過程で裁判長から知らされて）知りました」。

——「小生をゾルゲに紹介した鬼頭銀一なるものの調書にもコミンテルンと出て居ったと思います。小生に直接連絡していた、船越（寿雄）、水野（成）、川井貞吉等は、いずれも小生の理解と同じくコミンテルンの何らかの部門として理解していたことは、彼らの調書にはっきり出ているこ

とと存じます」。

このように尾崎は、ゾルゲはもとより、日本人の「鬼頭銀一」も、尾崎の協力者である船越寿雄、水野成、川井貞吉もコミンテルンの何らかの部門に属していたと信じていた。尾崎にあってコミンテルンへの理想主義的な忠誠心は抜きがたく根強いものがあつた。尾崎は裁判の過程で、裁判長からゾルゲがソ連軍事情報機関の情報将校だと知らされたあとでも、尾崎自身はコミンテルンのメンバーであることを信じつづけ、これにこだわった。これはやはり悲劇と言うべきであろう。あるいは、当時のエリート知識人のもつ自負心の強い「密かな誇り」といえるものであつたろう。

それでは、尾崎は、コミンテルンとソ連国家との関係をどう考えていたのか。その点をここで触れておこう。尾崎は、コミンテルンとソ連政府とソ連共産党とは三者一体であると信じていた。

——「私はコミンテルンとソ連政府とは機能的に全然同一のものであると確信しております」⁽⁵⁰⁾。

——「コミンテルンは現在の力関係から言うと、ほとんどソ連共産党の指導下に立ち、しかもソ連政府の中核をなしているのはソ連共産党であり、結局三者は一体をなしている関係に立つと理解しています」⁽⁵¹⁾。

——「コミンテルン内部におけるソ連共産党の勢力は圧倒的で、したがって政策決定についてもソ連共産党は指導的な地位にあるものと考えられます。ソ連共産党とソ連政府とはまさに密接不離一体の関係をなすものであります」⁽⁵²⁾。

この訊問調査を見る限り、尾崎はソ連共産党内部の熾烈な対立を知らない。スターリンがソ連国家の権力を掌握し、一国社会主義の路線を推し進める過程で、世界組織であるはずのコミンテルンが崩壊に追いやられていることを知らない。あるいは、信じようとしなない。裁判の中でゾルゲがソ連軍事情報機関の情報将校だと知らされても、尾崎はこれを信じようとしなない。なぜ日本の知識人は、コミンテルンという国際共産主義組織にこだわったのか。これは大きな問題であるに違いな

い。この点をあらかじめ指摘しておきたい。

しかしここでは、尾崎が、諜報グループの個々の人間の所属なり地位を「どう思っていたか」「どう信じていたか」について述べておく必要がある。

VIII 実務主義と理想主義

18. 尾崎のスメドレー、ゾルゲとの宿命的な出会い：「尾崎とコミンテルンとの関係は全くない」

尾崎は、1928年11月、多年憧れていた中国の地、国際都市上海に朝日新聞社特派員として派遣された。尾崎は上海において、初めは小グループから、ついには大きな国際的な左翼組織に入ってしまった。そこで彼はアグネス・スメドレーとリヒャルト・ゾルゲに出会うのである。この宿命的な出会いがその後の尾崎の「狭い道」を決定することとなった。

尾崎はその間のことを「上申書」に書いている⁽⁵³⁾。——「私がアグネス・スメドレー女史や、リヒャルト・ゾルゲに会ったことは、私にとって宿命であったと言い得られます。私のその後の狭い道を決定したのは、結局これらの人との邂逅であったからであります。もしもこれらの人々が少しでも私心によって動き、あるいはわれわれを利用しようとするがごとき態度があつたならば、私は反発して袂を分かつて至つただろうと思います」。

尾崎は「獄中書簡」の中でもスメドレーとゾルゲについて次のように書いている。

——「私のつきあつた外人のうち二人（一人は女、一人は男＝スメドレーとゾルゲ）がほんとに人間的には優れた人であり、かつ極めてあたたかい心を持ち、私と共鳴するように自己犠牲的人物であつたことが、私の運命を決定する一つの決定的な要因であつたことを感慨をもって回想します」(1943.11.10)。

そのスメドレーは、尾崎によれば、『フランクフルト新聞』の上海特派員で、アメリカの「左翼雑誌」の誌上でも名を馳せているアメリカの女性

ジャーナリストであった。当時は中国共産党の幹部と近い関係にあり、国際救援会の活動にも従事していたらしい。尾崎をゾルゲに紹介しようとした「鬼頭銀一」についていえば、尾崎は、「鬼頭」がコミンテルンのメンバーで、安南経由で中国入りしたと聞いており、アメリカ共産党とも関係があると信じていた。

尾崎は、ゾルゲその人の所属なり地位をどう思っていたであろうか。尾崎は、ゾルゲが「コミンテルンの特殊工作の部門に該当する重要部門」に属していると信じていた。ゾルゲは、コミンテルンの重要部門に属するとともに、「ソ連政府機構の内務人民委員部のゲ・ペ・ウ（＝国家政治保安部）」に密着しているものと理解していた。コミンテルンの或る部門に属するとともに、ソ連政府機構の一員となることは何ら不思議なことではなく、コミンテルンとソ連政府とは機能的に全く同一のものであると確信していたからである⁽⁵⁴⁾。

ゾルゲの国籍についてはドイツ籍かソ連籍か、あるいは二重籍かは判然とせず、ソ連籍か二重籍ならばソ連共産党に属し、かつ「ソ連政府の内務人民委員会の保安部」に属しているのではないかと尾崎は想像していたが、この点は単なる想像にすぎないと言っている（＝ゾルゲの国籍はドイツである⁽⁵⁵⁾）。

尾崎の証言には「信じている」「確信している」「理解している」、場合によっては「想像している」という述語が頻出するが、情報活動に携わっている秘密の人間関係の中で、個人の属性・所属の「事実」を相手に確認することは、相互の信頼関係を壊すことにもなりかねない性質のものであった。とくに尾崎のような知識人にとっては、なすべきことではなかったのである。尾崎の言動はそういう信義にもとづいていたと思われる。尾崎はいう。——「強いて斯くの如きことを問うということはコミンテニストとしては、為すべきではないのであります」。

ゾルゲ・グループは、いったいどこの上級機関に属していたと尾崎は考えていたのであろうか。

ゾルゲは「われわれのグループ」(our group) という言葉を使っているが、尾崎は、その「われわれのグループ」なるものがコミンテルン内に属している一つの部門であると理解していた。

尾崎自身は自分がどこに所属していると思っていたのであろうか。尾崎は1935年以後は、「コミンテルンの正式メンバーとして登録されている」に違いないと堅く信じていた。この点について、尾崎の証言を引用・摘記しておくべきであろう。

——「昭和10年冬頃、当時モスクワその他に旅行して帰ってきたゾルゲから、「われわれの母国の知人たちが、君のことを知っているよ」と伝えられたので、私がコミンテルン組織内のゾルゲの属している、特殊な重要部門の正式メンバーとして登録されているということだと理解し、遅くも昭和10年夏頃以後においては、コミンテルンの正式メンバーとなっているものと堅く信じて今日に及んでおります」⁽⁵⁶⁾。

——「われわれの機関がどこに所属するものであるかはとくにゾルゲに聴いたことはありませんが、私は従来の経験判断からコミンテルンに属するものと理解し、ことにコミュニストとしてのゾルゲや宮城を信頼して諜報活動に従事してきた次第であります」。

——「私はモスクワ本部（ここではコミンテルン本部）の正式メンバーとして登録されているに違いないと信じておりました」。

以上見てきたように、尾崎の供述には尾崎独特の思い込みがあるといわなければならない。尾崎の思い込みに比べれば、ゾルゲの訊問に対する回答はドライであったといっている。中村光三予審判事が執拗にゾルゲを問い詰め、その訊問から得られた「事実」は、以下のようなものであった。尾崎の「思いこみ」とゾルゲの供述した「事実」とを比較すれば、そこには大きな相異が認められるのである。主要な点だけをここに指摘しておこう。

第一は、ゾルゲの所属である。ゾルゲはコミンテルンに属しているのではなく、「赤軍第四本部＝ソ連軍事情報機関」に属していた。ゾルゲは1929

年にコミンテルンから離脱し絶縁して、赤軍第四本部の指令のもとに諜報活動に従事していた。したがって、ゾルゲの情報はすべて第四本部にだけ連絡されていたのである。この点についてゾルゲは断言する。

——「私の職務上の連絡は第四本部との関係に尽きるのです。また1929年冬、私はコミンテルン機関から離脱しましたので、コミンテルンとの職務上の関係は絶えました」。

第二は、ゾルゲとアグネス・スメドレーとの関係である。スメドレーはゾルゲより先に中国に来て新聞記者をしていたが、彼女の完全な了解の下に、ゾルゲの仲間に入ってもらった。彼女は正式の共産党員ではなかったが、左翼思想の持ち主で評判の高い女性記者であった。ゾルゲは「ヨーロッパにいたときから彼女の名前を知っていた」。上海では『フランクフルト新聞』の紹介で、ゾルゲは彼女に会うことになったといっている。

第三は、ゾルゲと尾崎との関係である。ゾルゲと尾崎とはスメドレーの紹介で知り合いになった。ただし、ゾルゲは、尾崎が中国の共産党と密接な関係をもっていることを事前に知っていたならば、尾崎と深い関係に入ることは断じてなかったであろうと述べている。それほどゾルゲは、共産党との関係は持たないように気を遣っていたのである。この点はやはり重要である。

その尾崎の地位についていえば、ゾルゲは尾崎を、中国と日本での彼の活動のために私的・個人的に引き入れたものである。1935年、尾崎は彼の名をモスクワのコミンテルン本部に登録してほしいと申し入れているが、ゾルゲは、尾崎の希望するコミンテルンでなく、彼を赤軍第四本部にゾルゲの「協働者」＝諜報員として登録を申請した。尾崎は承認され、ゾルゲの諜報グループの一員として登録されているのであるが、ゾルゲはこのことを尾崎に正確には伝えていない。尾崎はこの国の共産党員でもなかったが、中国共産党の人々に接近していたことをゾルゲは「危険」だと感じていた。そういった上で、ゾルゲは断言す

る。「尾崎とコミンテルンとの関係は全くない」。

第四は、「鬼頭」についてである。ゾルゲは彼に会ったことはないが、スメドレーから非常に有名な左翼思想家であると聞いていたと答えているだけである。ゾルゲは何らかの理由で、「鬼頭」に言及することを避けているフシがある。その理由は、ゾルゲは第四本部から各国共産党員との関係を断てと指令されていたからである。

19. 実務主義と理想主義：「私は第四本部から来たとはいわなかった」、「コミンテルンの理想主義はメンバーに引き入れるための説得の手段であった」

以下に、ゾルゲの諜報グループのメンバーについて、ゾルゲの語ることを書いておこう。

①まずドイツ人のマックス・クラウゼンは、ゾルゲの要請により赤軍第四本部から彼のもとに派遣された正規のメンバーである。クラウゼンは赤軍第四本部に属している無線学校を出ていた。クラウゼンはドイツまたはソ連において正式の共産党員であったかどうかはわからない（のちにゾルゲは革命的労働団体の一員だったと訂正している）。ゾルゲとクラウゼンとの関係は第四本部を介しての間接的な関係であるが、ともに赤軍第四本部から派遣された諜報員であることにおいて、指導者と部員というフォーマルな関係でつながっている。クラウゼンはコミンテルン内部で働いたことはなく、彼はコミンテルンとは全く関係がない。

②クロアチア出身のヴァーケリッチも、第四本部の部長からゾルゲに差し向けられた正規の協働者であるが、彼は共産党から離れていた。

③沖縄出身の画家でロサンゼルスに住んでいた宮城与徳は、第四本部からゾルゲに差し向けられた正規の協働者である。宮城は、第四本部ではゾルゲの協働者として登録されている。宮城はアメリカ在住のころはアメリカ共産党員であったが、アメリカを離れると同時に、アメリカ共産党員の資格を失った。彼はゾルゲから、諜報という機密

情報を扱う仕事の性格を理由に、日本共産党への入党を固く禁じられている。

④要するに、ゾルゲの諜報グループの正規のメンバーはクラウゼン、ヴーケリッチ、宮城の三人であるが、それにゾルゲの私的・個人的な協力者としての尾崎を加えれば四人となる。彼ら諜報メンバーのうち正式に共産党に所属しているものは誰もいなかった。この点、つまり「正式に共産党に所属している者は誰もいなかった」という点は、とくにゾルゲが強調するところであった。

第四本部＝ソ連軍事情報機関とその命令下で「仕事」をしているゾルゲは、諜報活動と革命運動、軍事情報組織と政治組織、軍事機密活動と政治活動とを峻別していたのである。この点は、ゾルゲ＝尾崎事件の本質を知る上で、きわめて重要なポイントになるとと思われる。

⑤日本におけるゾルゲ＝尾崎グループの協力者、水野成と川合貞吉について、ゾルゲは次のように述べている。元来、水野はゾルゲ・グループとは何の関係もなく、ただ尾崎を通して「間接的に関係」があったにすぎない。川合は、中国ではゾルゲ・グループの協力者・援助者であったが、日本においては「何ら関係がなかった」。彼は貧乏をしていて尾崎に頼り、のち宮城とも交際するようになった。川合はメンバーではないが、同人からの情報は、尾崎または宮城を通して入手したと述べている⁽⁵⁷⁾。

以上が、中村予審判事の鋭く峻厳な訊問に対して、ゾルゲがその主要メンバーの所属と地位について答えた回答の要約である。

ここで、以上の議論をふまえて、いくつかの問題点を指摘しておこう。

上海滞在中、尾崎は、ゾルゲをコミンテルンのメンバーだと考えていた。ゾルゲは尾崎に、自分はコミンテルンの登録メンバーだと思わせていたフシがある。尾崎のほうは、折に触れて、ゾルゲがソ連政府のために活動していると気づいたことはあるが、コミンテルンとソ連政府とは密接不離の関係にあって、この二つは両立する、と自分流

に解釈していた。結局、尾崎は、ゾルゲがソ連軍事情報機関の諜報員だと気づき、不審の念を抱いたことがあったとしても、それを腹の中にしまっていたと述べている。それは尾崎の信念に基づいたものである。裁判の終盤で、この「事実」を裁判長に告げられたあとでも、尾崎はゾルゲの本当の所属を認めようとしなかった。尾崎の矜持がそれを認めさせなかった。それを認めれば、尾崎の「ひそかな誇り」は傷つけられたにちがいない。

各国のコミュニスト（共産党への所属、非所属は問わない）にとって、ソ連第四本部＝ソ連軍事情報機関よりも、国際組織のコミンテルンのほうがはるかに権威があり、重視されていることをゾルゲは知っていた。ゾルゲはそれを知っていたからこそ、尾崎秀実や宮城与徳、そしてヴーケリッチをソ連第四本部の諜報員に引き入れる説得手段の一つとして、コミンテルンという名の権威を借用したのである。ゾルゲが、尾崎にも宮城にもヴーケリッチにも彼らが第四本部の諜報員であるという事実を明かさなかった理由は、実はそこにある。

この点についてゾルゲは次のように釈明している。——「ヴーケリッチ、宮城、尾崎の三人に対して私が第四本部から来たということを強調したことはなく、一般にモスクウと申しておりました。この三人はこれ（＝ゾルゲの所属）につき、別に詳しく聞きませんでした。ことに尾崎に対しては、モスクウのいかなる機関に彼の名を申告したかは話しておきませんでした。右三人とは異なり、クラウゼンは事情を知っておりました」。

要点を言おう。ゾルゲとクラウゼンはソ連第四本部の指令に従って、本部から与えられた「仕事」をこなしていた。諜報活動はこの二人にとっては実務である。ヴーケリッチ、宮城、尾崎の場合はそうではない。彼らはコミンテルンの一員であると独り合点して、「世界革命」を志向した。彼らは社会主義に未来を見て、自らの信じる理想主義を追求したと述べている。実務主義と理想主義、この違いは大きいと言わなければならない。

この違いは組織内部の亀裂の契機をはらむものであるが、この点については、メンバー相互間のコミュニケーション構造（ヨコのコミュニケーションがない）においても明らかにされるはずである。

IX 参加の動機

20. 尾崎を決断させた動機：「この困難な割の合わない仕事に従事することこそ、誇るべきことだとひそかに考えた」

1932年2月、尾崎秀実は大阪朝日新聞本社への転勤命令を受けて上海を去った。上海のゾルゲとは関係を切ったつもりであった。ところが、1934年晩春5月の午後、大阪朝日の本社（大阪市北区中之島）に「南竜一」という名刺をもった青年が尾崎を訪ねてきた。その青年の用件というのは、ある外国人の使いで来た、その外国人は上海であなたが非常に親しくしていた人です、いま日本に来ている、会いたいといっているからぜひ会ってくれないか、ということであった。尾崎は警察のスパイではないかと警戒したが、「南」は、「あなたの奥さんのこともお嬢さんのこともよく知っている人だ」と付け加えたところ、尾崎はその外人がジョン（＝ジョンソンすなわちゾルゲ）であると推測することができた。

その日の夕刻、尾崎は「南」を中華料理店に誘った。その南竜一なるものの本名は宮城与徳であり、彼はアメリカの元共産党員であったが、アメリカで「コミンテルンの命」を受けて日本に派遣され、尾崎をジョン（＝ゾルゲ）に引き合わせるのも、その任務であると知らされた。宮城は、翌日の日曜日、尾崎の稲野（阪神沿線の芦屋付近の兵庫県稲野村）の自宅を訪ね、ジョンと尾崎が密会する約束を取りつけた⁽⁵⁸⁾。宮城は、ゾルゲに命令されて、ゾルゲと尾崎との仲介役をしたのである。二人が会う指定の場所は、奈良公園帝室博物館前であった。

その数日後の1934年6月の昼さがり、二人は指

定の奈良公園で上海以来の再会を果たした。興福寺から猿沢の池に通じる石段で、ゾルゲは尾崎に、日本の情勢について知らせてほしいと依頼した。尾崎はゾルゲから「任務を課された」と受け取った。

——「また一つ大いに日本の情勢について手伝ってくれ、今度は中国でなく日本だ」、「日本における政治、経済、軍事、その他一般情勢についての情報と、それらについての貴君（＝尾崎）の意見を知らせてほしい」⁽⁵⁹⁾。

尾崎は、再びゾルゲに協力することをその場で「決意」し、与えられた任務を遂行することを「承諾」した。尾崎ほどの知識人で、社会的地位にも恵まれた人間が、なぜゾルゲの依頼を引き受けたのか。尾崎の決断は祖国への反逆者になることだ。しかし尾崎は、その日のうちに奈良において決断した。この決断には特別の勇気が必要だったはずである。尾崎はなぜ決断したのか。尾崎を決断させた動機とはいったい何だったのか。いくつかの文献資料から、その周辺をさぐりあててみよう。その動機を解くキーワードの一つは、国際活動に携わる「密かな誇り」というべきものであったろう。

尾崎が東京帝大法学部に進学した翌年の1923年、日本共産党員の一斉検挙が行われたが、そのころの彼は、特別に Kommunismus に傾倒していたわけではなかった。尾崎はむしろ社会学に興味を持ち、国家主義者と目されていた上杉慎吉教授のもとで国家社会学を学んだ。「私は上杉さんは学問的立場は別として人柄がすっきりしていて、好きな人でした」と語っている。尾崎が大学を出る最後の時間に、上杉慎吉が慈父のように卒業生に語りかけた。「社会学の時でしたが、しみじみとした口調で、いい女房を持った者は立派に人格を伸ばし社会的地位も高くなったが、悪妻を持ったものは皆いけなない」。尾崎は、獄中で上杉慎吉のこの言葉を何度か反芻した⁽⁶⁰⁾。

その尾崎が、卒業間近のころ（1924年）、新入会で森戸辰男の「思想と闘争」という講演を聞いて

て深く心を打たれ、新しい思想を開拓することに英雄主義的な興奮を感じた。高等文官試験を受けてはみたが、失恋の痛手から学業を放擲していたため、試験には失敗した。尾崎は大学院に進み、大森義太郎経済学部助教授をチューターとするブハーリンの「史的唯物論」研究会に参加するようになった（1925年）。そのころから、種々の左翼文献を渉猟し、 Kommunismus 研究に没頭するようになった。

尾崎の思想は人道主義的なものから共産主義的なものに転じ、1925年頃には「共産主義を信奉するに至った」。1928年、共産党ならびにそのシンパに対する大弾圧、いわゆる三・一五事件が起きている。尾崎はこれに強い衝撃を受けた⁽⁶¹⁾。

三・一五事件当時、尾崎は共産主義者としての明確な自覚を持つにいたっていたが、この弾圧事件により、党と関係を持つのは賢明でないと察知した。大阪朝日特派員として上海に滞在するようになると（1928年11月）、中国共産党の活動に共鳴を覚えるようになった。

ゾルゲと「狭い道」を歩むことになるその動機について、尾崎は次のようにいっている。今だからこそ、この困難で割の合わない仕事に従事することが最も重要な「使命」であり、むしろ「密かな誇りである」と考えたというのである。具体的に引用しよう。

——「最初から諜報活動を専門にやる気であったわけではありません。われわれの活動の諸部門の中でソ連防衛は最も重要なものの一つであります。そのソ連を防衛する手段として、（ソ連にとって最強の敵とみられる）日本内部の各般の事情を的確にコミンテルンないしはソ連政府に通報して、これに対策を講じさせるということは、日本において日本共産党がほとんど存在しない無力な場合においては最も重要な使命であると考え来たのであります。私は日本における共産主義者としてはこの困難な割の悪い仕事に従事することこそ、むしろ誇るべきことであるとまで密かに考えた次第であります」⁽⁶²⁾。

日本共産党が弾圧され壊滅状態に追い込まれていたこの時期に、尾崎はひそかに国際的に活躍する共産主義者の一人であると自負し、そうした使命感から、困難ばかり多く一文の得にもならない国際活動に従事することを「密かな誇り」であると思ったのである。密かな秘儀に参入し国際共産主義者として活躍する孤高な誇り、このあたりに尾崎の自負心に訴える動機理由がありそうだと私は推測している。

尾崎の動機は金銭にあったのではない。尾崎は報酬を目当てに諜報活動に従事したのではない。金銭を得ようとして情報を買ったのではない。逮捕直前の尾崎は、十分すぎるほど高額な収入を得ていた。満鉄嘱託（1939年6月から勤務）の給料や原稿料を合算すると、年収2万2千円にもなった。この点について尾崎は、「固き信念の下にその活動に従事してきたのであって、もとより報酬などを目当てにやってきたのではない」。したがって、「ゾルゲからも一定の額を定めて金銭の支給を受けたことはない」と断言している⁽⁶³⁾。この断言は、各種の傍証から信じてよいものである。

いま一つ、尾崎の動機については朝日新聞社内の人間関係が絡んでいたのではないかと思われる。社内において尾崎は、決して良好な人間関係に恵まれていたのではなかった。また組織人としてもスマートではなかった。尾崎は朝日新聞社内の「空気はなまぬるいものだった」といっているが、当時の上司、編集局長の緒方竹虎とはうまくいかなかった。尾崎は、緒方が「端麗」で美しすぎて、彼に近づくことはできなかった。尾崎を懐に飛び込ませなくてよかった、と緒方は思っているはずだ、と逮捕後の尾崎は述懐し、人生に良師を得ることはまことに難しいことだ、と上司への不満を述べている⁽⁶⁴⁾。

朝日新聞社内では尾崎は美食家、艶福家として有名だった。尾崎は、女性関係において驚くほどエネルギーであったことがよく話題になり、同僚の間ではそれが強い印象として残った。新聞記

者（1926-38）から近衛内閣嘱託（1938-39）になり、さらに満鉄調査部嘱託（1939-）と忙しい勤めを持っていたほかに、評論や講演などをこなし、そのうえ秘密の国際諜報活動までやってのけたのも、尾崎が「遊び人」だからできたのだ、エネルギーな美食と女性関係があったからできたのだというのが、当時、朝日にいた同僚の尾崎評であった。組織人としては、やはり逸脱しているところがあったといわなければならない。

朝日新聞社以外でも、尾崎の女性関係は語りぐさになっていた。友人の松本慎一は「新橋、赤坂、神楽坂などで彼を見かけた人は少なくあるまい」といっている。諜報グループの一人、川合貞吉は「尾崎は女にもてた。いつも私はあてられた。彼の短い生涯はいろいろな意味において、愛情は「ふる星のごとく」であった」と語っている⁽⁶⁵⁾。

尾崎には旧くからの友人が少なく、孤独であったことも、動機の一つに数えられる。尾崎は日本共産党に属さず、中国共産党員でもなかったが、既成組織の指令は、彼の「不遜にして批判的な性格」には合わなかった。尾崎は自己の信念のみを恃みとする「ひそかな誇り」の持ち主であった。

危険を察知しながら、不遜で高慢な尾崎は、その孤独感から脱しようとしてゾルゲと再会し、親交を回復させようと思った。「コミンテルンに所属すると信じていた」ゾルゲとの親交を回復させることによって、その後の人生の「狭い道」を選択しようと思ったに違いない。ゾルゲとの再会は、彼の孤独感をいやすことになるだろう。同時に彼が「ひそかな誇り」として胸中に秘めていた世界革命構想を実現する道が拓けるかもしれない。ゾルゲとの親交を復活させることによって、尾崎は国際活動に加わって、国際人になろうとした。彼が即座にゾルゲへの協力を約し、諜報活動に踏み切る決断をした動機を、私は、以上のように解釈する。

尾崎は夜の巷で外見的には社交家であった。その反面、実は本当の友人は少なかった。おそらく尾崎は夜毎に美酒を飲み、女性関係に忙しかった

としても、「不遜で批判的な」彼は、日常の人間関係のまずさから孤独な人であったと思われる。兄事する先輩は少なく、同年輩の旧友はさらに少なかった。尾崎の親友は四、五年上の上級生に二人しかいないという尾崎自身の発言にも驚かされるが、これは、何よりも同年輩の友人がいないことを示す証言である。「お高くとまる」尾崎の性格にはどこか狷介なところがあって、人間関係に齟齬を来していた。やはり組織人ではなかったのである。この点に関して、尾崎自身の書いたものから引いておこう。

——「私は行動のあわたしさと、人間が不遜にして批判的であったために、不幸にして心から先輩に全的に服することができませんでした」（1943.11.10）⁽⁶⁶⁾。

——「私は中学時代には一人で無闇に高く標置しており、同級生や一、二級上の友人などは相手にしなかったのです。親友というのは五級上の友と、四級上のあの六高から工科に来て工学士になった人、二人です」（1944.7.7）⁽⁶⁷⁾。

21. 尾崎の世界革命構想：「順逆を誤ったことに卒然思い至った」

大阪朝日に転勤した尾崎は1932年から34年、伊丹近郊の稲野に一家を構えて平穏な家庭生活を楽しんだ。英子夫人は稲野時代がいちばん懐かしかったと言っている。稲野で平和な家庭生活を営んでいたそのときに、尾崎は、ゾルゲとの劇的な再会を果たし、ゾルゲに協力することを決断したのである。尾崎のゾルゲに対する協力への動機は、上述のように私は臆測するが、ここではさらに踏み込んで、尾崎の思想構造を考えてみよう。それは、尾崎の思考回路といってもいいし、尾崎を支えた思想的信念といってもいい。

何故にあの安らかな平和な家庭を、突如、この不幸に突き落とす必要があったのだろうか、と尾崎は自問し、「私としては言うべき言葉はありません」と自答する。尾崎にとって肉親との関係を切断することは最も辛いことであった。この辛さ

を乗り越えさせるほどの強い思想的動機とはいったい何だったのか。肉親との関係を絶ってまで身を捧げなければならない、命がけの信念とはいったい何だったのか。

まず尾崎の書いた「獄中書簡」の中から、この問題解明へのヒントを探ることにしよう。前もってひとこと言っておけば、尾崎が自分で獲得した信念を成就させるために、自己を猛火の中に投げ入れ、事破れたときは、妻子と永久に別れる決心をしていたのである。

——「私は前から今日の結果になることを予見していたのです。英子たちの運命を傷つけてはならないことを考えて、どれだけ苦しんだか知れないのです」(1943.1.21)⁽⁶⁸⁾。

——「私は元来単純なコンミュニストではありません。極めて政治的な考慮に立っていたので、近來はほとんど民族主義者であったわけです。英米との戦いを不可避と考え、かつ東亜の自主解放を考えてこれを主張してきました。これと同時に、国際的な協調完成を理想としていたのです。誤りはこのあまりに空想的な点にありました」(1943.3.5)⁽⁶⁹⁾。

——「私は十年ももっと前から世の中の赴きつつあるところをひそかに察し、心に期したところは何も言うまい、と決心していました。事破れたとき私は妻子と永久に別れることを思いました」(1943.3.8)⁽⁷⁰⁾。

——「再びこの家に帰ることはない。今度の出来事は、実は私にとっては遠くから定まったことでした。当時ひたむきに目を向き始めた新しい人生の方向をひそかに感じて、ずっと考え行動し続けてきたのです。家庭のことも省みることが少なく、これもやはり私の世界観なり時代観に主として起因していたのです。私の浪費癖と書きましたが、実は自覚的にその日暮らしであった理由があるのです。どうせ一切をあげて、自分を猛火のうちに投ずるのだという意識が、身の辺のこともみならず、家庭のことも省みさせなかったのです」(1943.10.15)⁽⁷¹⁾。

——「元来、私にとって思想なり、主義主張なりは文字通り命がけのものであったことは申すまでもありません。それを根本的に考え直すということは一度死んで生き返るにも等しい困難なことだったのです。しかしながら一度これを成し遂げた後はほとんど想像も及ばぬ確固たる平安の境地に達したわけであります。駆け出しのマルクス・ボーイのいわゆる転向者などの理解しあうところではありません」(1943.10.23)⁽⁷²⁾。

尾崎の立場がコミュニストにして民族主義者であるということは分かるが、その尾崎が「心に期したもの」が何であるかは、以上の「獄中書簡」の引用からは明確には読みとれない。それらはすべて検閲を通した上で、郵送されたためであろう。厳格な検閲という手続きが絡んでいるためか、尾崎の文章は、どこか具体性を欠いているように思われる。

尾崎は、「ひたむきに目を向き始めた新しい人生の方向」に向かって行動してきたといい、その行動をささえている世界観・時代観のゆえに、彼は自らを猛火の中に投げ入れ、家庭を省みさせなかったというのであるが、その「新しい人生の方向」というのも具体的には分からない。さらに命がけで体得したという確固たる「思想や主義主張」の内容も、この引用からは分からない。しかし、尾崎は図らずも、彼の主張は空想的すぎる点に誤りがあったと自省している。その上で、尾崎は、次のような衝撃的な言葉を書いているのである。

——「私は時局の緊迫に押され、ふと目の覚めたとき、「順逆」を誤ったことに卒然思い至ったときには何とも言えない焦燥感を感じました」(1943.10.23)⁽⁷³⁾。

尾崎は「上申書」の中においても、「順逆」を誤ったことについて、以下のように述べている。——「私は一度、自らの罪の深さに目覚めて以来、「順逆」の道に誤り戻った自己の過去を思って、身の置きどころなきほどの苦悶を覚え、限りなき焦燥を感じました。これを思うとき、私は生きる勇気すら失わんとするを覚えます」⁽⁷⁴⁾。

妻子と永久に別れなければならぬと尾崎に決意させたその信念とは、いったい何であったのか。尾崎の訊問に対する供述（1942年2月から4月まで）をもとに、その要点をここで明らかにしておきたい。尾崎の信念ともいべき思考回路は、次のように要約することができるであろう。

第一に、日本はドイツ、イタリアと提携するであろう。

第二に、日本は結局イギリス、アメリカを相手に戦うに至るであろう。

以上二つをまとめれば、日本・ドイツ・イタリアとイギリス・アメリカとが世界的規模で戦う第二次世界大戦は避けられないであろう。

その不可避とみられる世界戦争は、どうしたら阻止できるのか。尾崎の信念の核心ともいべきものは、実はそこにある。そのためには、

第三に、世界革命構想のシナリオをつくる必要がある。すなわち、その手順として、

①われわれは、ソ連またはコミンテルンの力を借りる。

②それによって、中国の社会主義国家への転換を図る。

③これとの関連で、日本自体の社会主義国家への転換を図るべきである。

尾崎はこういう「世界革命構想」のシナリオを考えていた⁽⁷⁵⁾。つまり、尾崎の世界革命構想を図式的に示せば、国際（世界）→東亜→日本という順に社会主義への転換をはかるべきだという筋書きであった。その世界革命構想の目標は何か。

④その目標は、「東亜諸民族の西欧帝国主義支配からの解放」に置かれなければならない。

尾崎が「順逆を誤った」ことに卒然思い至って、身の置き所のないほどの苦悶を覚え、限りない焦燥感にとらわれたのは、国際→東亜→日本というシナリオの順序に誤りがあったことに気づいたからである。「国際主義」とか「世界革命」というのは迷夢・迷妄にすぎない、このシナリオは地に足が着いていない、宙に浮いた空想にすぎない、これを信じるとは嗤うべき浅はかなことであ

る、と深く自省するにいたったのである。

なぜその構想は迷夢にすぎないのか。その理由は、個人と国際社会をつなぐべき媒介要因が弱いからである。その媒介項となるべき強い社会的紐帯が欠如しているからである。むしろ逆に、目に見える社会的紐帯に着目すべきであったと思ひ至ったに違いない。日本→東亜→国際、あるいは、日本と中国との平和的提携から国際社会の変革へという順序で革命構想を思い描くべきであった。図式的に言えば、日本＝東亜→国際という順序が正しかったということに思ひ至り、限りない焦燥感にとらわれたのである。

尾崎が、この世界革命構想の三項のうち、中間の媒介項となる「東亜新秩序社会」または「東亜民族共同体」（「東亜協同体」）の実現にこだわったのは、それが世界共産主義社会に至る一つの過程であると位置づけていたからである。尾崎のいう「東亜新秩序社会」というのは、日本国内の革命勢力が弱く、日本の変革は日本だけでは行いがたいと考えられ、日本を社会変革するためには、ソ連、日本ならびに中国の三民族の提携を必要とし、この三民族の結合を中核として「東亜民族共同体」の確立をめざすという構想であった。

そのめざすべき目標は、日本・ソ連・中国の三民族の提携援助によって、東亜諸民族の西欧帝国主義からの解放をめざすことに置かれた。日中戦争が次第に世界戦争の様相を帯びてきたことを契機に、尾崎は「東亜新秩序社会」、いわゆる「東亜協同体」の実現が決定的に重要なものになったと確信するに至ったのである⁽⁷⁶⁾。

もう少し現実に即していおう。尾崎はゾルゲグループの一人として、「コミンテルン」（といっても国際組織「コミンテルン」ではなく、実はソ連赤軍第四本部）のために活動する前に、身近なところでやるべきことがあったはずである。それは「中国問題専門家として、近衛内閣囑託という役割を利用して、日本と中国との戦争をやめさせるべく力を尽くすべきであった」⁽⁷⁷⁾。鶴見俊輔は、尾崎の「順逆を誤った」意味をこのように解

積する。私も、この説に賛成である。

要するに、尾崎は、獄中であって、世界革命を構想する前に、日本と中国との平和的な提携関係の実現にもっと力を傾注すべきであったと気づいたのである。ただ気づいたのがあまりにも遅すぎた。尾崎の「順逆を誤った」という意味は、以上のように解釈することができるであろう。

尾崎が「東亞諸民族の解放」をめざすことを思想的信条とし、西欧列強、とくに英国を打倒すべしとの信念を強くいだくようになった契機は、上海時代の経験にあった。尾崎は「上申書」の中で次のように述べている。

——「私の思想立場に特徴を与えた点は、第一に支那がいわゆる半植民地の地位にあること、第二に支配的立場を占めている英国を、世界の被抑圧者の最大共通の敵と確信したことでありました。上海の公園には「犬と支那人入るべからず」の立て札こそすでに撤せられていましたが、上海の主人公は事実上英人でありました。世界の新しい歴史時代を開くためには、まず英国を打倒することが第一の要件と深く信じたのであります」⁽⁷⁸⁾。

X 情報源へ侵入：ゾルゲと東京ドイツ大使館

22. ゾルゲに命じられた日本での任務：「日本の対ソ政策を観察せよ、日本がソ連攻撃を計画しているかどうかを明らかにせよ」

1931年9月18日の夜、奉天付近で南満州鉄道が何者かによって爆破された。満州事変の勃発である。日本の関東軍（満州駐屯軍）は、それを中国人の破壊行為だと主張し、中国軍との激しい砲撃戦のすえ、奉天を占領し、全満州を制圧した。1932年満州国の独立が宣言された。日本が言葉巧みに「満州事変」と称したこの中国侵略は、日ソ間のバランスを崩す危険性をはらんでいた。上海にいたゾルゲは、さっそく川合貞吉を中国北部と満州に送り込んだ。川合は一時日本警察に逮捕されたが黙秘を続け、間もなく釈放された。ゾルゲは、その川合から満州事変の全般的情勢につい

での情報を得た。

ゾルゲは、満州事変についての情報から判断して、「中国軍は強力な日本軍の敵にあらず」、日本は中国にとって西欧帝国主義以上の脅威になるとの確信を強めた⁽⁷⁹⁾、⁽⁸⁰⁾。

リヒアルト・ゾルゲは、1930年、赤軍第四本部の命令で中国に派遣された。そのとき彼に与えられた諜報活動の任務は、蒋介石南京政府の政治力・軍事力の評価であったが、ゾルゲは、蒋介石の南京軍が日本軍と衝突したとき、蒋介石にはとうてい勝ち目はないとの見通しをつけた。こうした現地観察にもとづく判断が、ゾルゲの諜報活動の本来の「仕事」であった。赤軍第四本部から命じられたこの任務のために、彼は中国で、当初の二年間の予定を、実際は三年間費やすことになった。ゾルゲはこの諜報活動を通じて、「偽装」という貴重な経験を積むことになる。すなわち、巧みな「偽装」によって、極東問題専門の「記者」としてだけでなく、中国の農業事情の「専門家」としての地位も確立したのである。

1933年1月、ゾルゲはモスクワに帰った。赤軍第四本部の最高責任者ベルジン将軍に会い、中国における活動を報告した。ベルジンは、彼の中国での仕事は満足すべきものであると評価した。これから先しばらくの間、ゾルゲは中国の農業問題に関する著述を完成させたいという希望を述べた。だが、その希望を果たすべき時間的余裕は与えられなかった。1933年9月、第四本部の命令により、日本に派遣されることとなったからである。

ベルジンにどこへ行きたいかと聞かれ、ゾルゲは、中国北部、満州と答えたあと、冗談半分に「東京だって、悪くない」と答えた⁽⁸¹⁾。

1933年、東京派遣にあたってゾルゲに命令された任務とは、外国人に監視の目を光らせる日本社会において、「日本の対ソ政策についての情報を集めることはできるのか、どういうやり方ならいいのか」ということであった。これが最も重要な任務であり目的であった。ゾルゲは「手記」

の中で、やや詳しく次のように書いている。

——「満州事変以後における日本の対ソ政策の詳細を観察し、日本がソ連攻撃を計画しているかどうかの問題につき綿密な研究を行うこと。これは、私と私のグループに与えられた任務中でも長年にわたって最も重要な任務であって、これこそが私が日本に派遣された目的のすべてだといって間違いでないと思う」⁽⁸²⁾。

1933年、東京派遣にあたって、ゾルゲは事前にベルジン将軍から次の三つの確約を得ていた。ベルジンとの確約の一つは、外国人の協力者を一人与える、これがすなわちヴェーケリッチである。二つは、日本人の協力者も与える、これが宮城与徳である。三つは、ラジオ技師＝無線技師を与える、これが当初はベルンハルト、その後任がマックス・クラウゼンであった。

こうした確約のもと、ゾルゲは、東京派遣という新しい任務のために、本物の旅券と新聞通信員の身分証明書を手に入れ、恰好の「偽装」をつくる必要があった。恰好の「偽装」とは、まず第一に、ドイツの新聞記者、新聞通信員に偽装し、「変身」することであった。第二に、日本の有力人士への紹介状を手に入れることであった。第三に、正当な旅券を獲得することであった。第四に、ナチスに入党して、「イデオロギー的資格」をフォーマルに獲得することであった。これは、「イデオロギー的偽装」にほかならない。

東京派遣から2年後の1935年、ゾルゲは再び赤軍第四本部からの命令により呼び出されてモスクワに戻った。モスクワに帰ってみると、赤軍第四本部長（最高責任者）であったベルジンは更迭され、ウリツキー将軍に変わっていた。ゾルゲとクラウゼンがウリツキー将軍に挨拶し、その場を立ち去ろうとしたとき、ウリツキーがゾルゲにその任務を強く命令した。

——「唯一の使命は、諸君の情報によって日ソ間の開戦を避けさせることだ。諸君の正確な情報があれば、日本との軍事紛争は避けられる可能性がある。そういうことが可能な情報をソ連に伝える

ことだ。これが諸君の情報活動の任務だ」⁽⁸³⁾。

この点についてゾルゲの「手記」には、次のように書かれている。

——「満州事変以後、ソ連は日本が対ソ攻撃を計画しているという深い猜疑心をもつようになった。われわれは、日本が対ソ攻撃を考えているかどうかを明らかにするという主要使命のほかに、日本の対ソ政策に関係のあるあらゆる対外政策を観察する任務を負わされた。モスクワ（赤軍第四本部）は、満州とシベリア間の国境問題、蒙古と満州の国境問題に最も大きな関心を示していた」。

ゾルゲはウリツキー将軍の命じた難題を引き受けたが、同時に、この命令を遂行するために次の三点を要請して、赤軍第四本部の最高責任者ウリツキーから承諾を得ている。これは、情報将校ゾルゲのしたたかさの一面を示すものである。

第一点は、彼の諜報グループの一員として、尾崎を承認してほしいと要求した。第二点は、クラウゼンなどの優秀な無線技師を自分のグループに入れてほしいと要求した。第三点は、東京ドイツ大使館へのアクセスを要求した。これは、諜報＝情報活動にとってきわめて重要な要請であった。すなわち、ゾルゲが東京のドイツ大使館へ自由に出入りできるような「行動の自由」を要求したのである。ウリツキーが最も懸念していたのは日独の接近である。両国はソ連を共通の敵として手を握るかもしれない。これに対してゾルゲは、ドイツ大使館とのつながりを強める一つの提案をしている。

この点についてゾルゲは、訊問調書で次のように述べている。

——「1935年に私がモスクワに行ったとき、私は、ドイツ大使館との私の関係を強化するために何らかの情報を大使館に供給する許可を与えられた。いつ、どのような情報を回すかは私の判断に任された。しかし私はそのような情報を最小限に抑えることをモスクワに約束した」。「ドイツ大使館内部で諜報活動を行う最も簡単な方法は討論、協議、研究、つまり重要度の低い情報を重要度の

高い情報と交換すること、言い換えればエビでタイを釣ることであった」⁽⁸⁴⁾。

ゾルゲは、ソ連に関する情報とドイツに関する情報の単なるギブ・アンド・テイクではなく、ソ連に有利になるような情報の不等価交換を行うことをウリツキーに承認させたのである。これが承認されたことによって、ゾルゲの行動は自由度を増し、東京ドイツ大使館へ入り込む有力な足がかりをつかむことになった。

要約しよう。1933年と1935年の時点において、赤軍第四本部の最高責任者ベルジンならびにウリツキーがゾルゲに命令した最大の任務とは、「日本がソ連に攻撃を仕掛けるかどうかである。それについての正確な情報を本部に送れ」ということに尽きる。満州事変以後の日本軍部は政権を掌握する意図を持っているように見える。「日本がどこを侵略するかを探れ。日本の軍事力についても正確な情報が必要だ」。満州事変以後の日本はどこを侵略対象にするか、という任務も加えられ、ゾルゲの情報活動の幅は拡大する。

そのうえ、ゾルゲは、東京ドイツ大使館に接近し、その中枢部に侵入して、低度のソ連情報を提供し、高度に重要なドイツ情報を入手する「行動の自由」を駆使していく。すなわち、ソ連赤軍第四本部の練達の情報将校がナチ黨員になりすまし、情報の不等価交換という巧妙なわざを使って、ドイツ大使館内に素知らぬ顔で入り込み、そこにしっかりと足場を築いていくのである⁽⁸⁵⁾。ゾルゲは、次のように断言する。

——「私自身の情報出所の、最も優れた、しかも唯一の情報出所はドイツ大使館でありました」⁽⁸⁶⁾。

23. ゾルゲは日本ドイツ大使館へ食い込む：「私の今次諜報活動のための基礎となった」

1933年1月、ゾルゲは中国での任務を終えてモスクワへ帰った。モスクワでは恋人エカテリーナ（愛称カーチャ）が待っていた。彼女は学生のころ、赤軍第四本部から彼のもとにロシア語教師として派遣された、演劇志望の魅力的な女性であっ

た。ゾルゲがモスクワに帰ったとき、彼女は工場労働者になっていた。モスクワ滞在中の1933年8月、二人は正式に結婚する。1935年、ゾルゲの再度のモスクワ帰還のとき、二人は束の間の家庭の幸福を楽しんだ（ゾルゲの妻エカテリーナは1943年8月、流刑の地シベリアで死んだ）。

1933年5月、ゾルゲは、ドイツの新聞記者に偽装するために、そして本物の旅券をとるためにベルリンへ向かった。さらにイデオロギー的に武装するために、ナチスの言葉遣いや立居振舞いに習熟する必要があった。1933年6月、彼はベルリンの警察に出頭し、モスクワ経由でなく中国から直接ドイツ入りしたように見せかけ、「著述家」という名目のもとに、正式なドイツ旅券を取得した⁽⁸⁷⁾、⁽⁸⁸⁾。

ゾルゲの偽装工作は、ドイツの新聞通信員になり、日本の有力人士への紹介状を入手し、そしてナチ黨員になりすますことであった。ナチへの入党はドイツでは果たせず、1934年10月、東京でナチ黨員の資格を得ることができた。「ナチ黨員」になりすますことは、日本のドイツ人社会では安全であり、賢明な自衛策となるばかりか、ドイツ大使館へアクセスする有力な手段になると思われたからである。これらはいずれも成功する。

具体的に言おう。まず『ベルゼン・ツァイトゥング』紙と『テェグリッヒ・ヒルントシャウ（日刊評論）』（1933年12月「自由主義的＝反ナチ」という理由で廃刊）の二つの新聞に日本から記事を送るという契約を取りつけた。『テェグリッヒ』の主筆はツェラー博士であったが、その友人に名古屋の砲兵連隊に駐在していたオイゲン・オット陸軍中佐がいた。ツェラー博士は、ゾルゲにこのオット中佐宛の紹介状を書いてくれた⁽⁸⁹⁾。

ゾルゲはまた、オランダの新聞『アルゲメン・ハンデルスブラット（一般商業新聞）』にわりをつけ、東京に滞在することになる彼が、この新聞に定期的に寄稿するという契約を結んだ。

次いで、ナチスの有力理論誌『地政学雑誌』（*Zeitschrift für Geopolitik*, 1924ff.）の編集者フォーヴィンケルと知合いになり、ゾルゲがこの

雑誌に寄稿する約束をしたことは大きな収穫であった。「私自身を合法化しドイツ政府筋やドイツ大使館方面から信任を得るにはすこぶる好都合であった」からである⁽⁹⁰⁾。ゾルゲは実際この雑誌に「東京における軍隊の叛乱」(1936.5)など、すぐれた論文を数編発表することになる。この雑誌を創刊したカール・ハウスホーファーは地政学の指導的理論家で、ナチ思想に強い影響を与えていた。その『地政学雑誌』は、ナチ上層部でよく読まれているものの一つであった。ゾルゲは大胆にも、ミュンヘンにハウスホーファー教授を訪ねた。当時64歳のハウスホーファーは、ワシントン勤務の日本大使、親独派の出淵勝次へ紹介状を書いてくれた⁽⁹¹⁾。

ゾルゲが極東問題専門の新聞人としてその名を世界に知らしめたのは、『フランクフルター・ツァイトゥング (フランクフルト新聞)』(*Frankfurter Zeitung*)の「特派員」あるいは「通信員」としてであった。この表向きの看板は、ゾルゲにとって重要な偽装であった。

先回りして述べておけば、ゾルゲ検挙後の1941年11月、ゾルゲの経歴についてドイツで正式な調査が始められた。1936年以来、ゾルゲの記事は「通信員発」という名義でこの有名な新聞に掲載されていた。新聞社側の調査結果によれば、ゾルゲとフランクフルト新聞社との間には通信員としての契約関係は結ばれていなかった。固定給は支払われず、個々の記事や電報に対して相応の謝礼が支払われていただけであった。ゾルゲのフランクフルト新聞社における身分を結論的にいえば、ゾルゲは、『フランクフルター・ツァイトゥング』紙の特派員でも通信員でもなく、法的・フォーマルな意味では「寄稿者」であり、両者は何ら契約関係を結んでいないというものであった⁽⁹²⁾。

1933年9月6日(あるいは8日)、ゾルゲは横浜に到着した。彼は本名で、本物のドイツ旅券で日本へ向かったが、不安はあった。正体を見破られるかもしれないという不安である。監視の目を

逃れるために日本には直行せず、7月フランスのシェルブールからニューヨーク行きの船に乗った。しかし、懐には有力な紹介状がある。外国新聞の「通信員」としての偽装もできている。それが何よりも頼みの綱であった。

モスクワを発つ前に、第四本部長ベルジンから、ゾルゲは二年間は日本に滞在せよと命じられた。日本はスパイに対して警戒心が強い、とくに外国人は嫌疑的になっているとの注意も受けた。ベルジンは、ゾルゲに二人の協力者(おそらくヴーケリッチと宮城与徳)を割り振ると約束した。ゾルゲはまた、地下の日本共産党とも左翼とも接触してはならないと固く命じられた。東京のロシア大使館からも遠ざかるようにとの指令も受けていた。

旅の途中のアメリカで、ゾルゲは、ハウスホーファーの紹介状を持ってワシントン駐在の日本大使、出淵勝次を訪れた。出淵大使から東京の外務省情報部長、天羽英二宛の紹介状を書いてもらった。またアメリカで「コミンテルン」(おそらく赤軍第四本部)の機関員に会い、彼との接触によって日本人の協力者(すなわち宮城与徳)がカリフォルニアから送り込まれると知らされた⁽⁹³⁾。

東京に着くと、ゾルゲはまず日本ドイツ大使館に出向き、大使館員に到着の挨拶を述べた。翌日、出淵大使の紹介状を持って、外務省情報部長、天羽英二と会談し、その場に居合わせた有力新聞の記者たちに紹介された。東京で次にやるべきことは、ナチへの入党であった。ベルリンで入党の手続きを済ませていたが果たせず、東京では有力な紹介者の保証が得られたので、1934年10月、ナチ東京支部への正式の入党を許された。ドイツ大使館には生粋のナチ党員が送り込まれていたが、ナチ党員のバッジをつけているだけで、彼らはゾルゲを信用してくれた。「ナチ党員」であることが、ドイツ大使館へ入り込むための有力な偽装であったわけである。

1933年秋、ゾルゲは、『テューグリッヒ』の主筆ツェラー博士の紹介状を持って、名古屋にオイゲ

ン・オット中佐を訪ねた。彼は、日独交換武官として名古屋の陸軍連隊に駐在していた。1934年4月、オットは大佐に昇進した。その後まもなくオットは大使館付上級武官となって東京に赴任し、彼の一家は渋谷駅近辺に住むことになった。1938年4月オットは少将に昇進し、駐日ドイツ大使に任命された。

オットは、日本軍の内情に通じ、ヒトラー主義の大島浩大佐、諜報責任者の土肥原賢二大佐とも知合いだった。ゾルゲは、大使館内やオットの自宅で、政治・外交・軍事について熱のこもった議論をしながら、親交を深めた。

二人を強く結びつける絆となったのは、何といっても第一次世界大戦での戦場体験であったと思われる。それは二人の青年時代の共有体験であった。ゾルゲは、オットとの親交を次のように述べている。

——「ツェラーの紹介状は私が後にドイツ大使となったオットと親交を結び、その信任を得るようになった最初の機縁となりました。「オットは立派な人格者で、その後1934年大佐に進級して、ドイツ大使館付陸軍武官となり、その夫人ヘルマおよび長男を伴って名古屋から上京し、渋谷駅付近に住み、少将に昇進しました。オットのみならず、その家族ともますます親交を結ぶようになりました。「かように親交を結ぶに至った事情の一つは、私がかつてドイツの一兵士として第一次欧州大戦に参加し負傷した経歴を持っており、オットもまた当時青年将校として、この大戦に参加した経歴を持っているからであると思います」⁽⁹⁴⁾。

1934年秋、オットは満州視察旅行の命を受け、ゾルゲに同行を求めた。この旅行によって、ゾルゲは満州国建設に関する日本の膨大な軍事情報を入手することができた。帰国後ゾルゲは、大部の報告書「満州国に関する論説」をまとめた。オットはこれを自分の協力者ゾルゲが執筆したものだと言い添えて、ドイツ陸軍参謀本部へ送った⁽⁹⁵⁾。オットと親交を結んで一年足らずの間に、ゾルゲは「ドイツ大使館のほとんど全部の関係者と知り

合いになり、これらの人々から信任を受けて大使館内では単なる一私人でありながら、極めて高い道徳的地位を獲得し、その中枢に入り込むことになった」のである⁽⁹⁶⁾。

こうしてゾルゲは東京のドイツ大使館に堂々と侵入する。それはとりもなおさず、ソ連赤軍第四本部がナチの国家機密情報センターを丸ごと掌握したことを意味している。ゾルゲが狙ったのは、ドイツ大使館へ巧みに食い込み、大使館員の完全な信用を得ることにあった。ゾルゲは、有力人士の紹介状をうまく使いこなし、自らもナチ党員に「変身」して（といっても「演技」して）、ドイツ大使館の中枢部に食い込んでいった。ドイツの国家機密情報を手中にするその熟達のわざは、「やがてその後の諜報活動の基礎を築き上げていく」のである^{(97)、(98)}。

1941年10月17日、ゾルゲとクラウゼンが逮捕された。最初の二、三日、特高警察はゾルゲから「ソ連」あるいは「コミンテルン」のために活動しているという自供を引き出すことはできなかった。ゾルゲは駐日ドイツ大使オット將軍のために働いているのだと主張して譲らなかつた。彼はドイツ大使オット將軍との面会を強く要求した。

一方、ゾルゲ検挙の報告を受けたオイゲン・オット大使と夫人のヘルマ・オットは、この事件が日本警察の陰謀だと激怒し、ただちに東条英機首相に強硬に抗議を申し入れた。その上で、ゾルゲとの面会を強く要求してきた。ドイツ大使から抗議を受けた東条首相は、岩村通世司法大臣にオットのゾルゲ面会は許可しなければならないと指示している。

ゾルゲ訊問の重責を担ったのは、東京地方検事局の検事、吉河光貞であった。吉河検事の取調は、「柔剛よろしきを得た老巧さ洒脱さ」で、訊問が進むうちにゾルゲを敬服させるほどの冴えを見せた（通訳担当の生駒佳年の証言）。事件全般の責任者は玉沢光三郎で、玉沢は尾崎の訊問を担当した。この二人の思想検事は、オット大使のゾルゲとの面会が許されるのは取調の危機である

と見て、その前に自白に追い込みたいと思っていた。面会はやめてもらいたかった。司法大臣の命により、検事たちはしぶしぶオット大使の面会を受け入れることになるのであるが、時間は5分と限り、検事も同席し、通訳も介在させて、この面会を無意味、無内容なものにしようと画策した。オット大使のゾルゲとの面会は、10月25日と決められた。その緊張の場面を、吉河光貞は次のように書いている。

——「大使が君に会いたがっている。君は彼に会いますか」。ゾルゲは最初、自分はオットとは会いたくないと答えました。

——「政治上の意見こそ違え、われわれは個人的には良き友人であった」。

——「私が君の立場ならば、私は会うだろう。日本人は、会って最後の訣別の言葉を告げるだろう」。

——「そうならば、私も会うこととしよう」。

——オット大使、マルヒター、スタマー、ほかゾルゲに会いにやって参りました。細かい会見の最後に、ゾルゲはオットに申しました。「これがあなたに会う最後の機会でしょう」。オットは仰天して、顔色を変えました。

——会見を終わり、オットは他の部屋へ移りました。オットは申しました。「本件に関しては、われわれはもう何も言うべきことはない」。オット大使は完全にリヒアルト・ゾルゲにだまされていたのです（非米活動委員会での吉河光貞の証言）⁽⁹⁹⁾。

別の資料は、「吉河の語ったままの言葉」を次のように叙述している。

——「ゾルゲは面会室にまっすぐ歩いていった。ゾルゲは口をきつと結んだ。オットはその顔をじっと見つめた。ゾルゲの体は震えていた。二人とも気詰まりのようだった。「体の調子はいかがね」。「けっこうです」。「食事は」。「おいしく食べています」。「これでお別れです、大使」。オットはその一言ですべてを悟った。オットはプロイセン軍人式の敬礼をして部屋を去った」^{(100)、(101)}。

大橋秀雄警部補は、そのときのゾルゲをそばで見ている。「ゾルゲは自分を信頼していたオット大使を欺いていたことに苦しんでいたにちがいない」。この最後の面会のあと、ゾルゲは激しく震えた。自殺を案じた吉河光貞検事は、拘置所長に命じて厳重な監視下に置いた⁽¹⁰²⁾。

吉河はいう。「オットが祖国へ帰れば、きっと殺されたろうと思います。彼は祖国へは帰らず、北京へ行き、中国に滞在しました」。オットは軽率にもゾルゲに助力し、親しい友人であったことが、ドイツ側の調査で明らかにされた。オットは、1942年ドイツ大使の地位を剥奪された。ドイツに帰ることはなく、北京に移り住んだ⁽¹⁰³⁾。

オット大使の受けた人生の傷は、一生、癒えるものではなかった。後年、オット大使の娘は、「父はそのときのショックから、ついに立ち直れませんでした」と、この事件の与えた深い悲しみを述懐している⁽¹⁰⁴⁾。ナチス＝ドイツの最高機密情報が、東京のドイツ大使館を媒介にして、ソ連軍事情報機関に筒抜けに流されていたということは、前代未聞の驚嘆すべき事件であり、世界的規模の情報事件であったといわなければならない。

XI メンバーの集結と崩壊：指令された任務と理想主義

24. 革命的ロマン主義：ヴーケリッチの場合

ゾルゲ・グループの第一の男をリヒアルト・ゾルゲというとなれば、1933年10月、グループ第二の男が横浜に着いた。無線技師のベルンハルトである。彼は第四本部の無線学校で学び、本部からの指令により、ゾルゲの部下として派遣されたものである。彼は「実業家」という偽装で横浜郊外に住んだ。ゾルゲは、ベルンハルトと帝国ホテルで会い、彼に無線通信機を組み立てるように命じた。そしてグループ第三の男、ユーゴスラヴィア人（クロアチア出身）のフランコ・ド・ヴーケリッチに連絡をつけるように言い渡した。

1934年2月頃から、このベルンハルトはヴーケ

リッチの借家で無線機の組立てを始めたが、うまく組み立てられず、モスクワとは簡単な通信しかできなかった。1935年ゾルゲがモスクワに帰ったとき、ベルンハルトよりも優秀な無線技師がほしいと要求した。そのためベルンハルトはグループから外され、モスクワに帰されてしまうことになる。

ベルンハルトのただ一つの働きは、1933年9月末、彼が仲介役となって連絡をとり、ゾルゲをヴァーケリッチの滞在する御茶ノ水の文化アパートで初めて会わせたことぐらいであった。

第三の男、ヴァーケリッチは、妻と息子を伴ってマルセイユから乗船し、すでに1933年2月11日、横浜に上陸していた。フランスを発つとき、パリの「機関員」から総額1,800円を受け取った。古い資料を見て、東京滞在費として1カ月300円もあれば楽にやっていると見当をつけ、これで6カ月はもつだろうと計算したはずであった。これは、ヴァーケリッチの日本に関する最初の調査であったが、初手から大きな誤算をしてしまった。この程度の金で、外国人家族が東京で暮らすのはとうてい無理であった。「それは見事に失敗し、苦い経験をなめることになった」。ヴァーケリッチは、妻と息子とともに、「機関員」の指示通り、御茶ノ水の文化アパートに住んだのであるが、身動きできないほどの貧乏に苦しめられ、病気にもかかってしまった。

ヴァーケリッチは、かつて勤めていたパリの電力会社（コンパニー・ジェネラル・デレクトリシテ）の社長から、日本人宛の紹介状を数通入手した程度で、ヴァーケリッチには十分な偽装を準備する時間的余裕はなかった。幸い、フランスの絵入り週刊誌『ヴュー』の通信員になる契約を取り結ぶことができた。また、ユーゴスラヴィアの日刊紙『ポリティカ』の通信員にも任用してもらった。妻のエディットは、日本で流行していたデンマーク体操の教師の資格を持っていた。これらすべてが一緒に合体して、「きわめて貧弱なカムフラージュ」となったのである⁽¹⁰⁵⁾。

ヴァーケリッチは、1933年11月、御茶ノ水の文化アパートを引き払い、牛込左内町の借家に住むようになってから、フランス語の自宅教授を始めた。また、1935年5月にはフランスのアヴァス通信社東京通信員補助として就職し、相応の収入を得ていた。東京に着くとすぐ、妻のエディットは文化学院、多摩川学園で体操教師として働いた。

ヴァーケリッチは、ザグレブ大学建築学科に学んでいたころ（1924-26年頃）、「マルクス主義学生クラブ」に所属していたことがある。おそらく母親に強く反対され、自分も熱が冷めて学生クラブを脱会した。その後、これらの団体やマルクス主義から離れるためにパリに遊学し、パリ大学法学部を卒業して（1927年）、パリの電力会社に勤めていたが、徴兵のためいったん祖国のユーゴに帰った（1931年）。除隊後、もとの電力会社に復職しようとしたが、それができずに失業し、パリの街で就職口を探していた。1932年2月、失業中のヴァーケリッチは、パリのカフェでザグレブ大学時代の二人の友人に偶然にも出くわしたのである。この友人たちから、「コミンテルン」（実は赤軍第四本部）の機関員と思われる女性、オルガ（オリガ）を紹介され、日本行きを勧められた。

ゾルゲ・グループに加わるようになった動機を、ヴァーケリッチは次のように述べている。ヴァーケリッチは既成の共産党から離れてはいたが、コミンテルンに夢を託し、世界革命への希望、革命的ロマン主義をいだいていた人である。来るべき時代の人々のために革命思想を維持すること、これが彼の内在的な動機であったろう。

——「たといわれわれの時代において革命を実現することができないまでも、少なくとも社会主義における貴重な試練を経た一つの国（＝つまりソ連）が存続すれば、来るべき時代の人のために、社会主義革命の思想を維持することができるのであります。これこそかつて、1924年、われわれが世界革命の一環としてユーゴスラヴィアおよびバルカン諸国における共産主義革命の招来を祈念していた当時における運動参加の動機に代わ

るべきものだと考えました」。

——「当時の私にとってはむしろ、社会主義建設の成功と平和の維持こそが最も発刺たる希望であり、また私がこの組織に加入した真の動機でもあったのであります」。

——「われわれの組織の目的は、コミンテルンの主要任務の一つたる外国の侵略に対するソヴィエト連邦の防衛であり、そのため、この目的に役立つとともにまた共産主義運動の一般的活動に役立つ情報を収集することです」。

——「私が加入しておりますゾルゲを長とする諜報団体はコミンテルン本部に直属する特別な任務をもった秘密組織であります」⁽¹⁰⁶⁾。

25. 死を覚悟した理想主義：宮城与徳の場合

グループ第四の男は宮城与徳である。宮城はカリフォルニアから乗船し、1933年10月末、横浜に到着した。東京市内に住み、絵画制作に携わっていた。宮城は画家として特異な才能に恵まれていた。画家宮城には偽装の必要はなかった。日本に着いてから、彼には友人がいないわけではなかった。金がないわけではなかった。1939年まで宮城は絵を売って十分な収入を得ていたのである。

宮城は1903年沖縄の農家に生まれた。沖縄県師範学校を肺結核のため中途退学し、その後、1925年カリフォルニアのサンディエゴ美術学校を最優秀で卒業した。同年ロサンゼルス中央駅近くで日本人仲間と料理屋を経営した。その奥で、彼らは哲学、芸術、社会問題を討論する黎明会という小さなサークルをつくった。宮城自身はゴリキーなどロシア作家のものを耽読して無政府主義に傾いていた。宮城は、1932年夏から33年9月に日本に帰国するまで、ロサンゼルス市内の北林芳三郎・トモの家に下宿した。この頃から宮城は、絵を売って生活できるほどの画家になっていた。

この北林トモという下宿のおかみは、やがて数年後、注視的になる。この北林の自供の線から、官憲は、ゾルゲ=尾崎グループの存在を導き

出す糸口をつかむことになるからである。この点は後述する。

宮城がアメリカ共産党に入党するのは1931年のことで、「コミンテルン」機関員、「矢野勉」の説得によるものであった。ゾルゲの日本における将来の仕事のために、信頼できる活動家として宮城を選んだのは「矢野」である。「矢野」がすべてを取り仕切って、宮城をジョーという名前で「コミンテルン本部」(=実は赤軍第四本部)に登録したのである。この「矢野」と称する人物も、あの謎に包まれた「鬼頭銀一」と同様に、その正体は不明であるが、日本だけでなくアメリカの地下活動においても相当に重要な人物であったと思われる。

1932年の暮れ、その「矢野」は、宮城に「君は東京に帰ってくれ、君の仕事は東京へ行けば分かる」と東京行きを勧めた。宮城は日本へ帰ることを承諾したものの、すぐには動かなかった。「絵を描きにいたり、ストライキの応援に行ったり」、ぐずぐずしてロサンゼルスを離れなかった。彼はロスで友人にも恵まれ、金銭的にも不自由しない居心地のいい生活をしてきたからである。1933年9月頃、「矢野」と「ロイ」という男が宮城のところに現れ、「至急日本へ帰れ」と出発の催促に来た。そのとき宮城は、「長くても三カ月ぐらいで帰ってこい」と命じられた。宮城自身も日本滞在は短期間のつもりで、ロサンゼルスに「家財を置いたまま」身軽に旅立った⁽¹⁰⁷⁾。

1933年10月初旬、宮城は、カリフォルニアの港から乗船し、10月末に横浜に到着した。私財をロサンゼルスに置いたまま、身軽に旅立ったのであるが、宮城は二度とアメリカの土を踏むことはなかった。こうした勧誘も催促も、実はソ連軍事情報機関からの指令にもとづいていたのである。

宮城は、このグループに参加するにいたった決意を次のように述べている。

——「私が諜報組織に参加することを決心するまでには多少の考慮を要しました。この仕事がアメ

リカにおいて課される場合はまた別でありましょうが。日本人が日本においてこれを行う場合には、どういう立場になるか。とくに私のように民族の発展を重点に置いて問題を立てる者には矛盾はないかということであります。しかしこの仕事は世界史的観点からすれば重要な使命を持つものであること、またその主要任務が日ソ戦を回避する点にあるので、私は一兵卒としてこの組織に参加することに決心したものであります。当初自分が諜報活動に対する訓練がないため適当な人物を発見すれば代わりたいたい意向を持っておりましたが、これが国法に触れることは勿論、戦時においては死刑に処せられること等を知悉して参加したものであります⁽¹⁰⁸⁾。

宮城がゾルゲとはじめて会ったのは1933年11月下旬のことで、場所は上野公園の美術館であった。ゾルゲからは諜報活動をやれとはいわれなかったが、ゾルゲが宮城から聞き出そうとすることが日本の政治・軍事の情報であり、「コミンテルン」の男でありながら組織をつくらうとしない。こうした点から宮城は、やがて自分の任務が「コミンテルン」の諜報活動であることに気づいたのである。1934年1月になって、宮城はゾルゲから、アメリカには帰らずに日本にこのままいてもらいたい、自分のもて仕事をしてほしいと頼まれた⁽¹⁰⁹⁾。

宮城はゾルゲの申し出にすぐに同意したわけではない。宮城は単なる諜報活動はしたくなかったのである。日本人が日本において諜報活動を行えば、「自分はどういう立場になるか」、その覚悟を決める必要があった。宮城を諜報活動への参加を最終的に決意させたのは、その目的が日本とソ連との戦争を回避させることだ、というゾルゲの説得に動かされたからである。理想主義者の宮城は、この言葉に動かされた。心は動いたが、宮城はまだ消極的であった。自分は諜報活動に対する訓練がない。もっと適切な人物が発見できれば、その人と代わりたいたい。だがこの活動を喜んで引き受けてくれる者はいるはずがない。それならば、

これは自分でやるしかないかと決心する。その決心とは、「国法に触れ、死刑に処せられる」ことを知悉した上での決心であった。日本人として宮城は、死刑を覚悟した上で理想主義を求めた。これがゾルゲ・グループに入った宮城の動機である。

24. ソ連軍事情報機関の計画的配置

その宮城がゾルゲの使いで、グループ第五番目の男、尾崎秀実に接近した。ゾルゲは、日本人を通じて尾崎に近づくのが最善だと考えた。これは、日本人宮城でなければならなかった。また実際、宮城しかいなかった。1934年5月、ゾルゲと宮城との「仕事」上の交際が始まって半年後、ゾルゲは、宮城を大阪朝日新聞社の尾崎秀実に近づくための使者として送り出したのである。

赤軍第四本部のベルジン部長は、日本におけるゾルゲ・メンバーの布陣を着々と固めていった。その布陣は、ソ連軍事情報機関の計画的配置といえるものであった。ヴァーケリッチは1933年2月にはフランスから東京に着いていた。ゾルゲは同年9月、ドイツからアメリカ経由で日本に着いていた。無線技師ベルンハルトもゾルゲの後を追うように同年10月初旬には東京に着いている。同年9月、「矢野」と「ロイ」は、宮城と徳を急ぎ立てて、日本へ出発させている。この二人は、ソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部のベルジン部長から受け取った命令を筋書きに従って、宮城に日本行きを強要したにすぎない。宮城が横浜に到着したのは、1933年10月下旬のことであった。

その宮城を介して、1934年6月のある日の昼さがり、ゾルゲは尾崎秀実と奈良公園で会い、その場で尾崎の協力が得られたのであった。

1935年、ゾルゲはモスクワへの旅に出る。ゾルゲは、グループ第二番目の男、無線技師のベルンハルトは技術的に不器用な上に臆病で、無線通信の発覚を恐がるので、今回の諜報活動には向かないと見切りをつけ、モスクワに帰すことに決めていた。ゾルゲの旅の目的の一つは、優秀な無線技師を差し向けてもらいたいと第四本部に

要求することであった。これに呼応するように、ドイツ人無線技師、マックス・クラウゼンが、第四本部からゾルゲ・グループに参加せよと命令されていた。第六番目の男、マックス・クラウゼンは、船員を装い大西洋を渡ってまずニューヨークに着き、サンフランシスコから竜田丸に乗って、1935年11月末に横浜に到着した⁽¹¹⁰⁾。

これでゾルゲ・グループのメンバーは揃った。メンバーは東京という一点に集結しつつあった。日本におけるゾルゲ・グループの諜報＝情報活動は、いよいよ本格的に始まろうとしていた。

27. 「実業家」クラウゼンの変心：メンバー内部からの組織崩壊

ゾルゲ・グループのうち、無線技師マックス・クラウゼンだけが十分な「偽装」をつくるのに困難があった。彼は「偽装」のために職業をつくる必要があった。彼は、第四本部から送られてきた4千ドルを資金にし、それに共同出資者の協力を得て、青写真複製機の製作・販売会社、M. クラウゼン商会を興し、奉天にも支店を出した。大会社や軍部や大学を顧客とし、偽装の「ビジネス」は経営的に成功する。事業収益を上げる企業経営が、命令されて遂行する諜報活動の任務よりも面白くなってきた。ゾルゲ・グループの組織的な綻びは、ここに胚胎していた。

しかし、マックス・クラウゼンの無線技術は優れていた。クラウゼンの手作りの無線機も無線操作も、見事な技術に裏づけられていた。クラウゼンの無線通信は通達距離4千キロに及び、ウラジオストックあるいはハバロフスクを中継点にして、モスクワへ送られた。

クラウゼンはまた、帝国劇場や宝塚劇場の暗闇で情報と金銭の受け渡しの任務も命じられた。上海のツァイトガイスト書店に出かけては、マイクロフィルムに撮られた大量の情報をソ連機関員＝伝書使(courier)に渡す役割も担った。この書店はソ連機関員が落ち合う連絡地点となっていた。

情報の暗号化(encoding)と暗号の解読(decoding)

は、グループのリーダーが重責を負うべき極秘事項であるが、1938年、ゾルゲは、こともあろうに、酒酔い運転でアメリカ大使館の塀に激突するというオートバイ事故を起こし、生死の間をさまようほどの重傷を負った⁽¹¹¹⁾。これを機に、ゾルゲだけが暗号組立てと解読を独占してやるのは危険だと思い、それ以後、情報の暗号化に関する仕事をクラウゼンにもやらせるようにした。

ゾルゲ・グループへの第四本部＝軍事情報機関からの資金は、上海・香港のアメリカ系の銀行に送金され、そこから日本の銀行口座に振り込まれた。英米とドイツが交戦状態に入ってアメリカ系の銀行が使えなくなると、1940年以後は東京のソ連大使館員(機関員名セルゲ)が秘密の場所で資金を手渡した⁽¹¹²⁾。クラウゼンはこの会計も担当した。

1940-41年の会計簿を見ると、ソ連軍事情報機関から給料(固定給)をもらっていたのは、クラウゼン、ヴァーケリッチ、ヴァーケリッチの前妻エディット、ゾルゲの4人である⁽¹¹³⁾。会計担当のクラウゼンによれば、尾崎秀実と宮城与徳はコミュニストであって、「自己の主義」のために働いているので、この種の金は受け取っていない。金銭のためでなく、その抱懐する「主義・信念」にもとづいて彼らは働いている。そのうえ、彼らは正業をもち、生活に心配のない人たちであるため、ソ連軍事情報機関から給料は与えられていなかった。尾崎と宮城は、いわば諜報活動のボランティアであった。

ゾルゲ・グループの費用は一か月約3千円かかっている。クラウゼンの任務は、本務の無線通信のほか、上海出張など機関員との連絡や、ゾルゲのオートバイ事故以後は、暗号の情報化と暗号の解読、そして会計事務にまで及んだ。

1940年秋頃、クラウゼンは、第四本部から、潤沢な利益を上げている彼の青写真複製機会社からゾルゲ・グループに資金を回せと命じられた。「当方からの送金は月2千円程度にとどめ、不足分はクラウゼンの営業利益から支出せよ」という

指令である。事業利益に大きな魅力を感じていた「実業家」クラウゼンは、できることなら「モスコウ」から離れたと考え、この指令には従えないとゾルゲに答えた。

クラウゼンにとって、この上級機関からの命令は、彼のソ連国家への忠誠心を動揺させ、 komunizm 思想から彼を離れさせ、その結果、彼は、諜報活動の任務につくことが精神的にひどく苦痛になった。精神的な悩みを紛らすために、酒におぼれるようになった。このときから、クラウゼンは会計の記帳も怠るようになった。そればかりでない。諜報 = 情報活動の死命を制する、ゾルゲの書いた通信原稿を破棄したり、真面目に送らなくなった。送ってもその一部でしかなかったり、貴重な報告や原稿の送信を遅らせることにもなってしまった⁽¹¹⁴⁾。

クラウゼンが逮捕され、彼の家が家宅捜索されたとき、警察は彼の家から決定的な証拠を多数押収することができた。そこから、ゾルゲ = 尾崎グループの諜報 = 情報活動の「内容」が暴かれていく⁽¹¹⁵⁾。第四本部から派遣された無線技師、実務主義のクラウゼンの残した文書や通信機械の動かぬ証拠から、ゾルゲ・グループの全容解明が行われたことを、ここで指摘しておくべきであろう。

28. ゾルゲの人的管理と情報管理の独占: ヨーロッパ人メンバーと日本人メンバーとは会話を交わしたことがない

クラウゼンは無線技師のほかに、ゾルゲの役割を代行するようなこともやっていたが、グループ・メンバーの役割は、大まかにいえば、ゾルゲがドイツ大使館を情報源にして、重要なドイツ情報を入手する。尾崎が朝日新聞社、満鉄調査部、とくに近衛側近（西園寺公一、犬養健等を含む）を情報源にして、日本の高度な政治機密情報を仕入れる。宮城が友人・知人網（末端のインフォーマントが北林トモ）を通じて、主として軍事情報や経済情報を収集する。ヴァーケリッチが資料・報告書の写真撮影をする、そしてヴァーケリッチの自

宅二階を無線発信場所として提供するというものであった⁽¹¹⁶⁾。こうして集められた情報はゾルゲただ一人に集約された。

機密情報の漏れを防ぐために、ゾルゲだけがグループのメンバーと直接接触し、連絡していた。メンバー相互間のヨコの連絡は、偶然に出会った場合は別として、原則的には許されなかった。ゾルゲは、人的管理の独占と情報管理の独占に細心の注意を払っていたのである⁽¹¹⁷⁾。

実際には、ゾルゲとクラウゼンは、同じドイツ人同士として会うのは自然なことであった。ゾルゲはヴァーケリッチと会うのを秘密していたが、通信社通信員と新聞通信員とはいわば同業者同士であって、意見交換や情報交換のために二人が会うのはそれほど不自然ではない。ゾルゲはヴァーケリッチの家でしばしば彼と会っている。

ゾルゲ、クラウゼン、ヴァーケリッチのヨーロッパ人のメンバー三人は折に触れて会っていたのであるが⁽¹¹⁸⁾、驚くべきことに、検挙される前日までクラウゼンは、尾崎秀実の正体を知らなかった⁽¹¹⁹⁾。

クラウゼンは、以前、尾崎をゾルゲの家でちらっと見たことがあるが、高慢なインテリ、「日本人の肥った人」という印象を持ったにすぎない。私的会話は交わしたことがない。通信文に出てくるインヴェストまたはオットー（尾崎の第四本部への登録名）とは尾崎のことだったのかと、検挙寸前にはじめて同定できた。検挙後クラウゼンは「手記」の中で尾崎について次のようにいっている。「尾崎は高い地位にあったので自分というものを誇っていたように思われた」、「私がゾルゲの家で彼に会っても彼は私と話しさえしなかった」⁽¹²⁰⁾。

クラウゼンはまた、宮城与徳が検挙されてからはじめて、その本名を知った。それまではジョーまたはジョウという登録名しか知らなかった。

尾崎のほうから見ても、尾崎はクラウゼンの名前を知らず、宮城にならって「デブ公」と呼んでいた。ヴァーケリッチは、おそらく一度も尾崎に会ったことはなく、名前も知らなかった。ヴァーケ

リッチは、宮城のことも全く知らなかった⁽¹²¹⁾。

要するに、ヨーロッパ人メンバーと日本人メンバーとの間にコミュニケーションはない。両者の間はいわば他人の関係であった。尾崎、宮城が直接会う相手は、もっぱらゾルゲだけであった。

ヨーロッパ人メンバーと日本人メンバーが会うのはきわめて危険な状況にあった。ゾルゲと尾崎とは、当初は月一度ずつ（その後は週一回のわりで）高級料理店で会っていたが、そのたびに店を替えている。外人と日本人が会食するのは目立ちやすく、店と馴染みになるのはさらに危険であった。監視の目が厳しくなると、尾崎がゾルゲの家に出かけるようになった。二人の間の情報伝達はすべて口頭（oral）で行われた。画家宮城は、尾崎の娘、楊子に絵を教えるという「偽装」をつくって、尾崎の自宅に向いて尾崎と会っていた⁽¹²²⁾。

ゾルゲはドイツ大使館を最大で最良の情報源としていた。ゾルゲがドイツ大使館で入手した資料は、大使館内に与えられたゾルゲの部屋に持ち込んで（ゾルゲはドイツ大使オットの私的コンサルタントで、館内に部屋を与えられていた）、人目を避けて、ゾルゲ自身が「ライカかロボット」で極秘資料を写真に撮った。家に持ち帰ったり、借り出した資料は、ヴェケリッチが「コンタックス」で写真に撮り、それをソ連軍事情報機関の伝書使に渡す方法を採用していた。

尾崎は、近衛側近（通信文ではcircles nearest to Konoe）の極秘情報をゾルゲに口頭で報告した。二人で討論し結論を出して、それをゾルゲが欧文原稿にまとめて、クラウゼンに打電させる方法をとった。尾崎が入手した文書は宮城が英文に訳し、その英訳を宮城がゾルゲに渡していた。

以上に述べたゾルゲの諜報活動のコミュニケーション技術は見事であった。ゾルゲ・グループのメンバーが偶発的なきっかけから逮捕され、クラウゼンや宮城、ゾルゲの家から嫌疑を招くような材料が発見されるまで、この技術に大きな支障は生じなかった⁽¹²³⁾。

29. 諜報 = 情報活動の劇的な成果：「対ソ開戦はない」、「対米戦争が始まる」

こうした諜報活動の中から、ゾルゲ・グループが劇的な成果を上げたいくつかの事例を取り上げておきたい。ソ連軍事情報機関の最大の関心は、ソ連防衛の観点からすれば、ヨーロッパにおいてはドイツのソ連侵攻についての情報であり、極東においては日本のソ連侵攻＝シベリア侵略についての情報であった。ソ連国家は、ドイツと日本が連携して両サイドからソ連に侵攻するのを最も恐れた。両サイドから同時に侵攻されれば、ソ連国家は崩壊の危機に直面するにちがいない。そういう危機感は深刻であった。

ゾルゲ・グループの諜報活動には、現代史の曲がり角を正確にキャッチした、歴史に残る「傑出」した事前情報がある。

その中でとくに注目すべきものは、第一に、1941年6月の独ソ戦の事前情報である。それは、ヒトラー＝ドイツが宣戦布告なしにソ連攻撃を開始すると知らせた事前情報であるが、この情報は、ドイツ参謀将校シオルがベルリンから東京のドイツ大使館に持ち込んだ極秘情報であった。1941年5月、ゾルゲが酒の席で、シオル本人から聴き出した。

——「シオルは、攻撃は6月20日に始まる。二、三日の遅延はあり得る（＝実際は6月22日に独ソ戦開始。ドイツ軍が突如ソ連に進撃）。準備は完了している。ドイツ師団は東部国境に集結された。最後通牒は行われまいであろう。赤軍は崩壊し、ソ連政権は二カ月と持たないであろう」⁽¹²⁴⁾。

このシオルからのゾルゲの機密聴取は、諜報活動の最高傑作の一つというべきものであろう。この貴重な情報はソ連軍事情報機関＝赤軍第四本部に発信された。数日後の5月15日には、攻撃開始日を正確に6月22日であると打電している。だが、スターリン政権はこの正確な情報に信頼をおかなかった。そのため対応が遅れ、緒戦は苦戦を強いられた。ゾルゲはその対応に激怒した。ゾルゲは、「なぜスターリンは、それに対処する行動をとら

なかったのか」と怒りを爆発させた。ゾルゲはこのときを契機に、スターリンに不信の念をいだいたはずである。

第二は、独ソ戦に乗じて、日本はソ連に侵攻するのかもしれないのか、この重大問題について日本政府の決定を伝えた情報である。ソ連当局は、6月27日、モスクワの赤軍第四本部からゾルゲ宛てに、「独ソ戦について日本政府はいかなる決定を行ったか」を問うてきた。この質問に対するゾルゲ・グループの回答は、諜報活動の歴史において傑出したものの一つである。1941年7月1日、御前会議（通信文ではImperial Conference、打電したクラウゼンは「非常に重大な極密の会議」と直感）が開かれ、そこで重大な政策決定がなされた。尾崎秀実の知りえた限り、日本はドイツ、ソ連双方に対して中立を維持すると決定したのである。日本政府はドイツ大使オットからたびたび「対ソ開戦」を要請されていたが、これに応じようとはしなかった。ゾルゲは、オット大使の主張よりも、尾崎の見解が正しいと判断して、尾崎情報をモスクワに打電した。

——「日本はソ連を攻撃しない。北方の位置は守る。南方のインドシナで積極的な作戦を開始する」⁽¹²⁵⁾。

この尾崎＝ゾルゲ情報によって、スターリン政権はソ連極東軍を西に移動させ、西に移動した増援軍によって、モスクワをドイツ侵攻軍から守ることができたのである。

第三は、日本が北進してソ連を攻撃するか、南進してアメリカとの戦いに入るかの重大決定についての事前情報である。1941年8月20日から23日、軍首脳の会議はこの問題に一定の結論を出した。このときの第二次近衛内閣の最大の課題は、アメリカ、イギリス、オランダが対日経済封鎖を強行しているので日本国家は苦境に立たされている、この当面する危機を打開するために、日米関係に何らかの解決策を見出すことであった。

日米交渉においてアメリカ側が日本に要求してきたものは、日独伊三国同盟の破棄、中国からの撤兵、南方進出の停止であった。これに対して日

本側がアメリカに提示した条件は、経済関係の回復（石油・鉄鉱石の対日輸出再開と東南アジアからの資源獲得）のためにアメリカの支援を得たい、そして、中国問題解決のためにアメリカに斡旋してもらいたいという要求であった。この交渉は先行きの見通しが立たず、難しい局面を迎えていた。

日米交渉が決裂したとき、政府ならびに海軍は次の結論に達していた。すなわち、ソ連との戦争を行うことは、日本経済に過大な負担をかける。資源のない北方を占領しても、それは日本経済を助けない。これに対して南方の資源は、はるかに重要である。尾崎が近衛側近から、この会議の結論（西園寺公一の「やらぬことに決めたま」の一言）を聞き出した⁽¹²⁶⁾。ゾルゲはこの尾崎情報を聞いて興奮し、ただちに第四本部に打電した。

——「インヴェスト（＝尾崎の第四本部の登録名）は近衛側近者より次のことを聞き知った。軍首脳部は関東軍代表将校とソ連と戦うべきか否か論議した。本年中は戦争を開始しないこと、繰り返していうが本年は対ソ戦を開始しないことを決定した」⁽¹²⁷⁾。

日本の北進・南進問題に関連して、宮城は、同41年9月、きわめて興味ある重要な報告をもってきた。この情報もモスクワに打電された。

——「近衛師団第三、第四、第五、第六連隊は東京出発の準備を整えている。彼らは夏服を着ている。他の近衛連隊は、仏印に駐屯している。彼らも南方に派遣される」⁽¹²⁸⁾。

現地調査をするために満州に派遣された尾崎秀実の「対ソ開戦せず」との情報は、ゾルゲ・グループの調査を完成させるものであったといっている。

——「インヴェスト（＝尾崎）が満鉄より知り得たことによると、今年中には対ソ開戦せずとの決定により少数の軍隊は日本に帰還した」⁽¹²⁹⁾。

尾崎は、軍隊の日本帰還について、付け加えて次のようにいう。「（少数の軍隊の日本帰還を）満鉄は対ソ攻撃開始は当分中止された明確な証拠と

見ている」。

第四に特筆すべきものは、日米開戦の事前情報である。この情報は尾崎が近衛側近から知りえた情報である。日米交渉において、アメリカから満足すべき回答がない場合は、1941年10月以降、日本は対米戦争に踏み切るという事前情報であった。——「近衛の側近者よりオットー(=尾崎)が知りえたところでは、右(近衛=ルーズベルト会談の用意があるかどうかの返答)の期限は、10月末をもって切れるものである。またその期限までに日米交渉につき何らの成果が得られないときには、海軍はただちに南方に対して行動を起こすであろう。海軍筋からオットー(=尾崎)が知りえたことは、制限された事実(=ぎりぎり残されていること)は非常に短時間であり、もし10月の第一週中に米国から満足すべき回答がこない時は海軍は行動を起こすとのことである」⁽¹³⁰⁾。

1941年10月末か11月には対米戦争が始まるであろう。日本はロシアと戦う必要はない。日本政府は南進して対米戦争に突入することを決定した。いまやアメリカとの開戦と南進の問題が北方問題よりはるかに重要となった。ゾルゲと尾崎は10月4日、長い時間をかけて討論し、日ソ戦争は起こらない、日本は数週間のうちにアメリカと戦端を開くとの結論に達した。ゾルゲは、第四本部から命令された使命、すなわち、「ソ連防衛」のために諜報=情報活動をせよという任務が、これらの情報活動で終わったと感じたのであった。

30. 帰るべき祖国がない: ナショナル・アイデンティティの劇的喪失

ゾルゲは、第四本部から命令された日本での任務が終わったと感じたのであるが、はたしてドイツ国籍のゾルゲに帰るべき国はあったのだろうか。ゾルゲは偽装してナチ黨員になった。ナチ黨員であることを利用してドイツ大使館に侵入し、機密情報を取得した。帰るべき国はヒトラー=ドイツなのか。ヒトラー=ドイツは偽装、反共産主義、利敵行為を理由に、彼に重罪を科すであろう。

ゾルゲはソ連軍事情報機関=赤軍第四本部に属していた。彼はソ連軍事情報機関の情報将校であった。いまゾルゲは第四本部から命じられた任務を終えたばかりである。多年にわたる多額の資金に支えられて行った使命を果たし終えたところである。彼の上級機関のあるスターリン=ソヴィエトは、彼の帰るべき祖国なのか。

ゾルゲは不等価交換とはいえ、ソ連情報をドイツ大使館に流している。日本の官憲に逮捕されたゾルゲは、その諜報活動の全容を語り出した。ゾルゲ・グループの存在は、ソ連が情報スパイ網を世界に張り巡らしていることを白日の下に晒した。ゾルゲの検挙はそれだけでソ連国家にとって迷惑千万なことであった。スターリン=ソヴィエトは、情報スパイの存在を頑として認めないであろう。

スターリン=ソヴィエトには「粛清」の嵐がさまざまに吹き荒れている。ゾルゲは、自分の上長が二人とも粛清で消されたことを知っていた。どちらの国に帰ったとしても、彼の生命は危険にさらされる。ゾルゲは、ヒトラー=ドイツとスターリン=ソヴィエトに引き裂かれて、帰るべき祖国を失った。クラウゼンは、ゾルゲの最後の電文原稿、すなわち、任務を終えたから帰るべきところを指令してほしいというゾルゲの要請をモスクワに送らなかったが、たといモスクワの上級機関に彼の電信文が届いたとしても、上級からの返答は来なかったであろう。モスクワはゾルゲに対して無関心を装い、ゾルゲを見捨てたのである。練達の諜報=情報将校ゾルゲは、その忠誠心を捧げるべき祖国を失った。彼を迎え入れる国は、もはやどこにもなかった。

検挙直前の状況をクラウゼン、ヴァーケリッチ、ゾルゲはそれぞれ次のように語っている。

1941年10月15日、クラウゼンがゾルゲ宅に行くと、ゾルゲがいうには、10月13日に「ジョー」(=宮城)がここに来るはずになっていたが、来なかった。時間を守る男が来ないところをみると、「捕まった」のではないかと不安顔であった。

すでに宮城与徳は10月10日に検挙されていたのである。10月15日にはゾルゲは「オットー」(=尾崎)と虎ノ門の満鉄ビルのレストラン「アジア」で会うことになっていたが、尾崎も来なかった。ゾルゲは、尾崎を電話で呼び出そうとしたが、番号が分からなかった⁽¹³¹⁾。尾崎は、ゾルゲと会う約束をしていたその日の朝、つまり10月15日の朝、検挙されていたのである。

10月15日の夜、クラウゼンは、ゾルゲからたくさん電文原稿を渡され、送信せよと命じられた。もはや仕事をする意欲を失っていたクラウゼンは、「ひとまずそちらで預かっておいてください」といって、その電文原稿をゾルゲに返した。その電文原稿の中に、「われわれが今後日本にとどまっても意味はない。母なるソ連に帰るべきか、はたまたドイツに入って新しい仕事を始めたらいかがだろうか」と、ヨーロッパに帰りたい旨の希望を述べ、帰るべきところを指令してほしいという懇請の文章が入っていた⁽¹³²⁾。

ヴァーケリッチによると、10月15日は次のような状況であった。——10月15日の夜、ヴァーケリッチがゾルゲ宅にいくと、クラウゼンがゾルゲに「どうしてもドイツへ帰りたい」と話していた。ヴァーケリッチが「帰る途などはない」と口を挟むと、クラウゼンは「本部がドイツへ行けといえは抜け道はある。船員になって行くのだ」といい、ゾルゲは「日本にはもう仕事がない」と言い切った⁽¹³³⁾。

10月17日の朝、クラウゼンはゾルゲ宅に行った。二人連れだって、修理済みの自動車を新橋まで受け取りに行った。二人は新橋で日本食を食べた。そのあとクラウゼンは不安で落ち着かず、銀座に出て買い物をして映画を見た。再び新橋に戻ってきて酒を飲んだ。その晩はゾルゲ宅に呼ばれていたの、日本酒を一升もって行くと、ヴァーケリッチが来ていた。宮城、尾崎との連絡が切れたので、心配だと話し合った。ゾルゲは近衛内閣が総辞職したという話しもした(=1941年10月16日第三次近衛内閣総辞職、10月18日東条英機

内閣成立)。クラウゼンは言い知れぬ不安に襲われて、同席できなくなった。家に帰る途中、知り合いの青山特高刑事に声をかけられた。検挙の時期が近いと直感して、ますます不安になり、市電に乗って家へ帰った。家では書類を全部焼いてしまおうか、無電機械を庭の地中に埋めようかと迷ったが、結局何もできなかった。その夜は眠れなかった。翌10月18日の早朝、青山特高たちがどよどよとやって来た。クラウゼンは覚悟を決めた。妻には自動車事故のことで警察へ行くといい、外へ出た。待っていた自動車に乗せられて三田警察署に連行された⁽¹³⁴⁾。

ヴァーケリッチによると10月17日は次のような状況であった。——10月17日午後7時頃、ヴァーケリッチはゾルゲ宅を訪ねた。これが最後の訪問となった。クラウゼンも来ていて、ゾルゲとクラウゼンの二人は一階の部屋で日本酒を飲んでた。クラウゼンは「もう飲めない、駄目だ」といって帰ってしまった。後に残った二人はコップ酒を飲んだ。ゾルゲがヴァーケリッチに「きみはジョー(=宮城)の家を知らないか」という。ヴァーケリッチは「ジョー」の住まいを知らないどころか、その本名さえ知らない。ゾルゲは「それではオットー(=尾崎)は知ってるか」と聞く。知らないと答えると、「オーゼキ(=尾崎)という有名な新聞記者だが、知ってるはずだ」という。「満鉄に電話すれば分かると思うが、聞いてくれないか」と頼むようにいう。本名も知らず、何係かも知らないで電話するのは危ないと答えると、「『コンテンポラリー・ジャパン』で記事を書いている。発行所に電話して、オーゼキの住所を調べてもらいたい」という。調べてみましょうといっで辞去した。その翌日の10月18日の早朝、ヴァーケリッチは検挙されたのである⁽¹³⁵⁾。

ゾルゲは、検挙された10月18日の前夜、自分は日本において8年もの長きわたって活動してきた、身も心も疲れはてたからヨーロッパに帰らせてほしいと、第四本部に嘆願する電信文を書いたのであるが、それは発信されず、モスクワには届

かなかった。こうした嘆願は、これまでも一再ならず書いてきたものであった⁽¹³⁶⁾。しかし、仕事をする意欲をすでに失っていたクラウゼンは、ゾルゲの最後の電文原稿を発信しなかったのである。

二つの祖国に引き裂かれたゾルゲは、いったいどこへ帰りたかったのであろうか。そして彼は将来に向けて何を望んでいたのであろうか。私はそれをゾルゲの供述の中に求めたいと思う。1942年3月、大橋秀雄特高警部補の訊問に答えて、ゾルゲは「現在の心境」と「将来の方針」を明快に述べている。

——「私はもし将来に対する希望を持つことを許していただけるなら、もちろんのこと、私はモスクワに帰らしていただきたい。そして私はモスクワに帰って私が今日まで続けてきた勉強すなわち歴史および学問（＝社会科学）の研究を続けたいと思います。私は一面、学徒、教授というような面をもっております」。

——「もし私がモスクワに帰れなかった場合は、日本において著述あるいは新聞に寄稿することにより生活していきたいと思います。日本にいななければならないという場合は、もはや絶対に秘密の仕事をしようとは思いません」。

——「事件に関係した友人、とくに尾崎、宮城の二人およびすでに逮捕された日本人に対して日本の官僚が非常に寛大であるということを希望し、かつ祈っております。彼らは実際において清廉で賢明な人間であるとともに勇敢な者であります」。

——「日本の友人たちは、私の秘密の仕事には何ら責任はなく、全責任は私にあるのであります。それ故に私は再度彼らに対して寛大なる処置をお願いするものであります」。

——「外国人のクラウゼンおよびヴェーケリッチに関しては、彼らの今日まで為した仕事は全く私の指揮によるものであります。彼らのやった仕事は主として技術的方面であります。この事件が終わったならば、できる限り早く彼ら自身の家庭へ帰ってくださることを熱望する次第であります」⁽¹³⁷⁾。

ゾルゲはモスクワに帰りたかった。帰るべきモ

スクワは、おそらく1929年以前の、スターリン体制以前のモスクワであったろう。それができなければ日本に踏みとどまりたかった。日本に踏みとどまって、日本研究、とくに日本歴史の研究に専念したかったであろう。「私は一面、教授というような面をもっております」とゾルゲが語っているように、彼は1920年にハンブルク大学国家学博士の学位を取得していた。1923-24年にはフランクフルト大学社会学部助手になっている。それは、おそらくヴァイル父子の創設にかかるフランクフルト社会研究所の前身であったであろう（1922年ヘルマン・ヴァイルを会長にして「社会研究協会」が設立されているが、その会員名簿にゾルゲの名が記載されている。フランクフルト社会研究所は1924年に発足する）⁽¹³⁸⁾。ゾルゲは自分の持っているもう一つの側面、つまりアカデミシヤンの生活に没頭したかったであろう。

ゾルゲは逮捕されたあとも、釈放に一縷の望みをもっていった。ソ連当局が動いて、捕虜交換の条件などを提示し、自分を釈放するように日本政府に働きかけてくれるのではないか。ゾルゲ・グループの情報組織と情報内容に関する詳細な供述が得られたら、日本政府がゾルゲを拘留しておく意味は薄れる。日本政府の外交筋ならびに軍部筋はソ連大使館にたびたび掛け合ってはみたが、回答は冷淡な拒絶であった。「リヒアルト・ゾルゲなる人物に、当方は心当たりがありません」⁽¹³⁹⁾。

スターリン＝ソヴィエトは情報スパイ網を張り巡らしている事実を認めようとしなければかりか、ゾルゲが独ソ戦の正確な事前情報を送って警告を発したにもかかわらず、スターリンはこれを信用しなかった。信用しないことによって、独ソ戦は苦戦を強いられた。これはスターリンの失態である。この失態を知っているゾルゲは、肅清される運命の下におかれたのである。救いの手はもはやない。ゾルゲは熱い思いをもって、ヒトラー＝ドイツの侵攻から祖国ソ連を防衛しようとした。スターリンのこの失態を知っているゾルゲは、偉大な指導者スターリンを脅かす存在とみなされた。

要するに、スターリン権力は、その失態を知っているゾルゲを見殺しにしたのである。それによってゾルゲは帰るべき祖国を失った。

日本政府は、ゾルゲに対するスターリン＝ソヴェートの冷淡な拒絶にあい、ゾルゲ釈放の交渉は無理だと判断し、司法大臣は死刑執行の書面に押印した⁽¹⁴⁰⁾。

31. グループ・メンバーの発覚と情報内容の暴露： 組織崩壊の外的要因と内的要因

1941年9月28日、和歌山県粉河町に住む洋裁師、北林トモが夫芳三郎とともに突如、逮捕された。東京に連行され、麻布六本木署に留置された⁽¹⁴¹⁾。老練な高木警部補が峻烈にして巧妙な取調に当たった。北林トモは、アメリカ共産党に属する日本人との接触について訊問された。北林は1936年までロサンゼルス市内で洋裁の私塾を営んでいた。日本警察は、アメリカを媒介して日本の地下組織が「コミンテルン」（実はソ連政府）と連携をとっていることを知っていた。北林は、つい口を滑らして、かつて自分の家に下宿していた若き画家、宮城与徳の名を漏らしてしまった。この洋裁師は1936年に日本に帰ってきたのであるが、そのころから、宮城へのマイナーな情報提供者、周知的な諜報員の一人となっていた。北林がふとしたことから官憲に宮城の名前を告げてしまったその一言が、ゾルゲ・グループのメンバーが連鎖的に検挙される運命の糸口となった。宮城与徳のロサンゼルスにおける下宿のおかみが、これから展開される巨大な歴史ドラマのきっかけを与えたのである⁽¹⁴²⁾。

特高警察の捜査の網は、北林トモから宮城与徳へ、宮城与徳から尾崎秀実へと広がっていき、ついに捜査の網の先にクラウゼン、ヴェケリッチ、ゾルゲというヨーロッパ人諜報グループの存在を発見するにいたるのである⁽¹⁴³⁾。

宮城は、高齢の女性とはいえ（1941年当時北林トモは55歳）、自分の周辺諜報員の一人の不用意な一言から、ゾルゲ・グループの存在が発覚し

たことを知って、痛切に責任を感じて苦しんだ。「自分」が先輩同志や友人を官憲に売り渡した結果になってしまったことは、連絡方法に不用意があった、人間として至らぬ点があったと自責の念に駆られた。宮城は、1942年1月26日の訊問で、その苦衷を誠実に述べている。それをここに摘記して引用しておくべきであろう。宮城は検挙された翌日の1941年10月11日、監視の目を盗んで、警察署の窓から飛び降り自殺を図ったが、未遂に終わってしまった。それは訊問拒否をするために命を捨てる策に出たものであった。

——「玉沢検事が私が自殺を企図したのに対して「自殺する意志があったか、逃走する目的であったか」とのお尋ねであったが、私は泥棒ではありません。逃げたり隠れたりする意志はもちろんありません」。

——「私の同志たちが私の自殺によって、この事件が嫌疑程度に終わらせることを願したからであります。自殺という方法によるほか、訊問拒否も不可能と考えたからであります」。

——「また私が検挙によって受ける精神的・肉体的苦痛を同志、尾崎秀実、リヒアルト・ゾルゲに受けさせたくない気持ちも働いていました」。

——「自分が、先輩同志や友人を官憲に売り渡した結果になったことが、自分として平素連絡関係に心を致さず、不用意であったこと、平素の心構えにおいて足りなかったこと、また人間として至らぬ点を痛感し、責任を感じて苦しみました」。

——「私自身はいかなる刑罰に処せられるとも、一国の法律に触れたる以上致し方ないと考えております。ただ尾崎氏の場合、この事件に連座させるにはあまりにも惜しい人物である。有用な人材を現在のような国家困難時代に無意義に日を送らせることを残念に思います」⁽¹⁴⁴⁾。

宮城は最後の最後まで、自己の信念に誠実に生き、死を覚悟した理想主義を貫いた人物である。尾崎は、法廷で宮城が死んだことを告げられ（宮城の獄死は1943年8月2日）、立ち上がれないほどの悲しみを覚えた。「彼は実にいい男でした。彼

の絵は色彩が特異なもので、それにどの絵も独特の淋しさを持っている。全く天涯の孤客で、郷里の沖縄からは誰も遺骸引き取りに来なかったそうです。忽ち秋風に乗ってまた天涯に去ってしまった」(1943.9.11 獄中書簡)と感懐を述べている。この理想主義者の周辺諜報員の不用意な一言が、「ゾルゲ=尾崎事件」に関係するメンバーを芋づる式に検挙する糸口を与えることになった。「宮城与徳」という名前を漏らした一言が、壮大な歴史ドラマを解くきっかけを与えたのである。この糸口をたぐり寄せて、日本の官憲は、ゾルゲ・グループのメンバーを連鎖的に次々に検挙し、そのメンバー構成を明らかにしていく。その連鎖的メンバー構成は特異な組織であるといってよく、むしろ個々のメンバーを結び目の単位にしたネットワークといったほうが適切であろう。理想主義者、宮城の糸の綻びは、意外にも、その周辺部の末端諜報員の一言にあった。

一方、実務主義者のクラウゼンは中心組織の内部にあって重要な役割を担っていたが、「実業」の利益の一部をグループの費用に回せとの上級の命令に離反し、組織から離脱しようとしていた。彼は、諜報活動よりも「実業」の利益のほうに多大な魅力を感じ始めていた。コミュニズム思想は、もはや彼の心を捉えるものではなくなっていた。上級から命令された任務を忠実に遂行する意欲は、次第に失せていった。クラウゼンは「ゾルゲは自分を小僧扱いにする」と「手記」でその不満を述べているが、ゾルゲとの人間関係にヒビが入り始めると、会計簿もつけなくなった。ゾルゲの書いた電文原稿を破棄する、全く送信しない、遅らせる、曖昧な表現に改変して送信する、あるいは原稿を削除して一部しか送信しないという行動をとった。リーダーに対するフォロワーの隠微な、しかも致命的な離反である。その結果、無線技師クラウゼンの検挙後、その自宅から情報手段としての通信機器類が発見されたばかりでなく、大量の電文原稿が発見されたのである。組織から離脱しようとした実務主義者の線からは、諜報=

情報グループの「情報手段」と「情報内容」が暴露されていくことになる。

グループ・メンバーの周辺部から人的連鎖の構造が見え始め、グループ・メンバーの中心部からは情報手段と情報内容が暴かれていく。それは長期にわたる訊問と供述の熾烈な人間ドラマの開幕を告げるものである。その過程において、この両サイドから次々に明かされていく個々の事実を集約していけば、そこには、隠された巨大な情報事件が陰画のように黒い姿を現してくる。その姿の正体をさぐっていくと、そこに現出するものは、情報活動を軸に世界的規模で繰り広げられた驚くべき現代史のドラマであった。

これまでの叙述から推察されるように、ゾルゲ=尾崎事件の黒々とした巨体の「正体」を一言にして述べれば、それは「スターリン=ソヴィエトの軍事情報機関の日本に対する情報戦略」であったと言い得られよう。その戦略のためにフォーマルに配置された情報機関のリーダーがゾルゲであり、技術面を受け持ったフォーマルな部下がマックス・クラウゼンである。革命的理想主義を抱いていたヴァーケリッチ、宮城与徳は、その理想主義のゆえに、世界各地に張り巡らされていた「機関員」によって、この戦略に動員された。尾崎秀実にわたりをつけた宮城与徳も、ゾルゲの指令によって、図らずも「機関員」の役割を担うことになった。しかも、彼らメンバーは、ソ連軍事情報機関の計画的配置のシナリオに沿って動員されたのである。世界各地から動員されたメンバーの見ず知らずの関係は、相互の人間関係を内在させる「集団」を形成するものではなく、いわば「他人の関係」で成り立っていた。この点において、このメンバー構成は特異な構造をもっていたのである。以上が、私がたどり着いた暫定的な結論である。

私の「ゾルゲ=尾崎事件」のストーリーも、円環の始めに戻った。このストーリーは円環を描く

ような語り口でここまでたどり着いた。グループ・メンバーの検挙から官憲の訊問と供述、裁判の過程もまた、別の問題群を構成するはずである。本稿は、冒頭に設定したいくつかの問題に対して、社会学的視点からささやかな解明を試みたものにすぎない。これらの設定した問題に対して、どの程度答えることができたかは覚束ないが、語るべきことは、一通り語り尽くしたように思う。ストーリーは円環の始めに戻った。円環は閉じ始めた。ここで私はひとまず筆を擱くことにする。

註

- (1) 尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』岩波書店、2003年、135-36頁。なお、史資料からの引用は、原則として、新漢字、新仮名遣いに改めた。この点を予めお断りしておきたい。
- (2) 尾崎秀実『ゾルゲ事件 上申書』岩波書店、2003年、40頁。
- (3) 司法省昭和17年5月16日午後5時発表。原文はF.W. ディーキン = G.R. ストーリー、河合秀和訳『ゾルゲ追跡』上、岩波書店、2003年、12-19頁の訳者注に引用されている。『現代史資料』1(ゾルゲ事件) みすず書房、1962年、539-42頁にも全文が収録されている。内務省警保局保安課「ゾルゲを中心とせる国際諜報団事件」『現代史資料』1、110頁以下に詳しい説明がある。なお各界のこの事件に関する意見は「国際諜報団事件に対する意嚮に就て」1942年5月17-18日、『現代史資料』24に紹介されている。
- (4) ロバート・ワイマント、西木正明訳『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』上、新潮文庫、2003年。著者ワイマントは、イギリス・タイムズ紙の東京支局長を務めた人であるが、スマトラ沖地震の津波に巻き込まれ、2004年12月26日スリランカで死去した(60歳)。『朝日新聞』2005年1月12日付。
- (5) ディーキン = ストーリー『ゾルゲ追跡』上、訳者注、12-19頁。
- (6) この間の吉河光貞の談話は、小尾俊人「ゾルゲ断章(1)」『現代史資料』1の資料月報に収録。
- (7) 大橋秀雄の談話は同上月報に収録。大橋「私はゾルゲを捕らえた」『サンデー毎日』1961年7月2日号。
- (8) 吉河光貞の非米活動委員会での証言。全文は、小尾俊人「歴史のなかの「ゾルゲ事件」」『現代史資料』1、537頁の解説に収録されている。アメリカの非米活動委員会の聴取り調査は、House of Representatives, 82nd Congress, First Session: Un-American Activities Committee, *Hearing on Un-American Aspects of the Richard Sorge Spy Case*, Washington Government Printing Office, 1951.
- (9) 尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』岩波版、388頁。
- (10) 尾崎秀実の竹内金太郎弁護士宛遺書(昭和19年7月26日付)、『愛情はふる星のごとく』岩波版、394-99頁。
- (11) 尾崎秀実の昭和19年7月17日付書簡、『愛情はふる星のごとく』岩波版、331-36頁。
- (12) 尾崎英子「夜明けの近きを信じつつ」『愛情はふる星のごとく』岩波版、401-05頁。
- (13) 松本慎一「尾崎の獄中書簡について」『愛情はふる星のごとく』岩波版、420-26頁。松本「尾崎秀実について」(1946.5.23)(現在は『愛情はふる星のごとく』岩波版に収録)は、世界評論社版『愛情はふる星のごとく』初版に付されたすぐれた解説であるが、当時の政治的圧力によって、この解説は第2刷から削除され、「尾崎の獄中書簡について」に差し替えられた。
- (14) ロバート・ワイマント、西木正明訳『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』上・下、新潮文庫、2003年(原著はRobert Whyman, *Years of the Snake: The Search for the Real Richard Sorge, Stalin's Greatest Spy*, 2vols., 1995)。
- (15) ディーキン = ストーリー、河合秀和訳『ゾルゲ追跡』上・下、岩波書店、2003年。この著書の元の版は、『ゾルゲ追跡: リヒャルト・ゾルゲの時代と生涯』筑摩書房、1967年; 筑摩叢書、1980年(原著はF.W. Deakin and G.R. Storry, *The Case of Richard Sorge*, Chatto and Windus, 1957, 1966)。以上の要

- 約は、この二著によっている。ウイロビー調査とは、C.A.Willoughby, *Shanghai Conspiracy: The Sorage Spy Ring*, E.P. Dullin and Company, Inc., 1952.
- (16) 石川達三『風にそよぐ葦』前篇、新潮文庫版、1955年、86-88頁（このノンフィクション的小説は、『毎日新聞』に1949年4月から11月まで、1950年7月から51年3月まで長期連載された）。
- (17) 清沢冽『暗黒日記 1942-1945』岩波文庫版、244頁。
- (18) 松本慎一「尾崎の獄中書簡について」『愛情はふる星のごとく』岩波版、420頁。
- (19) 風間道太郎『尾崎秀実伝』法政大学出版局、227-343頁。
- (20) 松本慎一「尾崎秀実について」『愛情はふる星のごとく』岩波版、406-07頁。
- (21) 松本慎一「尾崎秀実について」『愛情はふる星のごとく』岩波版、407-08頁。
- (22) ジョン・ダワー、三浦陽一・高杉忠明訳『敗北を抱きしめて』上、岩波書店、2001年、248-49頁。尾崎と高田正裁判長が向かい合って昼飯を食べて歓談したことは、1944年6月14日付の尾崎の獄中書簡に書かれている。
- (23) 大本至『雑誌で読む戦後史』新潮社、1985年、20-23頁の「世界評論」の項。
- (24) 尾崎秀実「竹内金太郎宛遺書」『愛情はふる星のごとく』岩波版、394-99頁。ほぼ時を同じくして『人民評論』にも尾崎の獄中書簡が公表された（「愛情は降る星の如く——獄中通信」『人民評論』1946年2月）。
- (25) 朝日新聞社編『ベストセラー物語』上、1978年、31-39頁の多田道太郎の解説。
- (26) 尾崎秀実の昭和19年4月7日付獄中書簡。『愛情はふる星のごとく』岩波版、216-19頁。
- (27) ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』上、244-50頁。
- (28) 出版ニュース社編『出版データブック 1945-96』出版ニュース社、6-11頁。
- (29) 朝日新聞社編『ベストセラー物語』上、32頁。尾崎秀実の『愛情はふる星のごとく』にはいくつかの版がある。それを注記しておく。①『愛情はふる星のごとく』世界評論社、1946年=73通プラス遺書。②『愛情はふる星のごとく』上・下、三笠文庫、1951年=238通プラス遺書。③『愛情はふる星のごとく』カッパブックス、1960年=世界評論社版の復刻（尾崎英子、松本慎一、柘植秀臣の解説を付す）。④『尾崎秀実著作集』第4巻、勁草書房、1978年=243通プラス堀川弁護士宛2通。⑤『愛情はふる星のごとく』上・下、青木書店、1985年=238通プラス遺書（もとは青木文庫、1953年、内容は三笠文庫版とほぼ同じ）。⑥『愛情はふる星のごとく』岩波現代文庫、2003年=世界評論社版収録の73通に53通を加えた126通プラス遺書。ほかにも抄録版がある。
- (30) 昭和16年10月15日、尾崎秀実司法警察訪問調書、『現代史資料』2、99-102頁。
- (31) ディーキン=ストーリー『ゾルゲ追跡』下、13頁。
- (32) ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』第7章。高橋与助特高警部の訪問に対して、尾崎は「蘭印代表の某から、ドクター・ゾルゲと紹介され、名前はドイツ人ゾルゲであることを知りました」と答えている（昭和16年10月27日、尾崎秀実司法警察訪問調書、『現代史資料』2、106-07頁）。尾崎はこのヨセミテ会議に出席した際に、同会議に出席していた近衛側近の西園寺公一、牛場友彦と友人となり、日本政府中枢へ入り込む足がかりをつかんだ。
- (33) 「リヒアルト・ゾルゲの手記2」リヒアルト・ゾルゲ『ゾルゲ事件 獄中手記』岩波書店、2003年、84頁。『現代史資料』1、142頁。
- (34) 昭和17年7月15日、ゾルゲ予審判事訪問調書、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、328-33頁。
- (35) 同上書。
- (36) 「リヒアルト・ゾルゲの手記2」『ゾルゲ事件 獄中手記』110-11頁。『現代史資料』1、153-54頁。ここで赤軍第四本部について注釈しておく。赤軍第四本部は、情報部（のち機密部、特別課）を通じてソ連中央委員会政治局に従属していた。それはソ連の軍事情報機関の6つの部局の一つで、ソ連国境外に機関員、諜報グループ、連絡機関の網を張ることを主要な任務としていた（ディーキン=ス

トリー『ゾルゲ追跡』上、89頁)。ゾルゲは「手記」の中で次のように説明をしている。「第四本部は軍事諜報だけを専門とする狭い範囲の諜報機関だと考えるのは当たらない。それはかなり広い範囲にわたって活動し、絶えず優秀な職員を補充採用し、かつ高度の技術的水準を備えた諜報機関である。純粋な軍事情報はそのたくさん持っている活動面の一部にすぎない。一般的な軍事問題、軍事行政および軍事経済問題に関する諜報を集めている。第四本部には在外大使館の陸軍武官、軍事委員会、戦時経済委員会、秘密諜報班、スパイ団からもたらされる報告が集まっている。同部には政治課があって、入ってくる情報を要約して軍と党の指導者たちに見せる。党指導者と赤軍とはソヴィエト連邦の建設当初から緊密に協力しあってきている」(「リヒアルト・ゾルゲの手記(2)」『現代史資料』1、211-12頁)。マックス・クラウゼンは、赤軍第四本部から命じられて諜報活動についてのであるが、クラウゼンは赤軍第四本部をどう理解していたか。「赤軍第四本部とは、ソ連邦政府に属する赤軍のうちで、とくに諜報活動を為すためにつくられた特種秘密機関なのであります。隊長は当時ベルジン大将であったと思います。第四本部の組織について詳しいことは知りませんが、その中は、極東課、西欧課、近東課等に分かれております。ほかにアメリカ方面を管掌する課があったかもしれません。私が関係したのは極東課すなわち日本、支那等をつかさどる課と、西欧課すなわちドイツ、イギリス、フランスをつかさどる課でありました。この赤軍第四本部から各国にスパイが送られておったことは明らかであります。これとは全然別にコミンテルンが各国にスパイを放っていることは明らかであります。モスクワから上海に派遣せられたのは、赤軍第四本部から命ぜられて、上海における赤軍諜報機関に加わって、無電による諜報活動を為すために派遣せられたものであります」(昭和17年7月23日、マックス・クラウゼン訊問調書、『現代史資料』3、146-47頁)。

(37) 「リヒアルト・ゾルゲの手記2」『ゾルゲ事件 獄

中手記』83頁。

(38) 同上書、130頁。

(39) 同上書、87頁。

(40) 「リヒアルト・ゾルゲの手記2」『ゾルゲ 獄中手記』112頁。

(41) 同上書、175頁。

(42) ディーキン＝ストーリー『ゾルゲ追跡』上、159頁以下。

(43) 昭和17年3月26日、ゾルゲ検事訊問調書、検事・吉河光貞、『現代史資料』1、302-03頁。

(44) 昭和17年12月15日、ゾルゲ予審終結決定、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、489-503頁。昭和18年9月29日、ゾルゲ東京地裁判決文、裁判長判事・高田正、判事・樋口勝、判事・満田文彦、『現代史資料』1、507-32頁。

(45) ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』の「大いなる代償」の章を参照。

(46) ゾルゲは再三「世界革命と私どもの活動とを関連せしめる点は認めるわけにはいかない」と主張している。昭和17年3月26日、ゾルゲ検事訊問調書、検事・吉河光貞、『現代史資料』1、300-02頁。昭和17年11月25日、ゾルゲ予審判事訊問調書、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、475頁。

(47) 昭和17年7月29日、ゾルゲ予審判事訊問調書、予審判事・中村光三。昭和17年8月4日、同訊問調書、『現代史資料』1、350-60頁。

(48) 尾崎秀実の堀川祐風弁護士宛の封緘葉書(昭和18年12月7日付)『愛情はふる星のごとく』岩波版、390-92頁。

(49) 昭和16年10月28日、尾崎秀実司法警察訊問調書、司法警察官警部・高橋与助、『現代史資料』2、107-10頁。

(50) 昭和17年3月8日、尾崎秀実検事訊問調書、検事・玉沢光三郎、『現代史資料』2、215-16頁。

(51) 同上書。

(52) 昭和17年7月6日、尾崎秀実予審判事訊問調書、予審判事・中村光三、『現代史資料』2、313-14頁。

(53) 尾崎秀実『ゾルゲ事件 上申書』岩波書店、2003年、33頁。

- (54) 昭和16年10月28日、尾崎秀実司法警察官訊問調査書、司法警察官警部・高橋与助、『現代史資料』2、108頁。
- (55) 同上書。
- (56) 昭和17年7月15日、7月23日、8月4日、ゾルゲ予審判事訊問調査書、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、328-32頁、338-39頁、354-57頁。
- (57) 昭和17年8月4日、ゾルゲ予審判事訊問調査書、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、354-58頁。
- (58) 昭和16年10月27日、宮城与徳警察訊問調査書、『現代史資料』24、377-80頁。
- (59) 昭和16年10月27日、尾崎秀実司法警察官訊問調査書、『現代史資料』2、105-06頁。
- (60) 尾崎は恩師の上杉慎吉教授にしばしば触れているが、この引用は、『愛情はふる星のごとく』岩波版、243頁。
- (61) 昭和17年3月5日、尾崎秀実検事訊問調査書、検事・玉沢光三郎、『現代史資料』2、198-99頁。
- (62) 昭和17年2月16日、尾崎秀実司法警察官訊問調査書、『現代史資料』2、131-32頁。
- (63) 昭和16年10月31日、尾崎秀実司法警察官訊問調査書、『現代史資料』2、116-17頁。松本慎一は「尾崎秀実について」『愛情はふる星のごとく』岩波版、410頁以下で、この点をとくに強調している。本稿の最後の部分で実証的な裏づけを与えたい。
- (64) 緒方竹虎と尾崎との関係は、『愛情はふる星のごとく』岩波版、343頁などに散見する。
- (65) 尾崎が美食家で、女性関係が派手であったことについては、風間道太郎『尾崎秀実伝』193-97頁。新聞記者としての尾崎について、上海支局で机を並べた宮崎世竜はいう。「ニュースを素早くキャッチして、それをセンセーショナルな記事にまとめて本社へ送るというようなことは、尾崎は得意ではなかった。いわゆる電報マンにはなれなかった」。当時の社会部長鈴木文史朗はいう。「社会部記者としての彼は、特ダネをとることも文章を書くことも全くダメであった。新聞原稿として書くものはいずれも平凡であり、何の特色もないと思っていた」。一高の先輩羽仁五郎は尾崎に向かっていう
- 「学芸部あたりで仕事をするを喜ぶのは赤門的アカデミズムの特権意識が、まだきみの中に残っている」。新聞記者としての尾崎は不評であった。何年やっても新聞記者業は上達しなかったという(風間道太郎『尾崎秀実伝』85-88頁)。尾崎はかつての社会部長鈴木文史朗に一矢を報いている。「太田正孝とか鈴木文史朗とかいったような古い先輩たちの時局評論はひどいものです。イタリアの政変のことなど、雑誌が現れるときには書いたことと反対の結果がはっきり出るので、まことに悲惨です。これらの古い人々には分からなくなったのでしょう」(尾崎『愛情はふる星のごとく』1943.9.14)。いかにも尾崎らしい。
- (66) 尾崎には中学時代の旧友が少なかった。『愛情はふる星のごとく』岩波版、158頁。
- (67) 同上書、312頁。
- (68) 尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』岩波版、53-54頁。
- (69) 同上書、56頁。
- (70) 同上書、57-58頁。
- (71) 同上書、136-37頁。
- (72) 同上書、140頁。
- (73) 同上書、141-42頁。
- (74) 「尾崎秀実の上申書(2) 昭和19年2月29日」尾崎秀実『ゾルゲ事件 上申書』岩波版、86頁。
- (75) 昭和17年4月14日、尾崎秀実検事訊問調査書、検事・玉沢光三郎、『現代史資料』2、285-88頁。
- (76) 昭和17年2月14日、尾崎秀実司法警察官訊問調査書、司法警察官警部・高橋与助、『現代史資料』2、128-29頁。東亜協同体論については、尾崎秀実「「東亜協同体」の理念とその成立の客観的基礎」『中央公論』1939年1月号。尾崎は、「東亜協同体の理念を伴った実践が発展するかどうかは、日中の抗争や国際関係にも拠ろうが、その最大の問題は日本国内の推進勢力が結集するかどうかにかかっている」と指摘している。1937年7月7日、廬溝橋で日中両軍の銃撃戦が勃発した。日中戦争の開始である。尾崎は、この戦争は不可避的に大規模戦争に発展すると見通していた。事実、この戦争は

そのようになった。尾崎はいう。「私は昭和12年7月11日、北支事変に対する日本の強行決意が決定せられたとき、支那事変の拡大を早くも予想したのみならず世界戦争へ発展することを断定し、それのみか、私の立場からして世界革命へ進展すべきことをすら暗示したのであります」（「尾崎秀実の上申書（1）」尾崎秀実『ゾルゲ事件 上申書』岩波版、39頁）。ドイツ大使館はこの戦争は短期に終わると見ていたが、ゾルゲは尾崎の意見を採用して「戦闘は長期にわたる」と打電している。1937年、尾崎は昭和研究会に参加しているが、それについてはここでは触れない。

- (77) たとえば、鶴見俊輔「翼賛運動の設計者」思想の科学研究会編『共同研究 転向』中、平凡社、1960年。鶴見『戦時日本精神史』岩波書店、2001年、73-94頁の「大アジア」の章。鶴見は、「尾崎は獄中で私は順逆を誤ったと書いています。これは、ゾルゲ・グループの一人として活躍するよりも、自分は、中国問題を専門とする評論家兼首相への助言者の役割を通して、中国との戦争をやめさせる目的のために力を集中すべきであった、という彼の反省を示すものと考えられます」と書いている。卓見である。鶴見はまた、同章の中で簡潔に尾崎論を述べている。
- (78) 「尾崎秀実の上申書（1） 昭和18年6月8日」尾崎秀実『ゾルゲ事件 上申書』岩波版、33-34頁。
- (79) ディーキン＝ストーリー『ゾルゲ追跡』上、岩波版、120-33頁。
- (80) ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』上、新潮文庫版、92-98頁。
- (81) 昭和17年7月28日、ゾルゲ予審判事訊問調書、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、347-50頁。「ベルジンがまた外国へ行ってもらわなければならぬ。いずれを希望するかと申しました。私は、三つあり、北支、満州と答え冗談半分に東京だって悪くないと答えました」とゾルゲは述べている。第9回ゾルゲ予審判事訊問調書も参照。『現代史資料』1、345頁。
- (82) 「リヒアルト・ゾルゲの手記（2）」リヒアルト・ゾ

ルゲ『ゾルゲ事件 獄中日記』岩波版、175頁。

- (83) 昭和17年8月6日、ゾルゲ予審判事訊問調書、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、360-61頁。ゾルゲの同様な陳述は、昭和17年2月26日、ゾルゲ検事訊問調書、検事・吉河光貞、『現代史資料』1、250頁。
- (84) 同上訊問、同上書、361頁。「リヒアルト・ゾルゲの手記（2）」前掲書、176頁。ここでベルジン將軍とウリツキー將軍について注記しておこう。ベルジンは赤軍第四本部の創設者で初代部長であった。ロシア革命の伝説的人物で、赤軍高級将校を象徴する代表格であった。1890年ラトヴィアの貧しい農民の子として生まれ、努力して師範学校で学んだ。1919年ソ連保安機関で経験を積み、1920年11月ベルジンは赤軍第四本部の部長に任命された。ゾルゲがベルジンに会った頃、ベルジン自身が国外における秘密任務の経験に裏づけられた情報活動の達人であった。ベルジンは、ゾルゲが新聞記者としての経験を持っていることに興味を持った。その経験は国外活動のための偽装として使えるからである。1935年ゾルゲがモスクワに着くと第四本部は大きく様変わりしていた。同僚の大半が姿を消していた。最大の変化は、ベルジンの部長解任であった。彼が尊敬していた「おやじさん」ベルジンは、ウリツキー將軍に交替していた。ベルジンは極東司令部、そしてスペインに赴任したが、1937年スペインからモスクワに召還されて、銃殺された。ウリツキーは、ゾルゲと同じ1895年に生まれた。1919年、赤軍情報参謀部の作戦部長に任命された。彼の経歴は武官としてのそれであり、高級赤軍指揮官として武名をあげた。赤軍第四本部の部長任命は、党中央委員会と国防人民委員部の部長によって行われた。ウリツキーは1937年11月の夜、GPU(政治警察=国家政治保安部)に逮捕され、それから間もなく銃殺された(ディーキン＝ストーリー『ゾルゲ追跡』上、89頁以下、269頁以下)。ベルジンもウリツキーも、スターリン権力によって粛清されたのである。
- (85) ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』上、162-63頁。

- (86) 昭和17年8月6日、ゾルゲ予審判事訊問調査、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、362頁。尾崎秀実の情報源の最大で最良の情報源は「近衛側近」であるが、この問題については別稿で論じなければならぬテーマである。ここでは西園寺公一、犬養健の名を上げるだけにとどめる。
- (87) デイーキン = ストーリー『ゾルゲ追跡』上、163-66頁。
- (88) ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』上、99頁。
- (89) 昭和17年1月24日、ゾルゲ検事訊問調査、検事・吉河光貞、『現代史資料』1、228-29頁。
- (90) 昭和17年2月24日、ゾルゲ検事訊問調査、検事・吉河光貞、同上書、241頁。
- (91) 昭和17年1月24日、ゾルゲ検事訊問調査、同上書、228頁。昭和17年7月25日、ゾルゲ予審判事訊問調査、予審判事・中村光三、同上書、348-49頁。ゾルゲが『地政学雑誌』に寄稿した論文8本(1935-39年発表)は、『現代史資料』4(みすず書房、1971年)に記載されている。
- (92) デイーキン = ストーリー『ゾルゲ追跡』下、45-49頁。
- (93) 昭和17年7月28日、ゾルゲ予審判事訊問調査、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、348-49頁。
- (94) 昭和17年2月10日、ゾルゲ検事訊問調査、検事・吉河光貞、同上書、230頁。
- (95) 同上書、236-37頁。
- (96) 同上書、233頁。
- (97) ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』上、118-19頁。
- (98) 昭和17年2月10日、ゾルゲ検事訊問調査、検事・吉河光貞、『現代史資料』1、227頁。ゾルゲの証言は以下の通りである。「ドイツ大使館関係者たちから絶大な信任を得たということは、日本における私の今次諜報活動のための基礎となったことでありまして、私はこの基礎の上に立ってこそ始めて自分の諜報活動を遂行することができたのであります」。
- (99) 吉河光貞の非米活動委員会での証言(1951年8月)は、小尾俊人「歴史のなかの「ゾルゲ事件」」『現代史資料』1の引用に拠る。原文は、*Hearings on Un-American Aspects of the Richard Sorge Spy Case*, U.S. Government Printing Office, 1951, pp.1130-1255に収録されている。
- (100) 「吉河の語ったままの言葉」は、デイーキン = ストーリー『ゾルゲ追跡』下、152-55頁。
- (101) 「吉河からの聴取り」は、ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』下、321-24頁。
- (102) 小尾俊人、前掲論文、『現代史資料』1所収、547頁。
- (103) ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』下、325頁。
- (104) 同上書、325頁。
- (105) 「フランコ・ド・ヴーケリッチの手記」『現代史資料』3、621-26頁。「ヴーケリッチ警察訊問調査」『現代史資料』24、331-39頁。
- (106) 「フランコ・ド・ヴーケリッチの手記」同上書、628頁。
- (107) 昭和17年4月1日、宮城与徳検事訊問調査、検事・吉岡述直、『現代史資料』3、311-12頁。昭和17年4月12日、「宮城与徳手記」『現代史資料』3、314-15頁。「宮城与徳警察訊問調査」(昭和16年10月11日、築地警察署)によれば、宮城とゾルゲとの連絡方法は次のような手順で行われた。「矢野からジャパン・アドバタイザーに「浮世絵買い入れたし」という広告が出る。その広告社へ行って広告主に会えるように取り計らってもらえ、広告主はマックスという人だ、との連絡方法を指示されていました。昭和8年11月中旬東京に来てジャパン・アドバタイザーを注意しておりますと、「浮世絵買い入れたし」との広告が出ました。神田区錦町の広告社へゆき、広告主に面会を依頼しました。その後その広告社において一人の外国人(=ヴーケリッチ)に会うことができました。「マックス(=ゾルゲ)さんですか」と訊ねますと、同人は「自分はマックスではないが、きみが会いたいというマックスには上野公園の美術館前で会うことができる。彼は青いネクタイをしている。きみは黒いネクタイをしてゆくように」と指示し、その連絡の日時を指定されて別れました。指定された同年11月下旬、上野美術館前においてマックスという男と連絡ができました。「マックスはスミスとい

う連絡名を使っておりましたが、昭和15年頃より
 同人の自宅麻布区永坂付近にゆくようになってから
 「ゾルゲ」という本名を知るようになりました」
 (『現代史資料』24、374-75頁)。

- (108) 「宮城与徳手記」同上書、317頁。
- (109) 昭和17年3月30日、宮城検事訊問調書、検事・吉岡述直、『現代史資料』3、308-09頁。
- (110) 昭和17年7月25日、クラウゼン予審判事訊問調書、予審判事・亀山脩平、『現代史資料』3、152-53頁。
- (111) クラウゼンは、ゾルゲのオートバイ事故のとき、彼が運び込まれた聖路加国際病院に電話で呼び出された。彼は、この有名なゾルゲの泥酔によるオートバイ事故を次のように語っている。「ゾルゲは昭和13年5月13日金曜日の朝オートバイを駆ってアメリカ大使館前を疾駆中、運転を誤って石に衝突し顔に大怪我をしたのであります。前歯がほとんど全部打ち砕かれ上唇や額にも酷い傷を受け、通常人ならば当然気絶してしまうのですが、ゾルゲはそのときポケットに諜報活動に関する重要な秘密書類があったためか極めて意識がはっきりしていたらしく、私が病院から電話で呼ばれて病院へ駆けつけたときにも、口はきけなかったけれども意識ははっきりしており、ポケットにあった重要秘密書類等を私に手渡して私がそれを受け取った後、間もなく気を失ったのであります。彼は非常に強い気性の人だとそのときも感じました」(『現代史資料』3、181頁)。
- (112) 本名はセルゲヴィッチ・ザイチェフ。戦後の1947年、ワシントン駐在のソ連大使館新聞担当官になった人物。ゾルゲ事件関係者がアメリカ駐在ソ連外交官となっていることに、当時のアメリカ当局は気づかなかつたらしい(ディーキン=ストーリー『ゾルゲ追跡』下、58-59頁)。
- (113) この4人の受け取った給料は、1940年11月を例にとれば、以下のごとくであった。クラウゼン=955円(家賃、特別手当を含む)、ヴーケリッチ=200円、エディット=450円、ゾルゲ=1,000円。エディットは、ヴーケリッチの妻でいた間は支払われなかったが、ヴーケリッチと離婚し一戸を構え

るようになってからは、その家を「無電操作の場所」として使用し、また定職がなかったので特別に生活費を与えられた。クラウゼンの場合、1939年の営業収入は14,000円。1941年M.クラウゼン商會を合資会社にしてからは、給料800円。生活には余裕があり、毎月相当の額の剰余が生じた。グループへの忠誠心があれば、上級機関からの「指令」、つまり諜報活動の不足分を彼の営業利益の一部から充当することは、「決してできないことではなかった」(クラウゼンの自供)。年取で見ると、高額所得者の尾崎秀実とほとんど変わらない。クラウゼンは、その余った金をビジネスにつき込んだ。諜報活動から脱けたいと考えて、事業に力を入れたのである。「東京へ来てからは事業のほうが目白くなった」。1941年の初め以来、上級機関の命令に従うことを拒否し、そのために精神的に悩み、諜報活動にやる気を失っていく。上級の命令への反発とビジネスの面白さの狭間に立たされて、クラウゼンはその葛藤を酒で紛らすようになった。なお、ヴーケリッチのヴァース通信社東京駐在補助員としての月給は800円であった。800円の月給をもらえるようになったとき、ヴーケリッチの第四本部からの給料は半額の100円に減額された。給料についてのクラウゼンの資料は、『現代史資料』4、264-68頁。クラウゼンの事業と生活については、『現代史資料』3、227頁。尾崎秀実、宮城与徳の給料(固定給)はゼロであった。ただし臨時の旅費や交通費の実費は支払われた。料理屋やレストランなどでのゾルゲと尾崎の飲食費はゾルゲが支払った。会計上の支払いについてのクラウゼンの供述は、『現代史資料』3、225-26頁。ヴーケリッチの収入については、『現代史資料』24、363、367頁。

- (114) 昭和17年8月4日、クラウゼン予審判事訊問調書、予審判事・亀山脩平、『現代史資料』3、138-39頁。昭和16年12月29日、クラウゼン警察訊問調書、『現代史資料』4、273頁。クラウゼンの無線情報の受信者は、赤軍第四本部である。彼の供述によれば、「直接には赤軍第四本部に通報したのでありま

すが、ソ連政府がこれを利用することは当然であります。私どもはその目的をもって日本へ参ったのであります」(『現代史資料』3、205頁)。

- (115) 「マックス・クラウゼン家宅搜索の結果発見したる、発信原稿、暗号文及び報告書」『現代史資料』4、91-102頁。
- (116) ゴルゲ「リヒアルト・ゾルゲの手記(2)」『ゾルゲ事件 獄中日記』岩波版、155-57頁。
- (117) 同上書、166-67頁。
- (118) 昭和16年11月19日、ヴーケリッチ警察訊問調書、『現代史資料』24、360-61頁。
- (119) クラウゼンは、ゾルゲの自宅を夕方訪ねて、無電原稿を受け取る、受信した電文の解読文を渡す、モスクワからの資金を渡すなどのことをしている。またクラウゼンは、ヴーケリッチの自宅で無電操作をし、同時にヴーケリッチからフィルムを受け取っている。ヴーケリッチは、ゾルゲ宅には報告すべき情報があればそのつど訪ね、そうでないときは1カ月に一度は訪ねた。ヴーケリッチが最後にゾルゲ宅を訪ねたのは10月17日夕刻で、「オデッサ」陥落のニュースを提報しようと思って出かけた。ゾルゲは階下でクラウゼンと一緒に日本酒を飲んでいて、ゾルゲは心配そうに「ジョー(宮城)が見えない」といった。クラウゼンは、酒を飲むのをやめて、もう駄目だといって帰ってしまった。これが三人が会った最後の状況である。
- (120) 「クラウゼンの手記」『現代史資料』3、68頁。
- (121) クラウゼンは、1941年初め、ゾルゲの命令で帝国ホテルへ行き、そのロビーで尾崎が腰を下ろしている前を通り過ぎたことがある。「全然話してもせず、顔も見なかった」。1941年10月、宮城がゾルゲ宅を訪ねてきたとき、クラウゼンはゾルゲに代わって、宮城が持参した資料を受け取ったことがあるだけであった。
- (122) 昭和17年3月8日、尾崎秀実訊問調書、検事・玉沢光三郎、『現代史資料』2、217-18頁。
- (123) クラウゼンの打電した通信文は、東京通信局と大阪通信局が不審通信として傍受していた。しかし送り手の発信元は特定できず、暗号の解読にも

成功しなかった。また朝鮮総督府通信局も傍受していた。確認された傍受数は東京通信局が24通(1938年8月23日から1941年6月27日まで)、大阪通信局が7通(1939年11月25日から1940年11月29日まで)。「東京都市通信局傍受に係る発信暗号解読訳文(1)(2)」、「大阪通信局傍受暗号解読訳文」『現代史資料』4、73-79頁。ただし、ゾルゲ・メンバーの検挙後、ゾルゲの家宅搜索の結果、発信原稿、資料およびフィルムが発見されている。クラウゼンの家宅搜索の結果、発信原稿、暗号文および報告書が発見されている。そして宮城の下宿から、極秘の満鉄資料が発見されている。ヴーケリッチの自宅からカメラ、フィルムが押収されている。詳細は『現代史資料』24、81-109頁に訳載されている。

- (124) 昭和17年3月11日、ゾルゲ検事訊問調書、『現代史資料』1、274頁。以下の重要情報は、主としてゾルゲの供述ならびに検挙後発見された電文原稿に依拠している。ディーキン=ストーリイ、ワイマントの研究も参照している。無線技師クラウゼンは、1941年以降、諜報活動から離脱しようとしていたので、その供述の信憑性には問題がある。ただし無電を打ったのはクラウゼン本人だったので、その供述は注で触れる。
- (125) ディーキン=ストーリイ『ゾルゲ追跡』下、岩波版、94-95頁。ヒトラーに好意を寄せるように「改心」したクラウゼンの供述によれば、クラウゼンは、ゾルゲの書いた独ソ戦に関する重要な原稿のうち、送信しなかったり、故意に曖昧にしたり、送信を遅らせたりしたものがある。このシヨル情報は送信されなかったかもしれない。しかし、クラウゼンの供述には量刑を軽くしようと意図しているところがあるので、虚偽が含まれているフシがある。また記憶に頼っているので、真偽のほどは分からない。クラウゼンが故意に送信を遅らせた原稿のあることを知らずに、ゾルゲはモスクワからの問いに対して、「もう遅い、攻撃はすでに始まった」といっている(昭和17年8月28日、クラウゼン予審判事訊問調書、『現代史資料』3、190-

91頁)。クラウゼンは、その後、「モスクワへ送ったものはほんのわずか、ゾルゲから渡されたものの多くは破った、開戦の日時を予告した電報は送信した記憶がない」と供述している（昭和17年9月3日、クラウゼン予審判事訊問調書、『現代史資料』3、197-98頁）。ゾルゲとクラウゼンの人間関係にはヒビが入っていた。クラウゼンは、「1941年に入ってゾルゲから受け取った情報原稿の大部分は送信いたしませんでした」と供述している（昭和17年9月3日、クラウゼン予審判事訊問調書、『現代史資料』3、197頁以下）。しかし真偽は分からない。

(126) ここで尾崎の情報源となった、「近衛側近」の西園寺公一と犬養健について触れておく。新聞の公式発表では隠されていたが、西園寺、犬養が検挙されるに至ったその情報源は、尾崎の供述にあるとみてよいであろう（昭和17年2月25日以降の尾崎の供述、尾崎秀実司法警察訊問調書、『現代史資料』2、133頁以下）。西園寺公一は友人の尾崎に、①1940年1月、犬養宅で原稿用紙に万年筆で書き写した「日華基本条約案」（1939年案文）を見せている。また尾崎に、②独ソ戦に対して当面中立を維持しシベリア攻撃をしないとすする御前会議の決定（1941年7月2日の決定）を、「決まったらしいよ、やらぬ方にね」と尾崎に伝えている。さらに、③「日米交渉の近衛案」の草稿を見せている（1941年9月）。これらが国家機密漏洩の疑いがあるとして、西園寺は1942年3月16日に検挙された。法廷は悪意よりも「不注意」から生じたものとして寛大な処置をとり、1943年11月西園寺に懲役1年6カ月、執行猶予2年を科したが、戦争終結によって、刑は執行されなかった。西園寺は回想している。「僕がこの事件に引っかけたのは、尾崎に汪兆銘（汪精衛）政権との日華国交調整と、日米交渉の近衛案の草稿を見せたという点であった」（風間道太郎『尾崎秀実伝』284-85頁より引用）。犬養健は「日華基本条約案」の立案者の一人であった。1941年1月、西園寺は友人の犬養健から、日華両国間に成立をみた中華民国における

日本軍隊の駐屯、日本艦船部隊の駐留等に関する文書を見せられ、その内容を原稿用紙に書写した。数日後、その文書を尾崎秀実に貸与した。偶然の理由により知得した軍事上の秘密を他人に漏洩した（検事側控訴事実）。尾崎は西園寺から借りた文書を写した。尾崎の写しを宮城が英訳して、それをゾルゲに渡した。これにより犬養は1942年4月4日に検挙され、軍機保護法違反の罪に問われたが、大審院で無罪の判決が言い渡された（ディーキン＝ストーリー『ゾルゲ追跡』下、194-95頁）。「西園寺公一に対する検事訊問調書」「西園寺公一の東京地裁判決文」など西園寺公一に関する原資料は『現代史資料』3に収録。「犬養健に対する検事訊問調書」は『現代史資料』24に収録。

これまでの文脈に即していえば、西園寺が尾崎に漏洩した最大の機密事項は、②の「帝国国策要綱」と③の「対米申入書」の草稿である。つまり、日本はソ連を攻撃しない、太平洋を南進してアメリカと戦うと決定した、機密中の機密事項である。尾崎は、「近衛側近」から、日本政府の歴史的決断を聞き出すことに成功した。尾崎は、国家の最高機密情報をすっぱ抜いた。これを聴いたゾルゲはソ連軍事情報機関に通報した。この情報入手は尾崎にとっては諜報活動の最高の成果であるが、日本政府にとっては最悪の機密漏洩となった。最高機密情報をすっぱ抜かれた事実を知った東条政権（1941年10月18日成立）は、これだけで、尾崎を生かしてはおけない、抹殺しなければならないと肚を決めたものと推測される。このことに関連した記述は、ディーキン＝ストーリー『ゾルゲ追跡』下、243頁。この問題については、さらに検討を要する。

(127) クラウゼンの供述によると、「この原稿は送信いたしませんでした。しかしこの内容とほとんど同一内容の情報は送ってあります」（昭和17年9月3日、クラウゼン予審判事訊問調書、『現代史資料』3、199頁）。だが、クラウゼンの供述の真偽は不明である。前掲「マックス・クラウゼン家宅捜索」『現代史資料』24、96頁。

- (128) ディーキン=ストーリイ、前掲書、107頁。クラウゼンの供述によれば、この情報は「送信いたしました」(昭和17年9月7日、クラウゼン予審判事訊問調査、『現代史資料』3、213頁)。
- (129) クラウゼンの供述によれば、この尾崎情報は「1941年10月4日に送信しました」(昭和17年9月3日、クラウゼン予審判事訊問調査、『現代史資料』3、200頁。前掲「マックス・クラウゼン家宅捜索」『現代史資料』24、97頁)。
- (130) クラウゼンの供述によれば、この情報は「全然送信いたしません」。この供述の真偽は不明である(昭和17年9月4日、クラウゼン予審判事訊問調査、『現代史資料』3、207頁。前掲「マックス・クラウゼン家宅捜索」『現代史資料』4、100頁)。
- (131) 1941年10月15日についてのクラウゼンの供述は、昭和17年9月17日、クラウゼン予審判事訊問調査、『現代史資料』3、229頁。
- (132) 1941年10月17日についてのヴァーケリッチの供述は、昭和16年11月9日、ヴァーケリッチ警察訊問調査、『現代史資料』24、360-61頁。
- (133) 昭和17年9月17日、クラウゼン予審判事訊問調査、『現代史資料』3、229頁。
- (134) 昭和16年11月8日、ヴァーケリッチ警察訊問調査、『現代史資料』24、361頁。
- (135) 昭和17年9月17日、クラウゼン予審判事訊問調査、『現代史資料』3、229-30頁。
- (136) 昭和17年1月18日、ゾルゲ警察訊問調査、『現代史資料』4、178頁。
- (137) 昭和16年12月17日、宮城与徳警察訊問調査、『現代史資料』4、387-89頁。昭和17年11月24日、宮城与徳予審判事訊問調査、『現代史資料』3、408-10頁。
- (138) ディーキン=ストーリイ『ゾルゲ追跡』上、38-42頁。昭和17年7月7日、ゾルゲ予審判事訊問調査、予審判事・中村光三、『現代史資料』1、319-25頁。
- (139) ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』下、379-83頁。ワイマントの依拠している資料は、Leopold Trepper, *The Great Game*, Michael Joseph, 1977。トレッパーは、第二次大戦中、名を馳せたソ連諜報網の「指揮者」であった。その組織は「赤いオーケストラ」と呼ばれた。
- (140) 同上書。ここでゾルゲがソ連政府により見殺しにされたことについて、若干注釈を加えておく。1942年7月以降(中村光三予審判事の訊問により)、日本の司法省は、ゾルゲの正体が「ソ連軍事情報機関の情報将校」であることは分かっていたはずである。にもかかわらず、ゾルゲ・グループの活動を「コミンテルン」支配下の革命運動だと規定した。こうした画策の裏には、ゾルゲの身柄引き渡しをめぐって司法省と軍部との間に抗争があったことを予想させるものがある。ゾルゲが情報将校であるという正体が分かれば、軍部はゾルゲの身柄を憲兵に引き渡せと要求し、ただちに軍法会議にかけ、銃殺刑に処したであろう。司法省としては、多少「事実」を枉げてでも、ゾルゲを自らの手中に収め、長期の訊問と裁判によって、その情報組織と情報内容を詳しく聴き取る必要があった。その上で治安維持法を適用したかったに違いない。ゾルゲ自身も憲兵と軍事裁判を極度に恐れた。しかし、ここで重要な問題が起こる。日本の司法省がゾルゲを「コミンテルンのスパイ」と規定したことによって、ソ連政府はゾルゲを自国とは無関係な人間とみなした。ソ連政府は、「コミンテルン」は国際共産主義組織であって、ソ連一国の統制外にあるという立場に立った。ゾルゲに対しては無関心を装い、「知らない」という態度に出た。「リヒアルト・ゾルゲなる人物に、当方は心当たりがありません」。この時点で、ゾルゲはソ連政府から見殺しにされたのである。ソ連政府のゾルゲ黙殺は、敗戦後の東京裁判でも繰り返す主張される。「ゾルゲがソヴィエトのスパイであったとは決定されておられません」(1948年1月、東京裁判におけるソ連のワシリエフ検事の発言)。その理由は本文中で述べておいた。これに関連した説明は、とくにワイマント、同上書、337頁以下。ディーキン=ストーリイ『ゾルゲ追跡』下、238頁以下、257頁以下。しかし、この問題はさらに検討を要する問題であろう。
- (141) 1939年11月、当時、満鉄東京支社調査室に勤め

ていた伊藤律が特高警察に検挙され拘留されたとき、伊藤は、アメリカ帰りの共産党員について訊問され、ロサンゼルスで洋裁の私塾を経営していた北林トモの名を警察に漏らした。「北林トモを洗ってごらんさい」。この一言が、ゾルゲ・グループ発覚のいとぐちになったとする伊藤律内通説が、以前から主張されている。警察は、北林トモが和歌山県粉河町に住んでいることを突きとめ、1941年9月28日、北林トモと夫の芳三郎を突如逮捕して、東京に連行した。北林トモは、アメリカの日本人党員との接触について訊問され、ロサンゼルス自分の家に下宿していた画家、宮城与徳の名を取調官に告げてしまった。尾崎秀樹『生きているユダ』八雲書店、1959年。ディーキン＝ストーリー『ゾルゲ追跡』下、119頁以下。風間道太郎『尾崎秀実伝』317-21頁、529頁以下。山辺健太郎「ゾルゲ事件と伊藤律」『現代史資料月報』ゾルゲ事件4付録、1971年4月。

(142) ディーキン＝ストーリー『ゾルゲ追跡』下、124頁。

(143) 同上書、140頁以下。

(144) 宮城のこの「心境」については、昭和17年1月26日、宮城与徳警察訊問調書、『現代史資料』24、481頁。宮城は、北林トモについて次のように述べている。「私が北林トモを知るに至ったのは昭和4年頃私がアメリカ、ロサンゼルスにいた当時、私の画の友人より紹介された。当時同人はロサンゼルス西部街で洋裁の私塾をやっていた。その頃私は絵を描くかわら、昭和5年頃、私が勧誘して(北林を)プロレタリア芸術会に加入させた。昭和6年頃、当時ロサンゼルスに滞在していた日本人のアメリカ共産党員が、私は反対したが、押し切って彼女を共産党に入党させた。私は日本人女性と同棲し一戸を構えていたが、昭和7年夏頃(その女性と)別れて以来同人宅に下宿して、昭和8年9月末、日本に帰るまで厄介になっていた。同人は私より遅れて昭和11年秋頃日本に帰った。同人の在米当時の友人の経営する渋谷区のLA洋裁学院に教師として住み込み、昭和14年7月頃夫芳三郎の帰国とともに和歌山県粉河町の郷里に帰住すること

となった」、「LA洋裁学院にいたころは、出征家族の生徒から支那事変等に関する意向聴取、防空演習の状況調査等を依頼した。和歌山に帰住してからは、師団の動静、大阪府、和歌山県の農村状況等の調査を依頼した」(昭和16年12月17日、宮城与徳警察訊問調書、『現代史資料』24、387-88頁)。「北林に対しては女であるしまた老人でもあるので、もとより重要な情報を期待してはいなかった。無理をしないで分かる範囲で気をつけて知らしてくれるようにと、探知を依頼した。ゾルゲに提報したものは、防空演習、大阪地方農村事情等であった。LA洋裁学院に勤めているときは同所に私が訪問して聞いた。粉河町に引っ込んでからは私が旅行して同人宅で聞いた」(昭和17年1月26日、宮城与徳警察訊問調書、『現代史資料』24、479-80頁)。以上のように、宮城は誠実に、北林トモが自分の末端諜報員であることを認める供述をしている。